

茅ヶ崎市博物館研究紀要 1

茅ヶ崎市博物館整備について —地域社会に必要とされる包摂的な博物館を目指して—	須藤 格……………3
収蔵資料の移転と課題について	板垣光星……………19
茅ヶ崎市南部の蛾類と茅ヶ崎市全体の蛾相 および北部丘陵の蛾への追加記録	緒方 隆……………29
純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全（2） ～房全のキリスト教信仰～	名取龍彦……………69
茅ヶ崎における子どもと生業とのかかわりについて	佐藤 彩……………85
堤貝塚出土の注口土器	三戸智也……………99
高座郡家の区画範囲を考える	加藤大二郎……………107
木製品のトレハロース処理 —有機遺物の保存と活用のために—	田中万智……………119
「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」に関する覚書	渡部敦寛……………138

March, 2024

はじめに

茅ヶ崎市博物館研究紀要の第1号をお届けいたします。自然や歴史・文化に関する研究をまとめた紀要を発行できることを、心より喜ばしく思います。

茅ヶ崎市博物館は、本市の新しい博物館として2022年7月30日に開館いたしました。当館の前身である、茅ヶ崎市文化資料館は、1971年7月1日に開館し、51年間にわたり、市民と協力した博物館活動を展開してまいりました。市域の自然や歴史・文化について、調査研究し、多くの資料と情報を収集保管し、展示会やワークショップなどの教育普及活動を展開してまいりました。旧文化資料館では、調査研究の成果を、叢書や資料集、ブックレットとして刊行したほか、1994年から『文化資料館調査研究報告』を30号発行し、貴重な記録や調査研究成果を発信してまいりました。

このたび、茅ヶ崎市博物館では、旧文化資料館での取り組みを継承し発展を目指す取り組みの一環として、『茅ヶ崎市博物館研究紀要』を新たに発行いたします。

本研究紀要は、茅ヶ崎の自然や歴史・文化に焦点を当て、その豊かな多様性を深く追求しています。研究者の皆様の努力と専門知識に支えられ、本紀要は新たな発見と洞察に満ちたものとなりました。

自然や歴史・文化に関する調査研究は、私たちが生きる環境や社会の本質を理解し、現在を見つめなおし、未来を築いていくための基盤となります。

御寄稿いただいた著者の方々に心より感謝申し上げます。皆様の研究がこの研究紀要を通じて多くの方々に届き、新たな知識や洞察を提供できることを期待しております。

今後も、博物館は調査研究と知の交流の場として、皆様と共に成長し続けてまいります。本紀要が、自然、歴史、文化についての知識を深めるとともに、新たな発見や再発見の場となりますよう、心より願っております。

令和6年3月

茅ヶ崎市博物館
館長 須藤 格



富士山を望む



スロープ（西側）



市民交流スペース及び博物館図書室



南側テラス

(画像提供：松田平田設計， 撮影：川澄・小林研二写真事務所)



サマリー展示



ちがさき歴史絵巻



基本展示室



基本展示室



基本展示室

(画像提供：丹青社，撮影：御園生大地)

茅ヶ崎市博物館整備について

一地域社会に必要とされる包摂的な博物館を目指して一

須藤 格*

1 はじめに

令和4年(2022)7月30日、茅ヶ崎市博物館(以下「市博物館」という)は、茅ヶ崎市の新たな博物館として開館した。90,000点を超える収蔵資料の移転・搬入や、駐車場や通路などの外構工事が行われていた中での開館となったが、多くの方々にご来館いただき、開館から17ヶ月間で累計6万5千人を超える来館者があった。本市の人口が約24万人であることや、公共交通のアクセス性が低いことに加え、開館後も駐車場(令和4年(2022)12月完成)や周辺の通路(令和5年(2023)12月完成)が工事中であったにもかかわらず、多くの方の興味関心を得て、来館という行動につながっていると評価できる。Googleの検索インサイトによると、市博物館のホームページの検索回数は令和6年2月時点で13万回を超える検索があり、レビューでは3.6点をいただいている。

本稿では、昭和40年代の高度経済成長期の終わりに整備された博物館が施設老朽化に伴い、新しい博物館として整備・移転した経過を、考察を加えて報告する。

2 茅ヶ崎市文化資料館とその活動の成果と問題点

(1)茅ヶ崎市について

茅ヶ崎市は、東京から50kmあまり西に位置し、神奈川県の中南部にある。東は藤沢市、西は相模川を挟んで平塚市、南は海岸線約6kmに及ぶ相模湾、そして北は寒川町と接している。面積は35.7平方キロメートルで、県下19市のうち7番目に面積が小さく、市北部の丘陵のほかは、平坦な地形となっている。また、令和6年2月1日時点で、人口は245,647人、107,503世帯あり、新型コロナウイルスが蔓延して以降、都心部からの転入者が増加しており、現在も微増傾向にあるものの、他の市町村と同様、少子高齢の進展や公共施設・道路・上下水道をはじめとしたさまざまなインフラの老朽化をはじめ、保健福祉・教育といった多方面で、多様かつ複雑な課題に直面している¹⁾。



図1 茅ヶ崎市の位置

(2)茅ヶ崎市文化資料館と移転整備の端緒

市博物館の前身である茅ヶ崎市文化資料館(以下「旧資料館」という)は、昭和40年代初頭、地域開発の進展、生活様式の変化などにより危機に瀕している文化財、各種郷土資料の保護・保存の

必要性が叫ばれていた中、市内在住の篤志家から市に1,000万円の寄付があった。それをきっかけに、資料館は地域の歴史を伝える資料を永久に保存する施設として建設され、昭和46年(1971)7月1日に開館した。開館以来、茅ヶ崎を語る上で欠かせない資料の調査研究や収集保管、展示、ワークショップの開催などによる教育普及活動を、多くの市民や市民グループと協力して展開し、平成27年(2015)3月に登録博物館となった。



図2 開館当初の旧資料館(昭和46年(1971))

平成時代には、積極的に市内小中学校に働きかけ出前授業の実施や総合的な学習の時間への協力など学校教育との連携を進めた結果、児童・生徒、学生の利用が多くなった。また、団塊の世代が定年を迎え始めた2000年代以降、自然や歴史・民俗への市民の興味関心や学習ニーズが高まり、自然観察会や遺跡・史跡探訪などの教育事業への60代以降の市民・利用者による参加が増加するとともに、開館当初から活発であった市民が参加・協力する調査研究・資料整理といった博物館活動への参加者も増加した。

また、本市では「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針」ⁱⁱを策定し、市全域を建物のない博物館と見立てて、文化・歴史・自然・産業・商業・公共施設・人材などの地域資源を抽出し、調査・研究し、それぞれが有する意味や魅力を整理して広く周知する、エコミュージアムⁱⁱⁱの概念を参考とした事業を進めており、地域の資源を相互に関連付けて活用し、地域課題の解決につなげ、ひいては地域の活性化を図っている。事業を主導する者も利用する者も市民であることを基本理念とし、市民自らが茅ヶ崎を学び、調査・研究して都市資源を保全・育成し、郷土を愛する気持ちを培うこと、そして経験や知識を持つ市民の活動の場となり、市民相互の学習意欲や連帯意識を高めることを目的として位置付けており、旧資料館はその活動拠点の一つでもあった。

旧資料館での博物館活動の最大の特徴は、学芸員と市民が協力して自然や歴史・文化について調査研究し、資料(情報や実物資料)を収集・整理し、展示会やワークショップ、まち歩き、探訪などの教育普及事業の実施などに、開館当初の昭和40年代から取り組んでいたことである。現在は、博物館をはじめとしたミュージアムに関わる市民・利用者に博物館の教育活動にコミットできるようにすること、市民参加型の博物館活動は当たり前での取り組みとなっているが、当時としては先駆的な博物館活動を展開していたと評価できる^{iv}。

そのような中、施設の老朽化や展示・保管スペースの不足、駐車施設の不備などによるアクセス環境の悪さなどの問題があり、機能拡充による再整備が必要と判断され、「茅ヶ崎市公共施設整備・再編計画」^vにおいて、新たに博物館を整備して、旧資料館の資料と機能を移転し、旧資料館の施設は市博物館の開館後に解体し、敷地は売却することとなった。移転・整備という更新手法が選択されたのは、偏に、51年にわたり市民の協力・参加による博物館活動を展開し、一定の成果を上げたことにより、市民の学習ニーズが継続的にあることや、博物館活動をとおした市民への学習機

会の創出と提供が行政課題として今後も取り組んでいくことが望まれており、地域社会にとって必要であると行政内で認識されたことによるところが大きいと考える。

(3)旧資料館における市民参加型博物館活動の成果と問題

旧資料館で51年間にわたり行われた、学芸員と市民が協力して行う博物館活動の最たる成果は、博物館活動全体が市民の学習機会の創出・提供となるとともに、市民の学習成果を、市民が市民に還元するという学びの循環を生み、博物館が学芸員をはじめとした館の職員や博物館好きの一部の市民・利用者のみならず、学びを求める市民・利用者に開かれ、収集・展示資料が公共財^{vi}としての性質を高めることにつながったことであると考えられる。

調査研究活動や収集保管活動では、地域に住まう市民だからこそ知り得た情報(コト)と併せて資料(モノ)を調査し、収集保管することができた。生物の分布調査などを行い、維管束植物をはじめ、蘚苔類・昆虫・鳥類・魚類など、市域に生息する生物の標本を収集し整理・保管した。農業・漁業をはじめとした生業や衣食住、通過儀礼、祭礼に関する聞き取り調査、社寺や石造物の悉皆調査を行う中で、関連実物資料を収集保管することができた。なお、収集した資料の標本化の作業や考古資料の整理、民俗資料の整理も協力して行い、その成果を活用し展示会を開催したり報告書にまとめて発行したりした。特筆すべきは、自然や歴史・民俗分野において、地域で長く生活している市民が加わっていたことで、生息場所や状況、民俗資料の使用法や来歴、名称、材質など、学芸員による通常の調査研究・収集保管活動では得難い情報を得ることができたことである。

一方、学芸員と市民が協力して博物館活動を、長期にわたり取り組んだことで発生した問題点がある。今後、新たな博物館で新たな市民・利用者が参加・協力して進める博物館活動に取り組んでいくにあたりしっかりと向き合う必要がある。問題点は、大きく次の3点である。

- ① 参加する市民・利用者やグループの固定化と高齢化
- ② 調査研究活動や教育普及活動の慣例化と過去に実施した事業継続とグループ維持への偏重
- ③ 学芸員が市民・利用者の学習ニーズに対応することよりも博物館活動に参加・協力する市民・利用者の学習ニーズなどに対応することに追われてしまうこと

市民・利用者が、自然や歴史・文化に関する知識や技術を身につけ成長していく、いわゆる学びの過程にはステップがあり、「交流活動の発展段階」(図6^{viii})として図表化できる。一見すると、理想的な「学びの階段」とも言えるフローであるが、博物館活動に参加する市民の学習習熟度や参加頻度といった関わり方の強弱によって、市民の間にヒエラルキーが醸成され、学習活動の自由度や柔軟性が下がってしまうことが、前述の3つの問題点の一要因になっていると考える。



図3 市民参加型の市内野鳥分布調査



図4 市民ガイドによる市内遺跡探訪



図5 市民との石造物悉皆調査

市民・利用者が主体となるよう開かれた、市民参加型の博物館活動は無条件に賞賛・奨励されがちであるが、人間が集い、集団学習を行うことに伴い必然的に発生するこの問題は、今後、新たに開館した博物館の教育活動を検討し展開していく上で、直視し、第一に向き合い取り組んでいかなければならない重要な事項である。学芸員は、より開かれた学び(図7)が展開されるよう、館の理念や方針を見据えながら取り組むことが求められている。

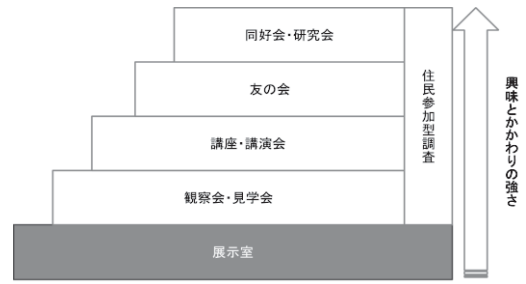


図6 交流活動の発展段階(布谷,2005)

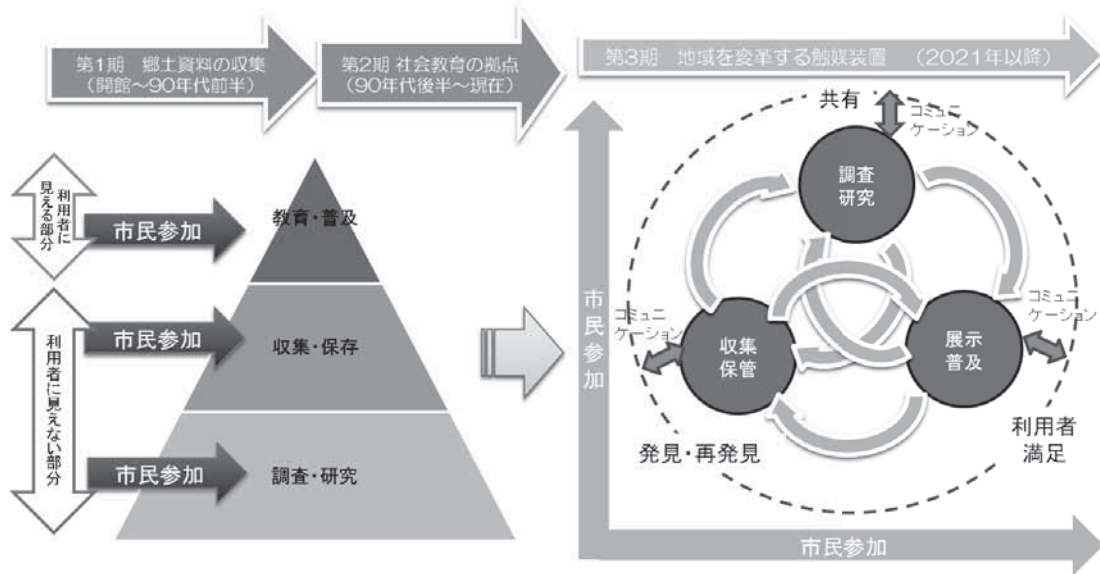


図7 旧資料館と市博物館の市民参加の方法の検討概念図

なお、市博物館では、後述する移転・整備のために策定した「文化資料館整備基本計画」^{viii}(以下「整備基本計画」という)において、「博物館は、地域の博物館としての機能を最大限に発揮し、市民・利用者と協力して活動していきます。市民・利用者が知り・学ぶ充実感や知的好奇心を育み、その成長を支援します。市民・利用者が主体となって行動し、新たな知が生まれ、循環される場を創出します」と謳っている。市民・利用者の博物館活動への新たな協力・参加方法として、調査研究・資料整理・教育普及活動といった活動を分野ではなくテーマによって設定し、また、活動期間も時限的なものとする方法を検討している。旧資料館では、活動に参加する市民・利用者が自然・考古・民俗といった独立したグループを自発的に形成し、グループ単位で活動に協力していた。グループメンバーの興味・関心が多岐に渡っていることやメンバー同士の情報交換の場になっていた特徴を生かしつつ、新たな世代の参画が少ないことや自立しているが故に発生する連絡等の事務や、メンバーや活動の固定化といった問題点をクリアする方法として、参加する市民・利用者を博物館が募集し登録制とし、持続可能な

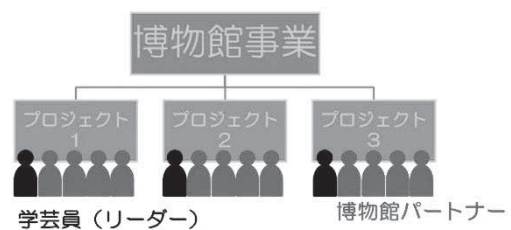


図8 市博物館プロジェクト・パートナー検討図

学習活動となるよう仕組みの検討を進めている。実施体制は、学芸員がプロジェクトリーダーとなり、プロジェクトに賛同する市民・利用者を博物館が募集し、ボランティアではなく学習対象者として扱い、共に博物館を支える仲間として「(仮称)博物館パートナー」と位置付けることを検討している。

3 博物館整備基本計画づくり

(1)博物館整備基本計画策定の背景

新たな博物館の整備基本計画の策定に向け、平成26年度から協議・検討を始めた。博物館学や自然科学・歴史、エコミュージアム、建築・美術、文化財の有識者をアドバイザーとして招聘し会議を構成し検討を進めるとともに、市民・利用者を募り近隣の先進館を訪ねたり、新たな活動を検討するワークショップや一般市民を対象とした講演会や説明会を繰り返し実施したりし、議論を重ね、パブリックコメントを行い、新たな博物館の基本理念や方針、役割、機能について検討を進めていった。整備基本計画では、単に博物館施設の整備概要を謳うだけでなく、これまでの活動を総括し問題を整理しつつ、課題を設定し、新しい活動の理念や方針、テーマ、市民参加の方法などを詳細に検討し、開館後の運営やその後の活動方針を謳う計画づくりに努めた。

なお、新たな博物館整備への期待は、博物館が新たに立地する周辺住民のみならず、旧資料館や社会教育に関係する市民・市民グループの期待は非常に大きいものであった。1990年代、市民・市民団体からの強い要請があり、新たに総合博物館建設を求める動きがあり、実施計画策定まで行ったが、整備には至らなかったことがその一因であると考えられる^{ix}。

(2)博物館整備計画検討・策定と事業推進の環境づくり

「公共施設・整備再編計画」で新しい博物館整備は位置付けられたものの、整備・再編することとなった対象公共施設の数も多く、市の重要施策として位置づけられるまでに6年を要した。

当時、市では、多くの課題解決に向け新たな政策を展開しようとしていた時期であった。そのような中で、本事業が主要な施策と位置づけられることとなったのは、偏に市の内部、行政内に市民の学習ニーズとその実施効果がまちづくりにいかに資することとなるかについて具体的に示し続けたことの成果であると考ええる。

公立博物館の職員が、教育委員会・市長部局といった自身が属している組織内部にその存在理由や意義、教育に留まらない活動の効果などを周知する活動・行為は、博物館をはじめとしたミュージアムや文化財保護を担当している学芸員をはじめとした職員の不得手とするところであり、小職も自覚するところである。

全ての市職員を「仲間」と認識し、市教育委員会をはじめ、財政部局、企画部局、都市部局、建設部局、その他関係部局に事業の理解者を増やすこと、ミュージアムリテラシーの向上に、事業の初めの6年を費やしたと言っても過言ではない。行政内のステークホルダーに対し、謙虚さと、敬意と感謝の念を持って信頼・協力関係(図9)を築くことで、行政外のステークホルダーとも向き合いながら、整備事業に関係する部局がチームとして取り組むことができた。このことによって、開館から運営に移行した現在においても、孤軍奮闘することなく、多くの助力・支援をもらい、市教育委員会以外の部局との連携事業の実施といった、市博物館が教育機関に留まらないものとしてその活動を進め

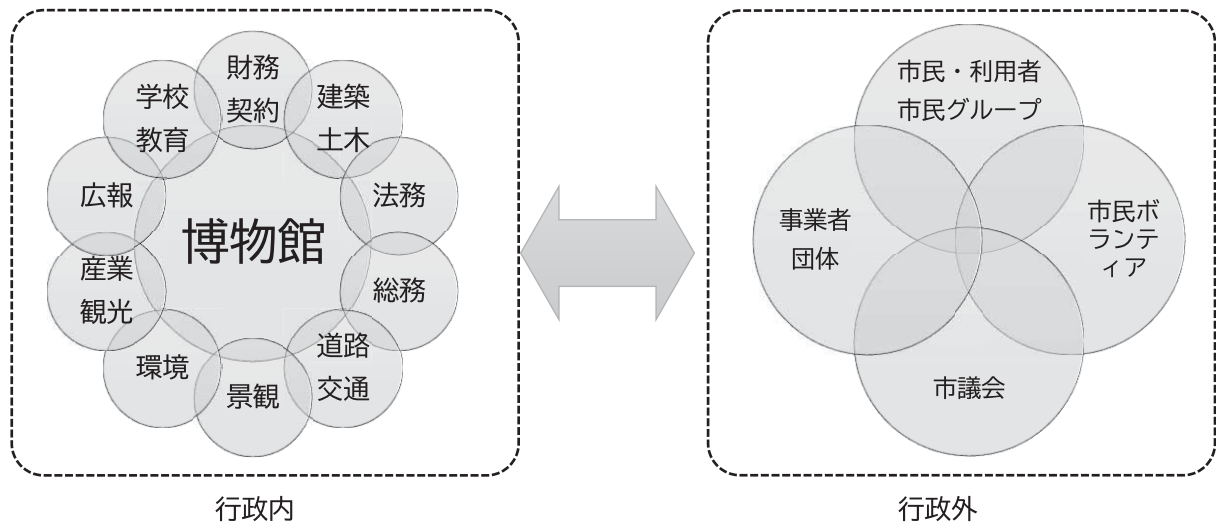


図9 博物館を取り巻く行政内外のステークホルダー

ることが可能となっている⁸。

加えて、博物館をはじめとしたミュージアムとそれにかかわる学芸員や文化財保護関係職員の問題を客観視し、顧みることに留意した。学芸員は、他の行政職員からは、「自分達の好きなことをやっている」と捉えられている傾向があり、また、自分たちは行政職員に理解されなくとも、市民や研究者・関係者に理解されていれば良いと考える傾向があると考えた。そのため、博物館での教育活動が地域課題の解決につながることで、学校教育に寄与すること、さらには、人づくり、まちづくり、文化創造に寄与することを繰り返し行政内に発信し続けるよう取り組んだ。

(3) 収集保管活動と収蔵庫について

整備計画の策定を進める中で、新しい収蔵庫の検討は大きな課題であった。旧資料館は、旧資料館内の他に2か所で自然や歴史・民俗の資料を分散収蔵しており、市博物館を検討するにあたり現状の収蔵量調査を行い新たな収蔵庫の収蔵量を検討するとともに、収集保管活動の基本的な考え方を協議し、方針を計画に謳った。なお、開館した令和4年度に、収蔵品管理システムを導入し、資料台帳や資料カード等の情報をアップロードした。今後の市博物館としての課題としては、移転してきた収蔵資料の整理保管と活用に向けた収蔵品管理システムの情報の充実化を図るとともに、整備基本計画に謳った基本的な方針を元に、資料の除籍のことも含め、実際的なコレクションマネジメントと関連の諸手続きを早急に整備することである。

ミュージアムの収蔵庫が「臨界点(クリティカル・ポイント)」^{xi}を超えていることは多くのメディアで報道されているところであり、令和5年(2023)に行われた国立科学博物館によるクラウドファンディング^{xii}は大きな話題となった。博物館をはじめとしたミュージアムに関わる学芸員は、「資料は収蔵保管される(されて当然の)もの」と認識し、「未来からの預かりもの」や「将来の調査研究において新たな発見につながる」というロジックを盾に、無自覚に漫然と収集し保管し、資料整理せず、さらにはその情報を公開し活用につなげる取り組みがなされていないことが多くある。その様相は、公益財団法人日本博物館協会が毎年実施している「日本の博物館総合調査報告書」^{xiii}の令和元年度版から窺い知ることができる。報告書によると、「資料台帳に資料のほとんどすべてを記載している館

は 44.8%」であり、現状としては、資料台帳に資料の「ほとんどすべて」を記載している館が44.8%、「4分の3程度」を記載している館が15.7%であり、「資料台帳は未作成」（15.3%）という館があることは特に注目すべき結果である。

また、電子メディアにデータベース化された「資料台帳」を作成しているかどうかの調査の結果、ほぼ半数（51.0%）の館で作成されていたものの、データベース化された「資料台帳」への収録状況に関しては、「ほとんどすべて」の資料を収録している館が48.4%、「4分の3」程度の資料を収録している館が21.3%と、比較的多くの資料を収録していることが分かる。「資料台帳」への記載・収録に加えて、「資料目録」を作成し「目録情報」の公開を行っている館は全体の6割弱（56.9%）に及んでいる。但し、「目録情報」の公開までしているかどうかとなると、「目録情報をホームページで公開している」館の割合は1割を少し上回る程度（12.0%）であり、さらに「ジャパンサーチ」や「文化遺産オンライン」「美術情報システム」「サイエンスミュージアムネット」など、「外部のデータベースシステムを提供している」館となるとその割合は1割を切っている（8.1%）。当館も例に漏れず、多くの未整理資料を抱え、収蔵資料の情報は管理に留まり、公開に至っていないことも、博物館整備にあたって、特に収蔵庫を新たにもつことの大きな障壁となった。当館では、この問題を解消すべく、前述のデジタルアーカイブ構築や収蔵資料システム導入を行った。

博物館で学芸員を担っている限り、収蔵資料の情報を開く取り組みなくして、他の調査研究機関による調査研究や、他のミュージアムでの展示といった活用につながる可能性が低いことを強く自覚していなくてはならない。地方自治体ごとに抱えている問題や目指す行政課題は異なっているものの、日本社会において博物館が、行政の一つの軸になり得ることを、行政内にとどまらず、市民に訴え発信し続け、博物館の社会的な存在理由を伝える努力が、今後一層必要であり、その結果次第で、10年後、20年後に超高齢化・超少子化社会を迎え、社会全体が大きく縮小する際に必要とされ、存在することができるかの分水嶺にあると考える。

(4)博物館整備計画の特徴

一つ目の特徴は、市博物館が立地する市北部における地理的・空間的な役割を示したことである（図10^{xiv}）。モノとコトを調べ集め守り観せる教育活動のみならず、「自然や歴史・文化資源をつなぐ拠点施設」^{xv}と位置付けたことが挙げられる。市北部は、史跡や社寺仏閣、県立公園、谷戸や河川といった市の自然や歴史・文化を語るに欠かせないものが集積している。それらをつなぐ拠点施設として位置付け、市民・利用者の回遊性の向上や賑わいの創出といった、まちづくりに寄与する施設として整備することを謳った。この位置付けが、工事費の財源確保の重要な要素となった。



図10 整備予定地近郊図

加えて、地域社会の現状と博物館としてコミットできることについて整理し、「基本理念（使命と役割）」を謳い、そのもとに「活動のテーマ」、「活動の基本方針」、「多様な主体との連携」、「調査研究活

動」・「収集保管活動」・「教育普及活動」などの大方針を位置づけた(図11^{xvi})。

「収集保管活動」においては、収集保管の範囲や対象を定めるにとどまらず、収蔵資料のデータベース化と公開といった活用への連続性を考慮したものである。また、計画策定後に行う設計業務の基礎資料となることを視野に、既存の収蔵量調査も行い、適切な収蔵庫の容積の検討を行った。

「教育普及活動」においては、従来の博物館の展示活動を「展示公開」に、市民・利用者が主体的な学び、市博物館を訪れた市民・利用者同士、とりわけ未来を担う子どもたちに興味・関心をもってもらい豊かな感性や想像力を育成する「学習交流」、市博物館が蓄積してきた資料情報のみならず自然・歴史文化の情報を発信する「情報の提供と発信」といった項目で詳細に謳った。

以上をもとに、「施設整備」の基本方針、建築計画、館内ゾーニング・動線計画、「敷地整備」の方針、展示計画、収蔵計画、運営計画を事細かに謳った。

なお、計画段階では、ITの活用についての検討が足りない点はあるが、運営が開始した現在においても整備計画が運営や教育活動の指針となっている点は高く評価できる。また、ICOMや改正博物館法で示されている、博物館が「包摂的な施設」であるとする理念を、市博物館整備基本計画では、先取って反映することができたと考える。

4 設計から工事着工

(1)建築設計及び展示収蔵設計

平成28年(2016)4月から建築設計及び展示収蔵設計に取り組んだ。建築基本設計では、建物の基本的な考え方を基本計画に基づき設計し、展示収蔵設計との擦り合わせを密に行い、設計事業者と目指す博物館の認識の共有化を常に図り、乖離がないよう注意しながら進めた。

建築及び展示収蔵設計では、基本設計、実施設計と段階的に行い、事業者は同一事業者とすることで、各段階でのコンセプトや内容の齟齬が生まれないよう業務の連続性に重点を置いた。

設計を進める中で、文化庁及び東京文化財研究所に設計事業者と赴き、展示室や収蔵庫、来館者や資料の動線、事務室、空調・消防設備、IPMなど多くの事項について協議を行い、設計のブラッシュアップを図った。博物館の目指す姿によって、文化庁等との設計協議の必要性や内容が異なる。市博物館は、将来的に公開承認施設を目指すことを基本計画で位置付けており、国の重要文化財の収蔵と公開ができることと、市民・来館者の訪れやすさや親しみやすさを感じていただける開放的なデザインが両立する設計を目指した。

また、展示や収蔵保管、調査研究活動の設備要件を設計する中で心掛けたのは、決めすぎず、可変

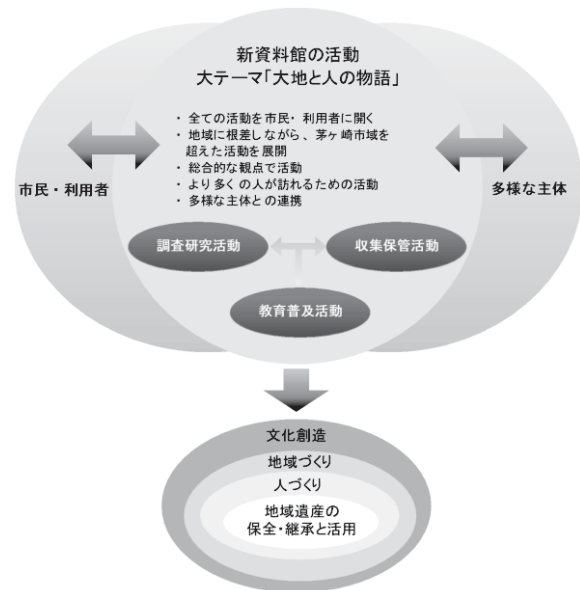


図11 市博物館の活動図

性を担保することであった。次代の学芸員たちが取り組む博物館活動、特に展示設備によって、将来の博物館活動に制約が生まれぬよう、整備しすぎないよう配慮した。展示に可変性を持たせたことは、更新性の担保もさることながら、市民・利用者が訪れる度に発見・再発見があり、来館する時が市民・利用者にとって常に新しい展示となるよう目指した。その結果、「常設」ではなく、時期によって変化する「基本展示」を基本コンセプトとし、展示ユニットの展示資料も更新が可能となるよう設計した。

収蔵設計では、旧資料館で所蔵資料の収蔵量調査を行い、必要な容積を確保できるよう設計した。しかしながら、新たなコレクションポリシーやマネジメントの大方針は整備基本計画にあるものの、事細かに定まっていなかった中での設計であったため、単純に旧資料館の収蔵資料の容積から設計せざるを得なかった。前述のとおり、新しい博物館であってもいずれ「臨界点」がくる収蔵庫は、公費によって維持されているものであるからこそ、その収蔵資料は公共財として明確に位置付けられている必要がある、その公共財の保管スペースとして理論づけられている必要がある。今後、コレクションマネジメントの方針と関係規定を整え、収蔵庫の適切な運用と資料の収集保管、活用についてのあり方を確立したい。

市博物館の敷地・館内・展示室・トイレ等のアメニティについてはバリアフリーに配慮し、基本設計の段階で、障がい者団体等から意見聴取を行った。

なお、博物館の整備と併せて、埋蔵文化財の収蔵スペースの問題の改善・解決に取り組む方針ではあったが、現時点、改善・解決には至っていない。市博物館の考古資料用の収蔵庫は、市博物館及び社会教育課文化財保護担当所管資料のうち展示等の教育普及に供するもの及び脆弱性の高いものの収蔵庫として設計した。

市博物館の整備を進めるに際し、建築・機械設備を担当する建設部局、条例・規則を整える法務部局、備品類や施設の維持管理の委託契約を整える契約・会計部門、運営体制を整える総務部局や企画部局、広報活動を行う広報部門、そして何よりも予算や財源について整える財務部局といった各部局が「仲間」となり「同じ課題に向き合うチーム」(図9)として協議・検討し事業を進めることができたことは大きな成果であった。その結果として、多くの市民・利用者を得る行政的な基盤となっており、今後の安定的な運営と教育活動の展開に向けた基盤づくりができたと考える。ミュージアムリテラシーの向上は市内から始まると、整備事業をとおして強く認識した。

約2年間に及んだ建設・展示収蔵設計は、建設費を算出し完了した。

(2)工事費と補助金

設計完了段階で、博物館をはじめとした公共施設を整備する事業は、延期や事業凍結となるものが多くある中、市博物館においても、工事着工を1年延期することとなった。その原因となったのが、建設工事費の財源である。

博物館単体の整備事業費を全て一般財源のみに依ることは地方自治体としては、市債を充てるとしても負担が大きく、市民や議会に説明し理解を得ることは非常に難しい。国庫補助の活用を改めて検討することとなったが、文化庁の補助金はソフト事業に関するものが多く、また、文化財保護に関す

るものは充実しているが、新たな博物館のハード整備に活用できるものは該当がなかった^{xvii}。

結果として、国土交通省の社会資本整備総合交付金の街なみ整備事業^{xviii}のメニューを活用することとした。図12のとおり、隣接する駒寄川の「護岸整備」、市博物館の近傍地で保存している市指定重要文化財である「近世民家の耐震改修」、「誘導・解説サイン整備」、地域の自然や歴史・文化に関する学校教育や地域住民と連携した「まちおこし事業」、そして、博物館整備を「地域の文化交流・創造を促進する施設」として位置付け、総合的に取り組むことで、「修景」と「回遊性の向上」による「賑わいの創出」を目的とする整備と位置付けることで、事業を推進することができた。

国庫補助が財源として充当できることとなり、整備事業は加速度的に進むこととなった。なお、展示及び収蔵庫の整備は工事ではなく、委託事業として取り組んだ。展示制作はその最終工程や成果物の性質から工事として発注されることがあるが、製作の特殊性を考慮し委託することが最適と考えたことによる。

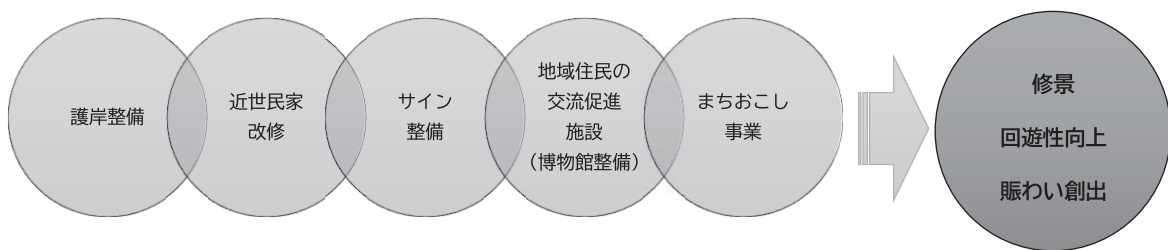


図12 国庫補助を活用した博物館整備と関連事業

(3) 整備工事と関連事業

(2) のとおり博物館の整備に留まらず、市重要文化財である古民家の耐震改修や河川の護岸整備、誘導サインや案内サインの整備、地域の魅力の発見・再発見とそれをかたちにするまちおこし事業を、下水道部局や都市部局、文化財保護のセクション、近隣の小学校、地域と連携・協力して取り組んだ整備の業務量は、博物館の整備に留まるものではなかったため、非常に慮外なものであったが、点ではなく面として多面的・多角的に博物館づくりを進めることができたことは大きな成果であった。

特に「まちおこし事業」は、近隣小学校5学年の生徒を対象に、2年にわたり、地域の魅力発見とブランディング、古民家の魅力の発見・再発見の取り組みを行った。地域ブランディングにおいては、小学生による散策で見つけた魅力を、シンボルマークとして表現する取り組みを行った。



図13 駒寄川護岸整備



図14 誘導・案内サイン設置



図 15 耐震改修を施した旧和田家住宅



図 16 小学生を対象とした耐震改修工事見学



図 17 小学生を対象とした犬走づくり体験

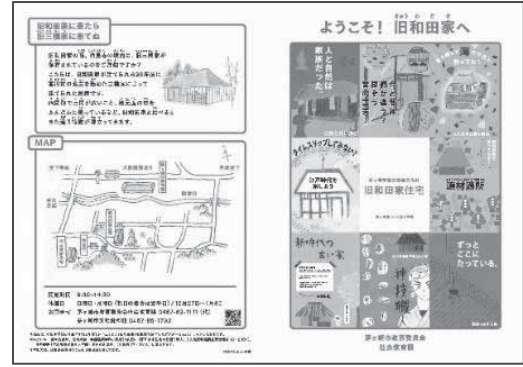


図 18 小学生が作成したポスターと古民家紹介パンフ



図 19 小学生による地域散策



図 20 発見した地域資源を図案化



図 21 地域のシンボルマークを作成

また、古民家の魅力の発見・再発見においては、古民家の学習や耐震改修工事見学、作業体験をとおして見つけた魅力をイメージ化・文字化し、ポスターや案内パンフレットを作成した。作成したポスターは茅ヶ崎駅などに掲示し、現在も案内パンフレットとして配布している。

文化庁ではなく、国土交通省の補助金を活用した取り組みは、市博物館単体の点の整備に留まらず、博物館や文化財を軸とした面的な取り組みとなり、地域を考え、まちづくりを行う取り組みとなった。

5 開館、そしてこれから

(1)開館と開館後の整備工事

2年2か月に及ぶ建設工事と展示収蔵製作を経て、市博物館は令和4年(2022)7月30日に開館した。前段のとおり、建設工事(建築・電気・機械設備)、護岸改修、近世民家改修、まちおこし事業、サイン整備事業を行いながら、条例や組織を整え、博物館開設の準備となったため、その業務量は膨大であったが、多くの部局の協力・支援により開館を迎えることができた。

なお、整備事業の推進期間中はコロナ禍であったため、博物館整備の状況の市民への公開、開館セレモノニーなどは最小限に留めざるを得なかった。

また、駐車場（令和5年(2023)1月供用開始）や周辺通路（令和6年(2024)1月供用開始）といった外構工事、旧資料館からの資料移転作業（令和5年(2023)3月末完了）を行いながらの開館であった。旧資料館は、令和5年(2023)12月に解体工事が完了した。博物館協議会を令和4(2022)11月に設置し、安定的な運営に向けた体制づくりと本格的な博物館活動の協議を行っている。

(2)施設と展示の教育的特徴

展示室の構成は、基本展示室・企画展示室に加え、博物館図書室（市立図書館が分室として司書を配置して運営[※]）及び可変的に活用できる市民交流スペースを設けた。また、展示内容は、「大地と人の物語」をテーマに、「海」・「砂丘」・「川」・「低地」・「丘陵」の5つの地形・空間軸に分け、地形毎に、茅ヶ崎の自然やそこで営まれた人々の暮らしを、17のテーマユニット（物語）で構成した。17の展示ユニットのうち8ユニットを展示し、4か月おきに展示替えを行い、いつ訪れても新たな発見のある展示とした。基本展示室の展示は、①完全自由動線、②人文系・自然系に捉われない横断的な展示、③キャプションによる文字情報は必要最低限留めること、④観覧者と資料の距離を近づけること（露出展示の多用）などに取り組み、市民・利用者の主体的且つ直感的な観覧を促すよう構成した。

なお、市民・利用者が展示室に入る前に、期待感の高揚や資料への興味・関心を喚起することを目的に、「海」・「砂丘」・「川」・「低地」・「丘陵」を表象する資料を紹介する「サマリー展示」を設け、展示室内をのぞき込めるガラス張りの設えとなっている。また、時間の流れやその空間軸を直観的に理

展示シナリオ

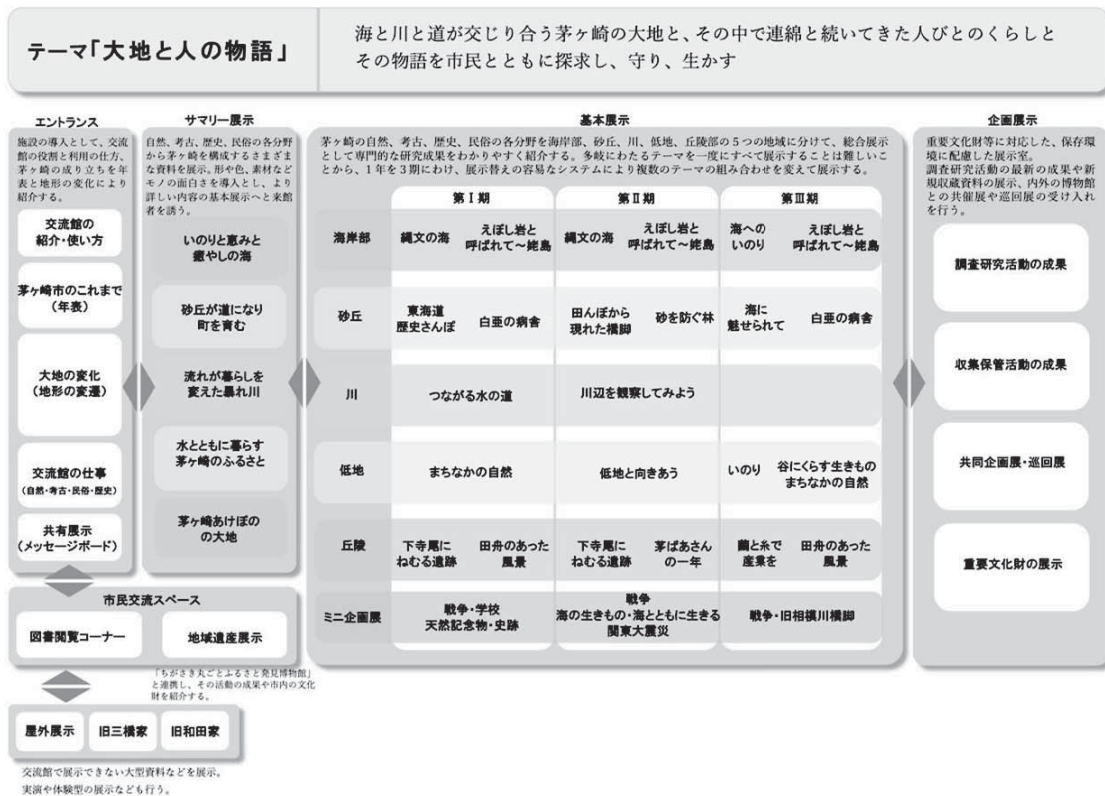


図 22 展示構成概念図

解することができるよう、年表形式ではなく、絵巻のように右から左へイラストで構成した大型のイメージグラフィック「ちがさき歴史絵巻」を設えた。

(3) 収蔵庫の特徴

収蔵庫については、計画策定時に項で述べたが、分散収蔵していた歴史・民俗資料と自然関連資料、図書資料を集約し保管できるよう整備し収蔵品管理システムを導入した。自然資料については、薬液を用いる標本資料とはく製やさく葉標本といった乾燥標本の収蔵庫を分けたほか、考古資料（埋蔵文化財）については、展示や研究活動に活用できる資料を保管する収蔵庫を設けた。

なお、収蔵什器は IPM に配慮したものとし、燻蒸室は設けず、新収蔵資料等は定期的に被覆燻蒸することとした。加えて、重要文化財の収蔵保管できる特別収蔵庫、搬出入のための 4t トラックが入るトラックヤードや荷捌室などのほか、資料整理室、資料整理・調査研究室、展示準備室といった諸室がある。

(4) 社会教育施設等との連携と DX

開館した令和 4 年度は、収蔵資料移転と旧資料館の解体売却、市博物館の運営と教育活動を行いながら、デジタル田園都市国家構想推進交付金^{xx}を活用し、ポータルサイトと収蔵資料のデジタルアーカイブや展示資料の 3D 化、建造物の VR といったデジタルコンテンツの構築、デジタルアーカイブのデータを活用したアプリケーションの開発、博物館や図書館、公民館をはじめとした社会教育施設の Wi-Fi 環境整備を博物館が中心となって進め、令和 5 年(2023)4 月にローンチした。

(5) 地域社会に必要とされる包摂的な博物館を目指して

市博物館は、市民・来館者のミュージアムリテラシーが向上し、馴染みのお店のように利用できる普段使いの博物館を目指している。これまで博物館と接点がなかった市民・利用者へのアプローチを継続的に行い、博物館がもつ高尚で敷居の高いイメージを払拭しなければならない。その事始めが、行政内での協力・連携体制の構築と維持であり、次に継続的な市民・利用者への教育活動であると整備事業をとおして痛感した。この取り組みこそが、日常生活に溶け込んだ、地域に欠かせない、地域社会に必要とされる「包摂的な施設」としての博物館への歩みの始まりであると考えている。

さいごに

多くの市民・利用者や博物館関係者、研究者、そして市の他部局、事業者の多大なる力添えによって市博物館の整備・移転事業は実現した。貢献いただいた全ての方々に感謝の意を表したい。

高度経済成長期やバブル期に整備された多くの公共施設が、統廃合もしくは耐震改修、リニューアルといった転換期を迎えている。加速度的な、少子高齢化や社会・経済構造転換に伴い、市町村の半数が消滅するといわれている^{xxi}。図書館のように、誰にとっても分かりやすい社会・教育インフラではない博物館は、今後その多くが閉館や他の公共施設との統廃合に直面することが考えられる。博物館は、地域の諸課題に向き合い、庁内の他部局に留まらず他機関や事業者、市民団体など様々な主体と連携し、支援・コミットしていく課題解決型教育機関でなくてはならないと考える。学芸員や運営スタッフには、多くの反省とドラスティックなパラダイムシフトが強く求められており、地域社会か

ら必要とされる「包摂的な施設」という存在理由を確立できるかは、既成概念に捉われない教育活動と持続可能なミュージアムマネジメントの取り組みの如何にかかわっている。拙稿が、全国の市町村立の博物館が、地域社会にとって不可欠な社会・教育インフラとして存続し、蓄積してきたモノとコトが次世代に継承され、教育に留まらない、地域社会に資する施設となる一助となれば幸いである。

* 茅ヶ崎市博物館館長

-
- i 令和7年(2025)から人口減少に転じ、社会増がなければ、令和27年(2045)には人口は14%以上減少し、20万9千人を割ることが推計されているほか、生産年齢人口は21.4%以上の急激な減少が予想されており、老年人口(65歳以上)の見通しでは現在よりも38.8%以上増加し、市民の二人に一人が65歳以上となることが予想されている(茅ヶ崎市「茅ヶ崎市の将来推計人口」,2022)。また、築30年以上となる公共施設は61.8%を占め著しく老朽化が進行しており、維持に約2,413億円必要であることから、市としては計画的な改修と現在ある公共施設の6%縮小を進めている(茅ヶ崎市「茅ヶ崎市公共施設等総合管理計画(改訂版)」,2022)。
- ii 茅ヶ崎市教育委員会,2006
- iii エコミュージアムは、1960年代後半にフランスで始まった考え方である。住民と地域を関連づける環境的遺産や産業遺産及び文化的遺産を対象として、それらを保護・保存し、調査・研究し、時には育てる機能をもった、地域環境そのものが博物館であるとする考えであり、運営する者も利用する者も、あくまで地域住民であるとすることを大きな特徴としている。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視している。
- iv 「放課後博物館」(浜口哲一『放課後博物館へようこそ』地人書館,2000)として市民に開かれ、地域と市民を結んだ活動で知られる平塚市博物館の開館は昭和51年(1976)である。
- v 茅ヶ崎市,2008
- vi 人間が「生きていくために、社会に存在すべきことが自明であり、何の議論もなく公的資金が投入されるべきもの」(貝塚健「特論1博物館の「公共性を考える：博物館とは何か・私論」鈴木真理編『改訂博物館学概論』樹村房,2004)
- vii 布谷知夫『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』雄山閣,2005
- viii 茅ヶ崎市教育委員会,2016
- ix 1990年代、市民が中心となって作成された「茅ヶ崎にふさわしい博物館を求めて 茅ヶ崎市博物館準備委員会提言」(茅ヶ崎市教育委員会,1990)をはじめ、新たな市の博物館の基本構想・実施計画が策定された。
- x 公民館や図書館といった社会教育施設をはじめ、シティプロモーションや産業・観光、下水道、環境、バリアフリー、ゆかりのまち事業といった様々な関係課かいと展示やワークショップをはじめとした教育活動に取り組んでいる。
- xi 太下義之「ミュージアムの終活(または再生)(2) 収蔵庫の臨界点(クリティカル・ポイント)」美術手帖.2021-5-26,<https://bijutsutecho.com/magazine/series/s42/24093>,
- xii 国立科学博物館が収蔵庫と収蔵資料を維持するための光熱水費等を賄うことを目的とし「地球の宝を守れ | 国立科学博物館500万点のコレクションを次世代へ」と題し、2023年にクラウドファンディングを行った結果、目標金額100,000,000円に対し、56,584人の支援者から916,025,000円を募る結果となった。
- xiii 日本博物館協会のデータベースに登録されている館園4,178館を対象に行われ、有効回答があった館は2,314で、全体の55.4%であった。
- xiv 茅ヶ崎市教育委員会「文化資料館整備基本計画」,2016
- xv 同上
- xvi 同上
- xvii 市博物館では、デジタル庁所管のデジタル田園都市国家推進交付金及び内閣府所管の新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金を活用して、収蔵資料のデジタル化推進やWi-Fi環境整備を中心とした事業を進めた。
- xviii 博物館施設を一から整備するための補助金は現在整備されていない。社会資本整備総合交付金は、博物館の収蔵庫や事務室といった部分を除き、市民・利用者の利用に供するの部分の整備に補助金を充当することが可能となった。
- xix 図書室の設置により、図書の貸出返却やコピーサービスの提供が可能となった。また、博物館所蔵図書を図書館に移管し配架することも可能となった。加えて、基本展示室の資料や企画展に関連した図書の展示も行い、図書と展示資料の学びの循環が生まれている。
- xx 内閣府及びデジタル庁所管の交付金。本市ではTYPE1(優良なモデル・サービスを活用した実装の取組)として推進。
- xxi 「国土形成計画(全国計画)関連データ集(国土交通省,2023)によると、2070年に日本人口は8700万人(高齢化率38.7%)となり、2120年には4973万人(40.4%)になることが推計されている。人口5千万人は明治時代後期の人口と同等である。全市区町村が現在の半分以下の人口となりそのうちの4割が65歳以降である。同じく国土交通省の都市圏参考資料(2010)によると、市町村が博物館・美術館維持できる人口水準は77,500人であるとされており、それを下回ると維持が難しくなる。

収蔵資料の移転と課題について

板垣 光星*

1 はじめに

本稿は、令和4年（2022）7月30日に開館した茅ヶ崎市博物館（以下「市博物館」という）に、その前身である茅ヶ崎市文化資料館（以下「文化資料館」という）の所蔵資料を収蔵庫やその他の収蔵施設から移転を行った経過を記録するとともに、作業工程で表出した課題を考察し、報告するものである。

2 移転業務の概要

(1) 移転の経緯

市博物館は、50年の歴史を持ち、市内中海岸にあった文化資料館に代わり、令和4(2022)年7月に茅ヶ崎市堤の地に開館した。文化資料館は老朽化や展示・保管スペースの不足、駐車施設の不備などによるアクセス環境の悪さなどの課題があり、機能拡充による再整備が必要となった。博物館機能を移動させるため、収蔵資料と事務機能の移転を、令和4年度（令和4年4月から令和5年3月まで）に行った。移転業務を行っている途中で博物館が開館したため、博物館活動を行いながらの作業であった。収蔵資料は、移転前に文化資料館、梅田文化財収蔵庫2階（以下「梅田収蔵庫」という）、鶴が台小学校民俗資料室（以下「鶴が台小学校」という）の計3か所に収蔵していた（図1）。分野ごとの資料点数（表1）と各収蔵場所の収蔵する資料の分野（表2）について、それぞれ表にまとめた。



図1 移転業務に関連する各施設の位置関係

表1 収蔵資料総点数（出典：茅ヶ崎市文化資料館 年報2020）（単位：点）

分野	実物	標本	図書文献	写真	フィルム	スライド	計
考古	825	0	3,721	650	0	286	5,482
民俗	8,346	0	13,895	8,638	37	2,467	33,383
自然	169	23,165	3,554	823	0	23,229	50,940
その他	32	0	309	0	0	247	588
計	9,372	23,165	21,479	10,111	37	26,229	90,393

(2)移転の準備

市博物館の収蔵庫の容積については、文化資料館等の各収蔵場所の容積をもとに、新たな収集活動にも対応できるように設計した。令和3年度中には移転業務を行う業者選定を行うことに伴い、文化財資料の運搬実績の確認が取れた事業者と一緒に、事前に収蔵庫等の現地調査を複数回実施した。令和4年3月には、文化資料館の資料を対象としたくん蒸を行う事業者による殺虫、殺卵を行い、市博物館へ文化財害虫が入らないように予防した。

(3)4月から7月の作業

事業者と行う移転業務は、職員の勤務日程の都合上、火曜日から金曜日の週4日間行った。

市博物館の展示室（基本展示、サマリー展示）に展示を行う資料に関しては、展示制作準備のため、最初に梱包し市博物館へ輸送した（図2）。ほとんどの資料が文化資料館に集約されていたが、松籟荘のスタンドグラスは、鶴が台小学校に（図3）、松籟荘建築模型（1/60）は、茅ヶ崎市美術館に収蔵されていたため、それぞれ集荷を行い、市博物館へ運搬した。スタンドグラスや建築模型といったような大型の資料に関しては、事業者が寸法を計測し、事前に段ボールなどの梱包資材をその寸法に合わせて加工をして、使用していた。

展示室に展示を行う資料の輸送が終わったあと、次に文化資料館の資料梱包に取り掛かった。文化資料館には民俗、考古、自然、図書資料があり、文化資料館1階には、主に民俗資料があったことから、まずはそこから取り掛かった（図4）。

表2 各収蔵場所と資料の分野

収蔵場所	分野
文化資料館	民俗
	自然
	考古
	考古（※1）
	図書
梅田収蔵庫	民俗
	自然
	考古（※1）
	図書
	図書（※1）
鶴が台小学校	民俗
	考古（※1）
	図書
	図書（※1）

※1：社会教育課文化財保護担当所管資料



図2 堤貝塚深鉢（市指定重要文化財）
梱包の様子



図3 松籟荘のスタンドグラス梱包の様子



図4 移転前の文化資料館展示室

民俗資料の確認から、市博物館での開梱までの流れとしては、まず資料番号の有無の確認を行い、有の場合は、民俗資料受入原簿との突合せを行った。資料番号については、資料に直接白いペンキで番号が書かれているものもあれば、荷札が付いていて、そこに番号が書かれているものがあつた(図5)。番号が見当たらない資料に関しては、未整理資料として記録をした。資料番号の確認が終わったあとは、資料の傷、破損、欠品等の状態確認を行った(図6)。その後、事業者の段ボールなどの梱包資材を用い、事業者による梱包を行った。ある程度梱包済みの資料が溜まった段階で、市博物館へ輸送を行った(図7,8)。この時、輸送を行うのみで、開梱は行っていない。4月から6月末は主にこの作業の繰り返しであった。

考古資料に関しては、文化資料館所管の資料と社会教育課文化財保護担当所管の資料の2種類があつた。文化資料館所管の資料については市博物館へ運搬するが、社会教育課文化財保護担当所管の資料については、社会教育課所管施設である文化財調査事務所(以下「調査事務所」という)へ運搬を行った。

自然資料に関しては、植物標本、昆虫標本(ドイツ箱)、剥製、ボーリングコア、未整理資料などがあつた(図9)。自然資料は他の分野の資料と比べても資料点数が多い。例えば昆虫標本のドイツ箱であれば、1つの箱に100点程度資料が入っているものもあり、その全てを台帳との確認を行うことは困難と判断し、自然資料は台帳との突合せを行わなかつた。植物標本は、標本庫の中に新エングレー体系で並んでいるため、その順番が狂わないように注意して梱包を行った。

図書資料に関しては、市博物館の図書収蔵庫に運搬するのか、事務室や図書室に運搬するのかは事前に職員が仕分けを行った。一部図書に関しては、事業者ではなく、職員の方で、仕分けも兼ねて梱包を行った。



図5 資料に資料番号が書かれ、荷札がついている資料例



図6 梱包前に破損が確認できた資料例



図7 市博物館のトラックヤードに入ったトラック



図8 荷捌室でトラックから資料をおろす様子

6月上旬には、文化資料館の事務機能を市博物館に移転させるため、事務用品やパソコン等を運搬し、文化資料館所属の職員も市博物館に移動した。

6月下旬には、茅ヶ崎市立図書館から、市博物館図書室に配架する本の梱包と運搬を行った(図10)。その後、市博物館図書室の司書によって配架された。

7月は、文化資料館から市博物館に輸送した未開梱の資料が収蔵庫や収蔵庫前に置ききれなくなってきたこと

と、市博物館の開館1か月前であることなどから、市博物館で開梱の作業に取り掛かった。段ボールに梱包された資料は重ねて保管ができるが、梱包されている分、容積が増えて場所をとるため、開梱して資料を棚に設置した。

開梱は、資料の容積の大きい民俗資料を中心に行った。また、同月には、今回の移転業務の中で最大の大きさの資料である伝馬船を移動させた(図11)。伝馬船や輪タク(図12)、オーディナリー自転車などの大型資料は、全体を覆うような梱包はせずにトラックに載せて運搬した。ただし、ハンドル部など一部は養生を行い、トラック内ではロールマットやベルトで固定を行った。普段の1日の作業員の数は4名であったが、大型資料の運搬の日に関しては、その2倍の8名ほどの人数が作業を行った。

12月までは、市博物館の駐車場が工事中であり、事業者の車をトラックヤードに入れる際には、工事中の駐車場を通る必要があったため、搬入日などについては駐車場の工事担当者と事前に調整を行った。

7月29日の市博物館内での民俗資料の開梱を最後に9月まで移転業務は一時中断した。これは、7月30日に市博物館が開館したことと、8月末までは学校が夏休み期間であり、イベント等で来館者が増えると予想されたためである。



図9 梱包状態のキジ(剥製)



図10 茅ヶ崎市立図書館での梱包の様子



図11 市博物館の収蔵庫に伝馬船を収蔵する様子



図12 輪タクを梱包する様子

(4)9月の作業

9月は梅田収蔵庫での作業を行った。梅田収蔵庫には、文化資料館所管の資料と社会教育課文化財保護担当所管の資料があり、それらが床を埋め尽くす量であったため、事業者が資料の梱包等作業を行う場所が不足していた。そのため、移転対象以外の資料に関しては、一度梅田収蔵庫近くにある茅ヶ崎市学校給食共同調理場（以下「調理場」という）（平成31年3月閉鎖）へ一時的に移動を行った。社会教育課文化財保護担当所管の資料には考古資料と図書資料があった。その後、梅田収蔵庫では、資料を対象としたくん蒸を行う業者により、殺虫・殺卵を行った（図13）。



図13 くん蒸前に一部資料は養生を行った

(5)10月から12月の作業

10月からは、梅田収蔵庫で梱包作業を行った。梅田収蔵庫には、主に民俗資料を収蔵していたが、収蔵庫の奥からは一部自然資料も見つかった。棚と棚の間の通路には、人間が通れないほどに資料が積まれている場所（図14）が多数あり、梅田収蔵庫入り口付近にある資料から順番に梱包を開始した。梅田収蔵庫は、梅田中学校が隣接しており、元々中学校にあった弓道場を、改装した建物が梅田収蔵庫である。気密性の低い建物であったため、校庭からの砂ぼこりが建物内に多く入る状態であった。そのため、資料だけでなく、棚、床、窓などに砂ぼこりが多く付着していた。



図14 移転前の梅田収蔵庫

梅田収蔵庫での梱包の作業の流れとしては、最初に資料に付着している砂ぼこりを落とす簡易クリーニングの作業から始まった（図15）。事業者が持参した薄葉紙や布切れを使って資料一つ一つの砂ぼこりを落とし、それから文化資料館で行った作業の流れと同様に行った。



図15 民俗資料の簡易クリーニングの様子

10月から12月までは、1週間の作業を定例化し、基本的に火曜日・水曜日は梅田収蔵庫で資料梱包、木曜日は梅田収蔵庫から市博物館へ資料の運搬、金曜日は市博物館で資料開梱（図16）、という流れで行った。



図16 市博物館収蔵庫の棚に資料を設置する様子

梅田収蔵庫にある民俗資料は、基本的に文化資料館で整理作業を行った資料（資料番号が附番されている資料）であるため、荷札の紛失や白いペンキで書かれた番号の消失がなければ民俗資料受入原簿との突合せは順調に進んだ。ただ、上記でも述べたように、梅田収蔵庫内の環境が良くなかったため、荷札の紛失など多く発生した。

梅田収蔵庫にあった長持や便所ガメ（図17）といった一部の大型資料に関しては、市博物館から徒歩5分程度に位置する民俗資料館旧和田家住宅に運搬、設置を行った。

市博物館での開梱作業は、民俗資料を収蔵する歴史・民俗収蔵庫だけでなく、自然資料を収蔵する自然収蔵庫・液浸収蔵庫や考古資料を収蔵する考古収蔵庫の資料も行った。自然収蔵庫や考古収蔵庫は比較的収蔵容量に対して余裕があったため、梱包済みの民俗資料の一部を一時的に置くこともあった。

(6) 1月・2月の作業

4月以降移転業務は1日1現場のみの作業であったが、1月以降は進捗状況から判断して、梅田収蔵庫で梱包作業を行うと同時に、市博物館でも開梱作業を行うなど、1日2現場もしくは3現場での作業の日もあった。また、4月以降移転業務は火曜日から金曜日の週4日間であったが、1月以降は月曜日も作業日とし、週5日間の作業となった。

梅田収蔵庫は、12月末時点で梱包を完了させる予定であったが、大型のタンス（図18）、自然資料など資料の一部が未梱包であったため、引き続き作業を行った。梅田収蔵庫は、文化資料館の収蔵庫から転用する棚を設置するなどの理由があったことから、文化資料館所管の資料は全て梅田収蔵庫から移動する必要があるがあった。そのため、資料番号が不明な資料などの一部の資料に関しては、その場で確認作業を行わず、一度文化資料館へ運搬し、3月以降に資料の状態等を再確認することとした。2月下旬には、梅田収蔵庫にある文化資料館所管の資料は全て移動することができた。文化資料館から移動してきた棚を設置した後、9月に梅田収蔵庫から調理場に移動させた社会教育課文化財保護担当所管の考古資料に関して、市博物館に資料を移動させて空いた空間を活用し、梅田収蔵庫に移動させた。

文化資料館は、7月末時点で梱包を完了させる予定であったが、未梱包の資料が残っていたため、1月以降に梱包を再開した。外収蔵庫にある資料に関しては、一度文化資料館内に移してから梱包を



図 17 民俗資料館旧和田家住宅に設置した便所ガメ



図 18 大型のタンスの梱包の様子

行った。文化資料館の敷地内にあった馬入川鉄橋のレンガに関しては、事業者の重量物運搬部門の作業員によって、下見が行われた。運搬、設置には普段運搬に用いられているトラックではなく、搭載型トラッククレーン車が用いられ、市博物館の屋外展示スペースに設置した(図19)。同じく文化資料館の敷地内にあった鶴嶺八幡宮の一ノ鳥居(西行の歌碑)に関しては、事業者による運搬、設置が困難であったため、文化資料館の解体時に行うこととなった。文化資料館の収蔵庫内にあった棚に関しては、梅田収蔵庫に運搬、設置を行った。資料番号が不明な資料などの一部の資料に関しては、市博物館へ運搬は行わず、梅田収蔵庫から文化資料館へ移動してきた資料も含め、3月以降に資料の状態等を再確認することとした。



図 19 馬入川鉄橋のレンガの設置の様子

1月以降は鶴が台小学校での作業を開始した。鶴が台小学校には、民俗資料、図書資料があった。また、社会教育課文化財保護担当所管の考古資料と図書資料もあった。民俗資料に関しては、一部資料を除き、市博物館へ運搬を行った。図書資料に関しては、令和3年度中に分野ごとの仕分けを行い、全て博物館へ運搬した。社会教育課文化財保護担当所管の資料に関しては、室内で整理作業を行ったが運搬は行わなかった。その後、9月に梅田収蔵庫から調理場に移動させた社会教育課文化財保護担当所管の図書資料に関して、市博物館に資料を移動させて空いた空間を活用し、鶴が台小学校に移動させた。

市博物館の収蔵庫で、自然収蔵庫、液浸収蔵庫、考古収蔵庫では、おおむね予定していた分類ごとに資料を棚に収めることができた。

(7)3月の作業

3月は、一般の引越しが多くなる時期であるため、事業者が人員不足になることから、2月末までに事業者に行ってももらう移転業務は全て完了するよう進め、完了した。

事業者による作業は無かったが、市博物館に資料が揃ったことから、資料を対象としたくん蒸を業者に委託した。くん蒸は市博物館の全ての収蔵庫と、未整理資料の置かれている展示準備室で行った。

3 移転業務を行って気が付いた問題点・課題等

民俗資料に関して、資料番号の確認ができない資料が多数見つかった。それらの資料が、資料番号は振られているのだが、荷札の紛失やや白いペンキの番号が消えてしまったことで不明となってしまった資料であるのか、元々資料番号が振られていない未整理資料であるのか、移転業務中の現場では判断がつかなかった。

文化資料館にある資料の移転は、市博物館が開館する7月末までに完了予定であったが、資料点数が多いことがあり7月末に終わらず、特に未整理資料と外収蔵庫の資料を年明け1~2月にも行った。

梅田収蔵庫は空調が無いので、気温が高い日は作業員や職員の熱中症等の危険があると判断したため、9月は調理場への移動のみで、他の作業は行うことができなかった。

市博物館の収蔵庫は、文化資料館の収蔵容積をもとに、新たな収集活動にも対応できるよう設計した。しかし、歴史・民俗収蔵庫に関しては、文化資料館等に収蔵していた民俗資料の実際量は、その1.5~2倍以上の容積があることが運搬・設置して明らかになった。

民俗資料に関しては、他の分野の資料と比べても、分類の数が多く、歴史・民俗収蔵庫内での棚の振り分けを移転業務が始まる前に行ったが、実際に資料を棚に収め始めたところ、一部の分類では当初指定した分類の棚だけでは収まりきらない等が発生し、他の分類の棚に入れるなど、棚の振り分けから大きく変更があった。分類ごとの棚のエリアを決めるにあたっては、移転業務前の梅田収蔵庫の棚に入っている資料の分類の割合からみて、各分類のエリアを設定していた。しかし、想像よりも多くの民俗資料が梅田収蔵庫や、文化資料館から出てきたことによってエリアの変更が生じた。また、大型の資料の一部が歴史・民俗収蔵庫内の棚と棚の間の通路に仮設置している状態になっている。未整理資料については、想定よりも多くの資料があったため、歴史・民俗収蔵庫内の未整理資料エリアに収まりきらず、管理用通路、考古収蔵庫、展示準備室の一部に仮置きの状態である。

基本展示室にあるユニット展示は全17テーマあるうちの8テーマが展示室に展示されている。年3回の展示替えを行うことで、来館者は市博物館に訪れる時期によって異なる展示を見ることができ、そのため、展示室に展示されていない資料に関しては、それぞれの分野ごとの収蔵庫に収蔵する必要がある。特に展示什器は大型のものが多いため、歴史・民俗収蔵庫以外の収蔵庫には収めることができず、展示什器と資料が一体となっているものは歴史・民俗収蔵庫に収蔵し、展示什器のみのもので一部は、管理用通路に設置している。本来こういった展示什器に関しては、展示準備室に収めるはずであるが、展示準備室は民俗資料の未整理資料があるため、置くことができない状態である。

4 今後について

民俗資料に関して、歴史・民俗収蔵庫内では、一部の資料が棚に収められておらず、棚と棚の間の通路に置かれた状態になっている。また、考古収蔵庫、展示準備室、管理用通路にもそれぞれ置かれた状態となっているため、整理作業を進めて全ての資料を歴史・民俗収蔵庫の棚の中に収める必要がある。

自然資料に関して、未整理資料が多く見つかったことから、その整理資料を行う必要がある。

どの資料の分野に関しても、今後資料収集活動に関する方針を決め、それに従って資料の収集活動を行う必要がある。そのため、今後市博物館協議会で方針を諮る予定である。

5 最後に

本移転業務は、新型コロナウイルス蔓延の社会情勢下において、市博物館の展示製作（令和2年8月から令和4年5月末日）と開館、運営とワークショップをはじめとした教育普及事業と並行して行った。そのため、日中は移転業務の現場へ行き、夕方以降に、開館前は展示製作や開館に向けての打ち合わせを、開館後は日常業務やワークショップの準備等を行うといった1年間で、非常に苦勞した。全ての業務を並行して行うよりも、一つ一つ業務をこなして、開館へ準備を進めた方がよいと感じた。

* 茅ヶ崎市博物館学芸員

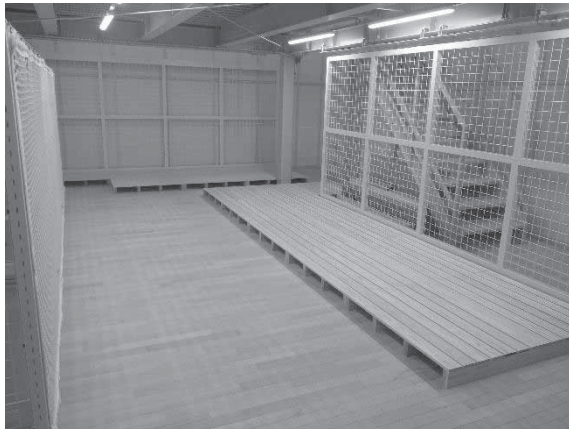


図 20 市博物館歴史・民俗収蔵庫（資料移転前）



図 21 市博物館歴史・民俗収蔵庫（資料移転後）

茅ヶ崎市南部の蛾類と茅ヶ崎市全体の蛾相および北部丘陵の蛾への追加記録

緒方 隆*

はじめに

文化資料館調査研究報告27,28,29,30に報告した「茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(1)」(緒方 ほか, 2018), 「同 (2)」(緒方 ほか, 2019), 「同 (3)」(緒方 ほか, 2020), 「同 (4)」(緒方 ほか, 2021)に続き、茅ヶ崎市南部の蛾を報告する。また、北部の蛾の追加記録と茅ヶ崎市全体の蛾相をまとめる。

茅ヶ崎市南部は砂丘上にあり、住宅地が発達している。筆者は、茅ヶ崎市内北部丘陵でのライトトラップ採集と並行して、南部の東海岸北1丁目において、自宅の玄関灯、庭園灯を点灯し蛾類の採集を行った。調査初期の2008年4月頃から2009年12月頃は白色灯、蛍光灯でありそれなりの飛来を見た。その後変更時期は不明だが、LEDに替えてから飛来数は減っている。自宅の近くにはクロマツを主体とした高砂緑地がある。また、南部の他地点についても若干の採集を行った。観察を続けている海岸部と神奈川県藤沢土木事務所海浜自然生態園(汐見台)は人為的とはいえ特色のある環境が維持されている。

上記に加え2022年6月末から2023年12月まで自宅灯りや高砂緑地の公園灯巡りでの採集を行い記録に加えた。日付けの空白があるところは筆者の個人的な事情や天候が理由で他意は無い。

今回は通し番号とし、各科ごとの番号にはしなかった。茅ヶ崎の蛾として初めて確認できた種類については、番号の頭に*を付けた。また、神奈川県内の記録は神奈川虫報、誘蛾灯、月刊むしからの情報のみで、遺漏があるとすれば筆者の不注意でお許しを頂きたい。

採集記録の記載の詳細については「茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(1)」(緒方 ほか, 2018)を参照していただきたい。2023年10月30日から11月8日にかけてナワシログミの開花に合わせて集中的に採集を行い採集時間が確実な物は日付表記の後に18:00等と示した。

同定は全て緒方が行い、講談社「日本産蛾類大図鑑(井上 ほか, 1982)」(以後「大図鑑」)と学研「日本産蛾類標準図鑑(岸田 編, 2011)」(以後「標準」)、「日本の鱗翅類(駒井 ほか, 2011)」(以後「鱗翅類」)を参照した。注目する種には短いコメントを付したが、生態的知見は「標準」、「鱗翅類」からの引用が主である。標本は緒方が保管している。



図1 南部調査地点

茅ヶ崎市南部の蛾類報告

チョウ(鱗翅)目 Lepidoptera

ヒロズコガ上科 Tineoidea ヒロズコガ科 Tineidae

フサクチヒロズコガ亜科 Myrmecozelinae

1. マダラマルハヒロズコガ *Ippa conspersa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VII.2008; 1 ex., 同地, 19.VI.2009; 1 ex., 同地, 2.VII.2009; 1 ex., 同地, 7.VII.2022; 1 ex., 同地, 12.VII.2022; 1 ex., 同地, 14.VII.2022; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 22.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 3 exs., 同地, 25.VI.2023; 3 exs., 同地, 27.VI.2023.

ヒロズコガ亜科 Tineinae

*2. ウスグロイガ *Niditinea tugurialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VI.2022.

3. マエモンクロヒロズコガ *Monopis longella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.X.2008; 1 ex., 同地, 21.X.2008; 1 ex., 同地, 22.IV.2009; 1 ex., 同地, 7.V.2009; 1 ex., 同地, 15.VIII.2009; 1 ex., 同地, 20.VII.2022.

*4. ウスグロスカシモンヒロズコガ *Crypsithyris japonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.X.2009; 1 ex., 同地, 21.X.2022. 神奈川県初記録。幼虫は地衣類と昆虫の死骸を食べるとある。

スジモンヒロズコガ亜科 Dryadaulinae

*5. ヒメツマオレガ *Dryadula epischista* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VIII.2009; 3 exs., 同地, 28.VIII.2009; 1 ex., 同地, 17.IX.2009; 1 ex., 同地, 25.IX.2009; 1 ex., 同地, 26.IX.2009; 2 exs., 同地, 1.X.2009. 神奈川県初記録。開張7~8mmの小型種。既産地は大阪、門司、香港、食餌は未知とある。船舶による移動種だろうか。茅ヶ崎も川崎、横浜、横須賀に近いと言えるだろう。

ツマオレガ亜科 Erechthiinae

6. クロスジツマオレガ *Erechthias atririvis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VII.2009; 1 ex., 同地, 25.VI.2022; 1 ex., 同地, 17.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023.

ホソガ上科 Gracillarioidea ホソガ科 Gracillariidae ホソガ亜科 Gracillariinae

ホシボシホソガ類 Parornix-group

*7. ホシボシホソガ *Callisto multimaculata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2009.

ハマキホソガ類 Gracillaria-group

*8. ツツジハマキホソガ *Caloptilia azaleella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.IX.2009.

神奈川県初記録。栽培種のツツジ類によく寄生するとある。

*9. エノキハマキホソガ *Caloptilia celtidis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023.

モグリホソガ類 Acrocercops-group

*10. ツタホソガ *Spulerina parthenocissi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.IX.2009; 1 ex., 同地, 23.IX.2009.

神奈川県初記録。

コハモグリガ亜科 Phyllocnistinae

- *11. ミカンコハモグリ *Phyllocnistis citrella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009.

神奈川県初記録。栽培種ミカン類に寄生。

スガ上科 Yponomeutoidea スガ科 Yponomeutidae スガ亜科 Yponomeutinae

- *12. コマユミシロスガ *Yponomeuta polystigmellus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VII.2023.

13. マサキスガ *Yponomeuta meguronis* 2 exs., 東海岸北1丁目, 15.X.2008; 2 exs., 同地, 16.X.2008.

コナガ科 Plutellidae

14. コナガ *Plutella xylostella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.X.2008; 1 ex., 同地, 20.V.2009; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 19.VII.2022; 1 ex., 同地, 22.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 2 exs., 同地, 17.V.2023; 3 exs., 同地, 18.V.2023; 5 exs., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 21.V.2023; 1 ex., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 2 exs., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 2 exs., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 27.VI.2023; 1 ex., 同地, 28.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VII.2023; 2 exs., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 23.XI.2023.

15. ヒロバコナガ *Leuroperna sera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.X.2008.

アトヒゲコガ科 Acrolepiidae

- *16. ヤマノイモコガ *Acrolepiopsis suzukiella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.V.2023; 1 ex., 同地, 19.V.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023.

キバガ上科 Gelechioidea ヒラタマルハキバガ科 Depressariidae

- *17. ミカンヒラタマルハキバガ *Psorosticha melanocrepida* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.V.2009; 1 ex., 同地, 15.III.2021; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 4.VIII.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 22.V.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 13.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023.

マルハキバガ科 Oecophoridae マルハキバガ亜科 Oecophorinae

- *18. フタモンクロオビマルハキバガ *Barea enigmella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.VI.2022; 2 exs., 同地, 25.VI.2022; 4 exs., 同地, 26.VI.2022; 1 ex., 同地, 27.VI.2022; 2 exs., 同地, 28.VI.2022; 1 ex., 同地, 29.VI.2022; 1 ex., 同地, 1.VII.2022; 1 ex., 同地, 6.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 2 exs., 同地, 8.VI.2023; 2 exs., 同地, 9.VI.2023; 22 exs., 同地, 19.VI.2023; 17 ex., 同地, 20.VI.2023; 2 exs., 同地, 21.VI.2023; 2 exs., 同地, 23.VI.2023; 3 exs., 同地, 24.VI.2023; 5 exs., 同地, 25.VI.2023; 3 exs., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 27.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 30.VI.2023; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023. 月刊むし, 615, (蛾界編集グループ, 2022) に写真が掲載され同定した。飛来数が多く6月21日から6月29日までの採集個体以外は、22:00に自宅外灯に飛来し止まっている個体数を記録した。14 exs., 21.VI.2023; 14 exs., 22.VI.2023; 17 exs., 23.VI.2023; 15 exs., 24.VI.2023; 20 exs., 25.VI.2023; 12 exs., 27.VI.2023; 9 exs., 28.VI.2023; 8 exs., 29.VI.2023.

- *19. コクマルハキバガ *Martyringa xeraula* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.XI.2008; 1 ex., 同地, 28.V.2009; 1 ex., 同

地, 31.V.2009; 1 ex., 同地, 12.VI.2009; 1 ex., 同地, 31.VIII.2022; 1 ex., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 25.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023. 貯穀害虫として知られる、コクは穀であろう。

20. シロスジベニマルハキバガ *Promalactis enopisema* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.V.2009; 1 ex., 同地, 26.V.2009; 1 ex., 同地, 20.VI.2009; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 2 exs., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 26.V.2023; 3 exs., 同地, 30.V.2023; 2 exs., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023.

*21. シロスジカバマルハキバガ *Promalactis suzukiella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.VII.2023. 神奈川県初記録。

22. カレハチビマルハキバガ *Tyrolimnas anthraconesa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.VII.2009; 2 exs., 同地, 7.VII.2009; 2 exs., 同地, 6.VII.2022; 1 ex., 同地, 9.VII.2022; 1 ex., 同地, 11.VII.2022; 1 ex., 同地, 13.VII.2022; 1 ex., 同地, 17.VII.2022; 1 ex., 同地, 20.VII.2022; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 2 exs., 同地, 20.VI.2023; 2 exs., 同地, 24.VI.2023; 2 exs., 同地, 25.VI.2023; 2 exs., 同地, 26.V.2023; 1 ex., 同地, 27.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 2 exs., 同地, 2.VII.2023; 2 exs., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 5.VII.2023; 4 exs., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 3 exs., 同地, 15.VII.2023; 2 exs., 同地, 22.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023.

ヒゲナガキバガ科 *Lecithoceridae* ハビロキバガ亜科 *Oditinae*

*23. フタクロボシハビロキバガ *Scythrioides issikii* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.VIII.2009.

オビヒゲナガキバガ亜科 *Torodorinae*

24. クロカクバネヒゲナガキバガ *Athymoris martialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 10.IX.2022.

ホンバヒゲナガキバガ亜科 *Lecithocerinae*

*25. フタテンホンソバヒゲナガキバガ *Lecithocera cerussata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.IX.2022.

*26. キイロホンソバヒゲナガキバガ *Lecithocera sp.2* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.IX.2009.

*27. ムモンクロヒゲナガキバガ *Catacreagra notolychna* 2 exs., 東海岸北1丁目, 8.X.2008; 2 exs., 同地, 9.X.2008; 1 ex., 同地, 15.X.2008; 1 ex., 同地, 16.X.2008; 2 exs., 同地, 2.XI.2008; 1 ex., 同地, 29.V.2009; 1 ex., 同地, 15.VIII.2009; 1 ex., 同地, 25.VIII.2009; 2 exs., 同地, 2.IX.2009. 神奈川県初記録。

ニセマイコガ科 *Stathmopodidae*

*28. カキノヘタムシガ *Stathmopoda masinissa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VI.2023.

*29. キイロマイコガ *Stathmopoda auriferella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.VII.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 3 exs., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023.

*30. モトキマイコガ *Stathmopoda moriutiella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VIII.2009; 2 exs., 同地, 28.VIII.2009; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地,

20.VI.2023; 1 ex., 同地, 21.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023.

マツ科に寄生。神奈川県初記録。

ミツボシキバガ科 Autostichidae

* 31. ヨツモンミツボシキバガ *Autosticha tetragonopa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023.

* 32. ヒロバミツボシキバガ *Autosticha imitativa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VII.2009. 神奈川県初記録。

33. ミツボシキバガ *Autosticha modicella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.VI.2009; 1 ex., 同地, 15.VI.2009; 1 ex., 同地, 3.VIII.2009; 1 ex., 同地, 27.VIII.2009; 1 ex., 同地, 7.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 22.VI.2023; 2 exs., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 5.VII.2023; 3 exs., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 2 exs., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023.

34. クロボシミツボシキバガ *Semnolecha pachysticta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VII.2009; 1 ex., 同地, 4.VIII.2009; 1 ex., 同地, 28.VIII.2009; 1 ex., 同地, 3.IX.2009; 1 ex., 同地, 26.IX.2009; 1 ex., 同地, 31.V.2023.

エグリキバガ科 Peleopodidae

35. ネズミエグリキバガ *Acria ceramitis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VI.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023.

カザリバガ科 Cosmopterigidae

* 36. ベニモントガリホソガ *Labdia semicoccinea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 2 exs., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023.

* 37. ギンスジトガリホソガ *Labdia niphosticta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.VII.2023.

* 38. コブヒゲトガリホソバ *Labdia antennella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VII.2009; 2 exs., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.VII.2023. 神奈川県初記録。

* 39. マダラトガリホソガ *Anatrachyntis japonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VIII.2022.

40. トウモロコシトガリホソガ *Anatrachyntis rileyi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.X.2008; 1 ex., 同地, 7.VII.2009.

北部丘陵の蛾類(4) (緒方 ほか, 2021) で当種について言及した。精米施設は近くになく、貯穀環境は家庭の台所であろう。市街地で新しいニッチを開拓したのか。

41. ススキオビカザリバ *Cosmopterix dulcivora* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VIII.2009; 1 ex., 同地, 6.IX.2009; 1 ex., 同地, 23.VII.2022.

*42. ヒメカザリバ *Cosmopterix setariella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.IX.2009; 1 ex., 同地, 17.IX.2009.

神奈川県初記録。食草はエノコログサ類。

*43. ホソカザリバ *Cosmopterix attenuatella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.VIII.2022.

*44. アングーンカザリバ *Cosmopterix angoonae* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VII.2022.

キバガ科 Gelechiidae キバガ亜科 Gelechiinae

*45. イブキチビキバガ *Stenolechia bathrodyas* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.VIII.2009. 神奈川県初記録。筆者はカイヅカイブキに発生した当種の駆除をした経験がある。

サクラキバガ亜科 Anacamptinae

*46. クロチビキバガ *Aproaerema anthyllidella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VI.2023.

カザリキバガ亜科 Aristoteliinae

*47. セジロチビキバガ *Agnippe syriactis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.IX.2009. 神奈川県初記録。

*48. ヤマモモキバガ *Polyhymno pancratiastis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.VII.2022; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 2 exs., 同地, 17.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023.

49. ギンチビキバガ *Cnaphostola angustella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.IX.2009; 1 ex., 同地, 1.X.2009.

神奈川県初記録。

フサキバガ亜科 Dichomeridinae

50. イモキバガ *Helcystogramma triannulella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.IX.2023.

*51. ウスアトベリキバガ *Hypatima spathota* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.VII.2023.

*52. チャマダラノコメキバガ *Hypatima teramotoi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2022; 1 ex., 同地, 8.XI.2022; 1 ex., 同地, 11.XI.2022.

神奈川県初記録。

マダラガ上科 Zygaenoidea イラガ科 Limacodidae

*53. ヒメクロイラガ *Scopelodes contracta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VIII.2023.

54. テングイラガ *Microleon longipalpis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.IX.2009; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.X.2023.

55. アカイラガ *Phrixolepia sericea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.V.2009.

56. クロシタアオイラガ *Parasa hilarula* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VI.2009.

マダラガ科 Zygaenidae クロマダラ亜科 Procridinae

57. タケノホソクロバ *Fuscartona martini* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.VII.2008; 3 exs., 同地, 20.VIII.2018.

*58. ウメスカシクロバ *Illiberis rotundata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.V.2023.

マダラガ亜科 Zygaenidae

*59. ミノウスバ *Pryeria sinica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.XI.2008; 1 ex., 同地, 10.XI.2008; 1 ex., 同地,

16.XI.2008. 春、芽吹き早いマサキ生け垣に幼虫が発生し、被害を与えることがある。成虫は昼飛性で、晩秋に発生し、卵で越冬する。

ハマキガ上科 Tortricoidea ハマキガ科 Tortricidae ハマキガ亜科 Tortricinae

ハマキガ族 Tortricinae

* 60. バラモンハマキ *Acleris comariana* 1 ex., 汐見台, 22.IV.2022. 神奈川県初記録。

* 61. ナカジロハマキ *Acleris japonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.V.2023.

ホソハマキガ族 Cochylini

* 62. フタスジキホソハマキ *Aethes rectilineana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.VIII.2022. 神奈川県初記録。

カクモンハマキガ族 Archipini

63. トビモンハマキ *Gnorismoneura mesotoma* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.VI.2009; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 29.V.2023; 2 exs., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 21.VI.2023.

64. チャハマキ *Homona magnanima* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023.

65. チャノココクモンハマキ *Adoxophyes honmai* 2 exs., 東海岸北1丁目, 9.X.2008; 2 exs., 同地, 15.X.2008; 3 exs., 同地, 16.X.2009; 1 ex., 同地, 17.X.2008; 1 ex., 同地, 21.X.2008; 1 ex., 同地, 22.X.2008; 1 ex., 同地, 23.X.2008; 1 ex., 同地, 27.X.2008; 1 ex., 同地, 30.X.2008; 1 ex., 同地, 2.XI.2008; 1 ex., 同地, 19.IX.2009; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 9.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 31.VIII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 13.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 3.X.2022; 1 ex., 同地, 8.X.2022; 4 exs., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 2 exs., 同地, 17.X.2022; 1 ex., 同地, 20.X.2022; 1 ex., 同地, 22.X.2022; 1 ex., 同地, 27.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2022; 1 ex., 同地, 2.XI.2022; 1 ex., 同地, 5.XI.2022; 1 ex., 同地, 10.IV.2023; 1 ex., 同地, 12.IV.2023; 1 ex., 同地, 19.IV.2023; 1 ex., 同地, 20.IV.2023; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 3.V.2023; 1 ex., 同地, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.IV.2023; 1 ex., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 22.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 30.VI.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 11.VII.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 2 exs., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 1 ex., 同地, 7.XI.2023.

ヒメハマキガ亜科 Olethreutinae ハラプトヒメハマキガ族 Microcorsini

* 66. ハラプトヒメハマキ *Cryptasasma angulicostana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.X.2023; 1 ex., 同地, 24. X. 2023.

トガリバヒメハマキガ族 Bactrini

67. シロテントガリバヒメハマキ *Bactra venosana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.IV.2022; 1 ex., 同地, 1.VII.2022; 1 ex., 同地, 19.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.VII.2022; 1 ex., 同地, 25.VII.2022; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 1 ex., 同地, 11.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 23.V.2023; 1 ex., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 31.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地,

1.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 2 exs., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023.

*68. フタモントガリバヒメハマキ *Bactra hostilis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.IX.2009; 1 ex., 汐見台, 28.V.2021; 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.VIII.2023.

クラークヒメハマキガ族 *Gatesclarkeanini*

*69. サッポロヒメハマキ *Ukamenia sapporensis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 27.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 2 exs., 同地, 10.X.2023; 3 exs., 同地, 26.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.

ヒメハマキガ族 *Olethreutini*

*70. ヤマモモヒメハマキ *Eudemis gyrotis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.XI.2008; 1 ex., 同地, 24.VI.2022; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 2 exs., 同地, 27.VI.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 1.XI.2022; 1 ex., 同地, 12.X.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 1 ex., 同地, 9.XI.2022; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 20.VI.2023; 2 exs., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 28.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 2 exs., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 22.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 30.VII.2023; 3 exs., 同地, 31.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 23.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 13.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 2 exs., 同地, 27.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 2 exs., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 2 exs., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 22.X.2023; 1 ex., 同地, 28.X.2023.

*71. スジオビヒメハマキ *Dactyloglypha tonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023. 神奈川県初記録。ホルトノキ科が食草、茅ヶ崎市では街路樹、公園樹として植栽されている。

*72. スネブトヒメハマキ *Phaecadophora fimbriata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.X.2008. 1 ex., 同地, 5.VII.2023.

73. コシロアシヒメハマキ *Hystriochoscelus spathanum* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VIII.2023.

*74. チャモンヒメハマキ *Apotomis cuphostra* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023;

*75. クリオビキヒメハマキ *Olethreutes obovata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.V.2009; 1 ex., 同地, VIII.17.2009; 1 ex., 同地, 17.IX.2009; 1 ex., 同地, 18.IX.2009; 1 ex., 同地, 19.IX.2009; 2 exs., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 22.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, .VIII.2023.

食草はバラ科シモツケ属。人工的な環境に多いとある。付近には逸出したユキヤナギがあり、園芸種コデマリ、シジミバナが栽培されている。

76. コケキオビヒメハマキ *Olethreutes aurofasciana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, VI.29.2023.

77. ホソバチビヒメハマキ *Lobesia aeolopa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.X.2009; 1 ex., 同地, 11.X.2009; 1 ex., 同地, 17.VII.2022; 1 ex., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 2 exs., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地,

6.IX.2022; 2 exs., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 2 exs., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 4 exs., 同地, 25.IX.2022; 3 exs., 同地, 1.X.2022; 2 exs., 同地, 2.X.2022; 4 exs., 同地, 3.X.2022; 4 exs., 同地, 11.XI.2022; 1 ex., 同地, 15.XI.2022; 1 ex., 同地, 17.XI.2022; 1 ex., 同地, 18.XI.2022; 1 ex., 同地, 21.XI.2022. 1 ex., 同地, 19.IV.2023; 2 exs., 同地, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 4 exs., 同地, 20.VI.2023; 4 exs., 同地, 21.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 3 exs., 同地, 25.VI.2023; 2 exs., 同地, 26.VI.2023; 2 exs., 同地, 27.VI.2023; 3 exs., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VII.2023; 1 ex., 同地, 13.VII.2023; 3 exs., 同地, 16.VII.2023; 2 exs., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 22.VII.2023; 3 exs., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VII.2023; 1 ex., 同地, 30.VII.2023; 2 exs., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 exs., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 2 exs., 同地, 19.VIII.2023; 2 exs., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.VIII.2023; 2 exs., 同地, 26.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 2 exs., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 2 exs., 同地, 18.IX.2023; 2 exs., 同地, 13.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 8.X.2023; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 2 exs., 同地, 19.X.2023; 2 exs., 同地, 23.X.2023; 2 exs., 同地, 31.X.2023; 1 ex., 同地, 2.XI.2023; 1 ex., 同地, 5.XI.2023; 1 ex., 同地, 23.XI.2023.

カギバヒメハマキガ族 *Enarmoniini*

78. ヒノキカワモグリガ *Coenobiodes granitalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.V.2023.

*79. コギンボシヒメハマキ *Enarmonia decor* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.V.2023.

*80. センダンヒメハマキ *Loboschiza koenigiana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 24.IV.2023; 1 ex., 同地, 25.IV.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 4.X.2023; 1 ex., 同地, 27.X.2023.

モグリヒメハマキガ族 *Eucosmini*

*81. モッコクヒメハマキ '*Eucoenogenes*' *ancyrota* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.XI.2008; 1 ex., 同地, 15.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.VII.2022; 1 ex., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.VIII.2022; 1 ex., 同地, 10.VIII.2022; 1 ex., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 13.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 2 exs., 同地, 20.VI.2023; 3 exs., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 3 exs., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 2 exs., 同地, 17.VII.2023; 1 ex., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 3 exs., 同地, 22.VII.2023; 4 exs., 同地, 25.VII.2023; 3 exs., 同地, 26.VII.2023; 5 exs., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 28.VII.2023; 3 exs., 同地, 29.VII.2023; 2 exs., 同地, 30.VII.2023; 1 ex., 同地, 31.VII.2023; 2 exs., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 2 exs., 同地, 4.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 2 exs., 同地, 8.VIII.2023; 1 ex., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.VIII.2023;

2 exs., 同地, 12.VIII.2023; 2 exs., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 1 ex., 同地, 23.VIII.2023; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023.

庭園樹として植えられたモッコクに発生する、よく結実し実生が生えている。

* 82. クロゲハイイロヒメハマキ *Spilonota melanocopa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.V.2023.

* 83. セギンモンヒメハマキ *Zeiraphera bicolora* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VII.2023. 神奈川県初記録。

* 84. マツアカシムシ *Rhyacionia dativa* 3 exs., 東海岸北1丁目, 30.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 2 exs., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VI.2023; 2 exs., 同地, 24.VI.2023; 2 exs., 同地, 25.VI.2023; 4 exs., 同地, 26.VI.2023; 2 exs., 同地, 27.VI.2023; 2 exs., 同地, 28.VI.2023; 2 exs., 同地, 29.VI.2023; 2 exs., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 2 exs., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 9.VII.2023; 1 ex., 同地, 11.VII.2023; 2 exs., 同地, 13.VII.2023; 2 exs., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 24.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023. 多数採集出来た。筆者宅と高砂緑地は30m程の距離であるが、筆者宅への飛来は無かった。筆者宅の玄関灯等は高さ約2m、高砂緑地の公園灯は5m程度である。当種の行動が松林内限定なのだろうか、加えて飛行する高さもあるのか。当属幼虫の食性はマツ属に限定されるとある。

* 85. ワシヤシントメヒメハマキ *Rhyacionia washiyai* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023. 神奈川県初記録。同属の前種と比べて採集例は少ない。

* 86. マツズアカシムシ *Retinia cristata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VIII.2023; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023.

87. ヨモギメムシガ *Epiblema foenella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 8.IX.2023.

88. スギヒメハマキ *Epiblema sugii* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023.

* 89. アケビヒメハマキ *Rhopobota latipennis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.XI.2008.

90. クロネハイイロヒメハマキ *Rhopobota naevana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.VI.2009; 1 ex., 同地, 19.VI.2009; 1 ex., 同地, 24.VI.2009; 1 ex., 同地, 2.VII.2009; 1 ex., 同地, 16.X.2009; 1 ex., 同地, 12.VI.2021; 2 exs., 同地, 3.IX.2022; 2 exs., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.XI.2022; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 2 exs., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2022; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 21.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 2 exs., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 2 exs., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 3 exs., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 25.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 30.VII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 27.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023.

* 91. ズグロツマキハイイロヒメハマキ *Antichlidas trigonia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VIII.2022; 1 ex., 同地, 22.V.2023. 神奈川県初記録。

シンクイヒメハマキガ族 Grapholitini

92. ダイズサヤムシガ *Matsumuraeses falcana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.XI.2008; 1 ex., 汐見台, 8.XI.2021; 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 23.X.2022; 1 ex., 同地, 11.XI.2022; 2 exs., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 28.X.2023.

93. ナシヒメシンクイ *Grapholita molesta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 31.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023.

*94. コスジオビクロヒメハマキ *Parapammene glaucana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VII.2023.

*95. ヨツメヒメハマキ *Cydia danilevskyi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023.

*96. エンジュヒメハマキ *Cydia secretana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.VII.2022; 1 ex., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022. 1 ex., 同地, 20.VIII.2022.

ハマキモドキガ上科 Choreutoidea ハマキモドキガ科 Choreutidae ハマキモドキガ亜科 Choreutinae

*97. イヌビワハマキモドキ *Choreutis japonica* 2 exs., 東海岸北1丁目, 7.VII.2013; 1 ex., 同地, 13.VII.2013.

トウネズミモチの花に飛来した所を採集した。昼飛性である。

*98. ゴボウハマキモドキ *Tebenna micalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VI.2009; 1 ex., 同地, 25.VII.2009; 1 ex., 同地, 11.IX.2009; 1 ex., 同地, 1.X.2009; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023. 食草はゴボウ、ハハコグサとある。付近は北米原産の帰化種チチコグサモドキ属(広義のハハコグサ属から分割された)ウラジロチチコグサが優先しているため、食草にしているかもしれない。

トリバガ上科 Pterophoroidea トリバガ科 Pterophoridae カマトリバガ亜科 Pterophorinae

*99. トキンソウトリバ *Stenoptilodes taprobanes* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 29.VIII.2022; 3 exs., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 2 exs., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 2 exs., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 2 exs., 同地, 23.VIII.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023.

100. ブドウトリバ *Nippoptilia vitis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.X.2008; 2 exs., 同地, 22.X.2008; 1 ex., 同地, 28.X.2008; 1 ex., 同地, 3.XI.2008; 2 exs., 同地, 6.XI.2008; 1 ex., 同地, 13.IV.2009; 1 ex., 同地, 12.VI.2009; 1 ex., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 1.IX.2009; 1 ex., 同地, 22.IX.2009; 1 ex., 同地, 3.X.2009; 1 ex., 同地, 11.X.2009; 2 exs., 同地, 22.X.2009; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.VII.2022; 2 exs., 同地, 27.VII.2022; 2 exs., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 10.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2022; 1 ex., 同地, 17.VIII.2022; 1 ex., 同地, 19.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 1 ex., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VIII.2022; 2 exs., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 27.VIII.2022; 2 exs., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 2 exs., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.IX.2022; 5 exs., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 2 exs., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IX.2022; 1 ex., 同地,

2.X.2022; 1 ex., 同地, 10.X.2022; 1 ex., 同地, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 1 ex., 同地, 17.X.2022; 1 ex., 同地, 20.X.2022; 1 ex., 同地, 22.X.2022; 2 exs., 同地, 23.X.2022; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 2 exs., 同地, 12.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023. 2023年の採集数の減少は、前年の採集圧だろうか。

101. コブドウトリバ *Nippoptilia minor 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.X.2008; 1 ex., 同地, 18.VI.2009; 2 exs., 同地, 16.VII.2009; 1 ex., 同地, 26.VIII.2009; 2 exs., 同地, 1.IX.2009; 2 exs., 同地, 3.IX.2009; 1 ex., 同地, 31.VII.2022; 1 ex., 同地, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 2 exs., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 2 exs., 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 2 exs., 同地, 4.XI.2023; 1 ex., 同地, 30.XI.2023; 1 ex., 同地, 7.XII.2023. 坂本採集による相模原市上鶴間が神奈川県初記録(田中・坂本.2006)である、食草はヤブカラシで普通種。12月まで採集できた。

102. ヒルガオトリバ *Emmelina argoteles* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.X.2023.

メイガ上科 *Pyraloidea* メイガ科 *Pyralidae* ツヅリガ亜科 *Galleriinae* ツヅリガ族 *Galleriini*

103. ウスグロツヅリガ *Achroia innotata 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.X.2023.

104. コハチノスツヅリガ *Achroia grisella 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.IX.2022.

シマメイガ亜科 *Pyralinae* シマメイガ族 *Pyralini*

105. トビイロシマメイガ *Hypsopygia regina* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VIII.2009; 1 ex., 同地, 1.IX.2009; 1 ex., 同地, 31.VII.2022; 2 exs., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 9.VIII.2022; 1 ex., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 同地, 17.VIII.2022; 1 ex., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 4.VI.2023; 2 exs., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 11.VIII.2023; 1 ex., 同地, 13.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023.

106. モモイロシマメイガ *Hypsopygia mauritialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VIII.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.V.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023.

107. アカシマメイガ *Herculia pelasgalis 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.VII.2021; 1 ex., 同地, 10.VII.2023.

2021年採集の個体は新鮮で、薄暮、玄関灯に飛来した。

108. アカヘリシマメイガ *Herculia drabicialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.VII.2023; 1 ex., 同地, 16.IX.2023.

109. フタスジシマメイガ *Orthopygia glaucinalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.X.2008; 4 exs., 同地, 11.V.2009; 2 exs., 同地, 20.V.2009; 1 ex., 同地, 25.IX.2009; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2022; 2 exs., 同地, 4.X.2022; 1 ex., 同地, 28.X.2022; 1 ex., 同地, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 2.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023.

110. ツマアカシマメイガ *Orthopygia nannodes 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.VIII.2022.

*111. ツマキシマメイガ *Orthopygia placens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.VIII.2023.

112. カシノシマメイガ *Pyralis farinalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.V.2009. 1 ex., 同地, 9.VII.2022; 1 ex., 同地, 13.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023.

*113. ネグロシマメイガ *Pyralis pictalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.X.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023; 1 ex., 同地, 13.XI.2023.

114. ギンモンシマメイガ *Pyralis regalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VIII.2023.

*115. ツマグロシマメイガ *Arippara indicator* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VII.2023.

トガリメイガ族 *Endotrichini*

*116. ウスベニトガリメイガ *Endotricha olivacealis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.V.2009; 1 ex., 同地, 3.VIII.2009; 1 ex., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023.

*117. キモントガリメイガ *Endotricha kuznetzovi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VIII.2009.

118. カバイロトガリメイガ *Endotricha theonalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.V.2009; 1 ex., 同地, 15.V.2009; 2 exs., 同地, 21.V.2009; 1 ex., 同地, 22.V.2009; 2 exs., 同地, 23.VI.2009; 1 ex., 同地, 26.V.2009; 1 ex., 同地, 14.VII.2022; 2 exs., 同地, 15.VII.2022; 3 exs., 同地, 18.VII.2022; 2 exs., 同地, 19.VII.2022; 1 ex., 同地, 20.VII.2022; 1 ex., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 22.VII.2022; 3 exs., 同地, 24.VII.2022; 3 exs., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 30.VII.2022; 2 exs., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.VIII.2022; 1 ex., 同地, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 11.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2022; 2 exs., 同地, 14.VIII.2022; 2 exs., 同地, 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 20.VIII.2022; 2 exs., 同地, 21.VIII.2022; 2 exs., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.VIII.2022; 3 exs., 同地, 26.VIII.2022; 4 exs., 同地, 27.VIII.2022; 2 exs., 同地, 28.VIII.2022; 3 exs., 同地, 29.VIII.2022; 2 exs., 同地, 31.VIII.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 2 exs., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 3 exs., 同地, 10.IX.2022; 3 exs., 同地, 11.IX.2022; 3 exs., 同地, 12.IX.2022; 3 exs., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 1 ex., 同地, 26.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 30.IV.2023; 1 ex., 同地, 1.V.2023; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 4 exs., 同地, 7.V.2023; 1 ex., 同地, 13.V.2023; 1 ex., 同地, 14.V.2023; 5 exs., 同地, 15.V.2023; 3 exs., 同地, 16.V.2023; 3 exs., 同地, 17.V.2023; 2 exs., 同地, 18.V.2023; 4 exs., 同地, 20.V.2023; 2 exs., 同地, 21.V.2023; 2 exs., 同地, 22.V.2023; 3 exs., 同地, 24.V.2023; 5 exs., 同地, 26.V.2023; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 5 exs., 同地, 30.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 3.VI.2023; 3 exs., 同地, 5.VI.2023; 6 exs., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 30.VI.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 2 exs., 同地, 15.VII.2023; 2 exs., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 4 exs., 同地, 4.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 1 ex., 同地, 26.VIII.2023; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 2 exs., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023. 当地に産するシマメイガ科の最優占種である。北部では1 ex.のみの採集だった。幼虫は枯れ葉食い。2023年6月30日以降は全数採集せず、記録のための採集にとどめた。

フトメイガ亜科 *Epipaschiinae*

* 119. ウスグロフトメイガ *Lamida obscura* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.V.2023. 当地で採集された唯一のフトメイガ亜科の種である。高砂緑地の公園灯で採集した。食草はスダジイとあり、松頼庵には庭園樹として植栽されている。

マダラメイガ亜科 *Phycitinae* マダラメイガ族 *Phycitini*

120. アカフマダラメイガ *Acrobasis ferruginella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.IX.2009.

* 121. ヒメエノキアカオビマダラメイガ *Acrobasis subcelftfoliella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023. 神奈川県初記録。

* 122. ギンマダラメイガ *Acrobasis rubrizonella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023.

* 123. ウスグロアカオビマダラメイガ *Acrobasis fuscata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2023. 神奈川県初記録。

* 124. フタテンアカオビマダラメイガ *Conobathra tricolorella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.XI.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2023.

125. コフタグロマダラメイガ *Furcata pseudodichromella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VII.2022; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023.

* 126. オオフタグロマダラメイガ *Furcata paradichromella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023. 神奈川県初記録。

* 127. マルバスジマダラメイガ *Didia striatella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.IV.2009.

* 128. ニシザワマダラメイガ *Cathyalia nishizawai* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.X.2008; 1 ex., 同地, 5.VIII.2009. 神奈川県初記録。東京都の皇居と上赤坂御用地、長崎県平戸島で採集されている、当採集地はエノコログサ類、コバンソウ類等一年草イネ科、ハマアオスゲ、ウラジロチチコグサ、コセンダングサ等が散生する機械除草管理された砂地でハチク林とクロマツ、クス等も植栽されている。

* 129. クシヒゲマダラメイガ *Mussidia pectinicornella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.IX.2022. 神奈川県初記録。

* 130. ウスアカムラサキマダラメイガ *Addyme confusalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.IV.2009; 1 ex., 同地, 15.V.2009; 1 ex., 同地, 29.IX.2009; 1 ex., 同地, 7.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 17.X.2022; 3 exs., 同地, 23.IV.2023; 2 exs., 同地, 24.IV.2023; 1 ex., 同地, 3.V.2023; 1 ex., 同地, 4.V.2023; 3 exs., 同地, 12.V.2023; 2 exs., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 22.V.2023; 1 ex., 同地, 24.V.2022; 1 ex., 同地, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VI.2023; 3 exs., 同地, 27.VI.2023; 2 exs., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 2 exs., 同地, 3.VII.2023; 2 exs., 同地, 4.VII.2023; 2 exs., 同地, 6.VII.2023; 2 exs., 同地, 7.VII.2023; 4 exs., 同地, 8.VII.2023; 1 ex., 同地, 9.VII.2023; 5 exs., 同地, 10.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 13.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 2 exs., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 22.VII.2023; 4 exs., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 2 exs., 同地, 7.VIII.2023; 1

ex., 同地, 8.VIII.2023; 1 ex., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023; 3 exs., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 3 exs., 同地, 17.VIII.2023; 2 exs., 同地, 18.VIII.2023; 2 exs., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 2 exs., 同地, 21.VII.2023; 4 exs., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 23.VIII.2023; 4 exs., 同地, 24.VIII.2023; 3 exs., 同地, 25.VIII.2023; 2 exs., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 2 exs., 同地, 29.VIII.2023; 2 exs., 同地, 31.VIII.2023; 2 exs., 同地, 1.IX.2023; 2 exs., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 2 exs., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.IX. 2023; 3 exs., 同地, 17.IX.2023; 5 exs., 同地, 19.IX.2023; 3 exs., 同地, 20.IX.2023; 2 exs., 同地, 23.IX.2023; 3 exs., 同地, 24.IX.2023; 3 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 2 exs., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 3 exs., 同地, 10.X.2023.

全数採集を心掛けた。

*131. シロイチモジマダラメイガ *Etiella zinckenella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023; 2 exs., 同地, 16.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023.

*132. シロスジクロマダラメイガ *Ortholepis infausta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.VIII.2022.

133. ミカドマダラメイガ *Sciota mikadella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 22.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2023.

*134. マツアカマダラメイガ *Dioryctria pryeri* 3 exs., 東海岸北1丁目, 19.VI.2023; 7 exs., 同地, 20.VI.2023; 6 exs., 同地, 21.VI.2023; 4 exs., 同地, 22.VI.2023; 5 exs., 同地, 23.VI.2023; 17 exs., 同地, 24.VI.2023; 18 exs., 同地, 25.VI.2023; 13 exs., 同地, 26.VI.2023; 12 exs., 同地, 27.VI.2023; 5 exs., 同地, 28.VI.2023; 3 exs., 同地, 29.VI.2023; 2 exs., 同地, 1.VII.2023; 4 exs., 同地, 2.VII.2023; 11 exs., 同地, 3.VII.2023; 14 exs., 同地, 4.VII.2023; 14 exs., 同地, 5.VII.2023; 16 exs., 同地, 6.VII.2023; 9 exs., 同地, 7.VII.2023; 7 exs., 同地, 8.VII.2023; 6 exs., 同地, 9.VI.2023; 6 exs., 同地, 10.VII.2023; 6 exs., 同地, 11.VII.2023; 2 exs., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 13.VII.2023; 5 exs., 同地, 4.VII.2023; 5 exs., 同地, 15.VII.2023; 6 exs., 同地, 16.VI.2023; 4 exs., 同地, 17.VII.2023; 2 exs., 同地, 18.VII.2023; 6 exs., 同地, 20.VII.2023; 4 exs., 同地, 21.VII.2023; 7 exs., 同地, 22.VII.2023; 6 exs., 同地, 23.VII.2023; 2 exs., 同地, 25.VII.2023; 3 exs., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 28.VII.2023; 3 exs., 同地, 31.VII.2023; 3 exs., 同地, 2.VIII.2023; 2 exs., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023. 84. マツアカシムシと同様の採集例である。

135. アカマダラメイガ *Oncocera semirubella* 1 ex., 汐見台, 27.VI.2021; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 2 exs., 同地, 24.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 2 exs., 同地, 8.IX.2023; 5 exs., 同地, 12.IX.2023; 3 exs., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 16.IX.2023; 3 exs., 同地, 17.IX.2023; 2 exs., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023.

全数採集を心掛けた。

* 136. マエジロギンマダラメイガ *Pseudocrobasis nankingella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.IV.2023; 1 ex., 同地, 2.V.2023.

* 137. マエジロクロマダラメイガ *Assara funerella* 1 ex., 汐見台, 28.V.2021; 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VIII.2009; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VI.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023. 幼虫はクロマツの球果に食入するとある。

* 138. ウスマエジロマダラメイガ *Assara pallidella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.IX.2009; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.VIII.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 6 exs., 同地, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 22.V.2023; 4 exs., 同地, 25.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 2 exs., 同地, 4.VI.2023; 3 exs., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 2 exs., 同地, 21.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 2 exs., 同地, 3.VII.2023; 3 exs., 同地, 15.VII.2023; 3 exs., 同地, 16.VII.2023; 2 exs., 同地, 20.VII.2023; 2 exs., 同地, 21.VII.2023; 2 exs., 同地, 22.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 2 exs., 同地, 8.VIII.2023; 1 ex., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 2 exs., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 3 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023. 神奈川県初記録、平地に産するが少ないとある。食草は未知。

139. マエジロホソマダラメイガ *Phycitodes subcretacellus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2023.

* 140. ハイイロホソマダラメイガ *Phycitodes rotundisignus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VI.2023.

神奈川県初記録。

* 141. シロチビマダラメイガ *Eucampyla estriatella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 8.IX.2023. 神奈川県初記録。

* 142. ノシメマダラメイガ *Plodia interpunctella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.VII.2009.

全世界分布種。貯蔵穀物の主要害虫。

* 143. スジコナマダラメイガ *Ephestia kuehniella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023.

神奈川県初記録。

ツトガ科 Crambidae ツトガ亜科 Crambinae

144. シロエグリツトガ *Glaucocharis exsectella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008; 1 ex., 同地, 27.V.2009; 1 ex., 同地, 30.V.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 24.IX.2009; 1 ex., 同地, 27.IX.2009; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 2 exs., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 3 exs., 同地, 15.V.2023; 3 exs., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 24.VII.2023.

145. モンチビツトガ *Microchilo inexpectellus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.V.2009; 2 exs., 同地, 27.V.2009; 1 ex., 同地, 30.V.2009; 3 exs., 同地, 4.VIII.2009; 1 ex., 同地, 7.VII.2009; 1 ex., 同地, 14.VII.2022; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 2 exs., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 31.V.2023; 1 ex., 同地, 27.VI.2023; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 2 exs., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地,

16.VII.2023; 1 ex., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023.

146. ニカメイガ *Chilo suppressalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023.

* 147. ウスチャツトガ *Pseudocatharylla duplicella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 13.IX.2023; 1 ex., 同地, 16.IX.2023; 1 ex., 同地, 21.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023.

神奈川県初記録。

* 148. テンスジツトガ *Chrysoteuchia distinctella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VIII.2023.

149. シロスジツトガ *Crambus argyrophorus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.V.2009; 3 exs., 同地, 20.V.2009; 1 ex., 同地, 21.V.2009; 1 ex., 同地, 4.IX.2009; 1 ex., 同地, 9.IX.2009; 1 ex., 同地, 18.VII.2022; 2 exs., 同地, 19.VII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.X.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 19.IV.2023; 1 ex., 同地, 28.IV.2023; 3 exs., 同地, 2.V.2023; 4 exs., 同地, 3.V.2023; 2 exs., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 7.V.2023; 1 ex., 同地, 8.V.2023; 3 exs., 同地, 12.V.2023; 2 exs., 同地, 13.V.2023; 1 ex., 同地, 14.V.2023; 4 exs., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 2 exs., 同地, 18.V.2023; 3 exs., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 21.V.2023; 2 exs., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 25.V.2023; 4 exs., 同地, 26.V.2023; 4 exs., 同地, 30.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 3 exs., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 2.VI.2023; 2 exs., 同地, 4.VI.2023; 2 exs., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 9.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.VII.2023; 2 exs., 同地, 20.VII.2023; 2 exs., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 6.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 2 exs., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 2 exs., 同地, 28.VIII.2023; 2 exs., 同地, 10.IX.2023; 2 exs., 同地, 13.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023. 食草は未知とある。筆者は2023年6月採集時、枯れ葉の中に潜り込む個体を観察している。

* 150. クロフタオビツトガ *Neopediasia mixtalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 31.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 3 exs., 同地, 10.IX.2023; 2 exs., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 15.IX.2023.

151. シバツトガ *Parapediasia teterella* 3 exs., 東海岸北1丁目, 9.X.2008; 2 exs., 同地, 15.X.2008; 1 ex., 同地, 11.XI.2008; 1 ex., 同地, 11.V.2009; 1 ex., 同地, 26.VI.2022; 1 ex., 同地, 10.VII.2022; 1 ex., 同地, 11.VIII.2022; 2 exs., 同地, 14.VII.2022; 1 ex., 同地, 15.VII.2022; 2 exs., 同地, 16.VII.2022; 5 exs., 同地, 17.VII.2022; 4 exs., 同地, 20.VII.2022; 2 exs., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 12.VIII.2022; 2 exs., 同地, 16.VIII.2022; 2 exs., 同地, 17.VIII.2022; 3 exs., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 3 exs., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.VIII.2022; 3 exs., 同地, 31.VIII.2022; 2 exs., 同地, 3.IX.2022; 2 exs., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 2 exs., 同地, 8.IX.2022; 2 exs., 同地, 9.IX.2022; 2 exs., 同地, 10.IX.2022; 2 exs., 同地, 11.IX.2022; 2 exs., 同地, 12.IX.2022; 2 exs., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 26.IX.2022; 1 ex.,

同地, 27.IX.2022; 2 exs., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 2 exs., 同地, 30. IX. 2022; 2 exs., 同地, 2.X.2022; 4 exs., 同地, 8.X.2022; 1 ex., 同地, 22.IV.2023; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 26. IV.2023; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 1 ex., 同地, 8.V.2023; 1 ex., 同地, 11.V.2023; 2 exs., 同地, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 13.V.2023; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 1 ex., 同地, 19.V.2023; 1 ex., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 22.V.2023; 2 exs., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2022; 2 exs., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 3.VI. 2023; 2 exs., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VII.2023; 2 exs., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 10.VII.2023; 3 exs., 同地, 11.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 2 exs., 同地, 14.VII.2023; 2 exs., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.VII.2023; 3 exs., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 22.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 28.VII.2023; 1 ex., 同地, 31.VII. 2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.VIII.2023; 2 exs., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 8.VIII.2023; 2 exs., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.VIII.2023; 2 exs., 同地, 13.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 1 ex., 同地, 31.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX. 2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 29. IX .2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 9.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 27.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 1 ex., 同地, 22.X.2023.

118.カバイロトガリメイガと同様の採集記録である。

* 152. ナガハマツトガ *Platytes ornatella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 3 exs., 同地, 8.IX.2023; 2 exs., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 8 exs., 同地, 13.IX.2023; 3 exs., 同地, 14.IX.2023; 5 exs., 同地, 15.IX.2023; 5 exs., 同地, 16.IX.2023; 3 exs., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 2 exs., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 2 exs., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023.

153. ツトガ *Ancylolomia japonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.VII.2008; 1 ex., 同地, 8.X.2008; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 1.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 9.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.VI. 2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023.

オオメイガ亜科 *Schoenobiinae*

* 154. シロオオメイガ *Scirpophaga excerptalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.VII.2023. 神奈川県初記録。飛び古した個体である。

ミズメイガ亜科 *Acentropinae*

155. ヒメマダラミズメイガ *Elophila turbata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.V.2009; 1 ex., 同地, 29.VII.2022; 1 ex., 同地, 7.VIII.2022; 1 ex., 同地, 22.IX.2023. アオウキクサが生じている高砂緑地にある松頼庵の池で発生したもののか。

* 156. キオビミズメイガ *Potamomusa midas* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.IX.2023. 神奈川県初記録。「鱗翅類」

に、幼虫は比較的流速が速く流量もある中流域の河川内の岩や岩石上に発育するセンタイ類の下に絹糸で粗く綴って固着性の巣を作り云々とある。そのような環境は採集地の近くにはない。

シダメイガ亜科 Musotiminae

157. カニクサシダメイガ *Neomusotima fuscolinealis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.X.2008; 1 ex., 同地, 16.X.2008.

モンメイガ亜科 Cybalomiinae

158. フタオビモンメイガ *Trichophysetis cretacea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.IX.2009; 1 ex., 同地, 29.IX.2009; 1 ex., 同地, 28.VII.2022.

159. トビマダラモンメイガ *Trichophysetis rufoterminalis* 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VII.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023.

ハイマダラノメイガ亜科 Glaphyriinae

160. ハイマダラノメイガ *Hellula undalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.IX.2009; 1 ex., 同地, 26.IX.2009; 1 ex., 東海岸南1丁目(海岸), 29.IX.2019; 1 ex., 同地, 27.VII.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 13.VIII.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 23.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 2 exs., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023.

ノメイガ亜科 Pyraustinae ノメイガ族 Pyraustini

* 161. セスジノメイガ *Torulisquama evenoralis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.V.2022.

* 162. ホシオビホソノメイガ *Nomis albopedalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.V.2009.

* 163. (仮称)シナチクノメイガ *Eumorphobotys eumorphalis* 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 10.VIII.2022; 4 exs., 同地, 17.VIII.2023; 2 exs., 同地, 19.VIII.2022; 2 exs., 同地, 21.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 2 exs., 同地, 27.VIII.2022; 1 ex., 同地, 31.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022. 1 ex., 同地, 14.V.2023; 1 ex., 同地, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 30.VIII.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023. 大型のノメイガである。初めて採集同定をした時に図鑑上にないので困惑した記憶がある。間野(2022)によると2018年に愛知県で初めて確認された中国よりの移入種である。長田(2023)も静岡県の記録を報告している。茅ヶ崎市では5月から9月末まで確認している。越冬態は卵または蛹であろうか。中国から輸入された竹箒等に付着して運ばれて来たのだろう。ムネアカハラビロカマキリと同様の経過かも知れない。標準和名としてシナチクノメイガが定着しているが、ラーメンの具材メンマを思い浮かべるのは筆者だけだろうか？

* 164. ハマゴウノメイガ *Aglaops albipennis* 2 exs., 汐見台, 2.VII.2020; 6 exs., 東海岸南1丁目(海岸), 23.VI.2021; 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VII.2023. 馬谷原・緒方(2019)により飼育羽化し生息が確認された。幼虫はハマゴウの花穂を食草にしているので、茅ヶ崎では6月の開花に合わせて発生している。東海岸北1丁目は海岸より1kmほど離れていて、ハマゴウの自生地ではない。*印は成虫を採集して確認の意である。

165. ウスオビキノメイガ *Paratalanta jessica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VI.2022; 1 ex., 同地, 14.VII.2023.

166. ベニフキノメイガ *Pyrausta panopealis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 20.V.2023.

*167. アメリカピンクノメイガ *Pyrausta inornatalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 22.X.2022; 1 ex., 同地, 9.XI.2022; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 1 ex., 同地, 22.X.2023; 1 ex., 同地, 6.XI.2023. 宮野(2020)により岐阜県で初めて採集報告された小型のノメイガである。採集日は2.VII.2019。U.S.A.南部に分布しシソ科サルビア属が食草とのこと、花食いの移入種である。二回目の報告は前田・吉安(2020)によるもので滋賀県からの報告であった。その後、神奈川県では田中ほか(2021)による累代飼育の報告もあり、広く各地へ分布を広げている。花壇材料のブルーサルビア、ガーデニング材料のメドウセージ等が食草として確認されている。

168. フキノメイガ *Ostrinia zaguliaevi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VI.2023.

*169. ゴボウノメイガ *Ostrinia zealis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.IX.2023. 神奈川県初記録。

ヒゲナガノメイガ族 *Spilomelini*

*170. モンキシロノメイガ *Cirrhochrista brizoalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2023.

171. エグリノメイガ *Diplopseustis perieresalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.V.2009.

172. ミツテンノメイガ *Mabra charonialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.VI.2008; 1 ex., 同地, 15.V.2009; 1 ex., 同地, 27.V.2009; 1 ex., 同地, 15.VIII.2009; 1 ex., 同地, 13.IX.2009; 1 ex., 同地, 31.VII.2022; 1 ex., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 2 exs., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022. 食草は枯れ葉である。

173. シロオビノメイガ *Spoladea recurvalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.X.2008; 1 ex., 同地, 11.XI.2008; 1 ex., 同地, 12.VI.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 10.X.2022; 1 ex., 同地, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 14.X.2022; 1 ex., 同地, 29.X.2022; 1 ex., 同地, 12.VII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 2 exs., 同地, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 2 exs., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 3 exs., 同地, 12.IX.2023; 2 exs., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 2 exs., 同地, 21.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 2 exs., 同地, 28.IX.2023; 2 exs., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 2 exs., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 27.X.2023.

174. アヤナミノメイガ *Eurrhparodes accessalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 1 ex., 同地, 4.VIII.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023.

175. ヨスジノメイガ *Pagyda quadrilineata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.IX.2009; 1 ex., 同地, 24.IX.2022.

176. コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 5.XI.2023.
177. ハネナガコブノメイガ *Cnaphalocrocis pilosa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023.
178. シロモンノメイガ *Bocchoris inspersalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 8.X.2022; 1 ex., 同地, 27.VI.2023.
- * 179. カクモンノメイガ *Rehimena surusalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.VIII.2009; 1 ex., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.VI.2023.
180. シロテンキノメイガ *Nacoleia commixta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.VII.2009.
- * 181. クロフキノメイガ *Nacoleia sibirialis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VI.2023.
- * 182. ナイトウノメイガ *Duponchelia naitoi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.VII.2022; 2 exs., 同地, 8.VII.2022; 1 ex., 同地, 9.VII.2022; 2 exs., 同地, 13.VII.2022; 1 ex., 同地, 15.VII.2022; 1 ex., 同地, 20.VII.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 8.VIII.2022; 2 exs., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 16.VIII.2022; 4 exs., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 20.VII.2022; 3 exs., 同地, 21.VIII.2022; 6 exs., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VIII.2022; 2 exs., 同地, 24.VIII.2022; 3 exs., 同地, 25.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 4 exs., 同地, 28.VIII.2022; 3 exs., 同地, 29.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.VII.2022; 3 exs., 同地, 31.VIII.2022; 3 exs., 同地, 1.IX.2022; 2 exs., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 5 exs., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 2 exs., 同地, 13.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.IX.2022; 4 exs., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 3 exs., 同地, 28.VI.2023; 1 ex., 同地, 29.VI.2023; 2 exs., 同地, 30.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 2 exs., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 8.VII.2023; 3 exs., 同地, 11.VII.2023; 2 exs., 同地, 13.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 3 exs., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 24.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 7.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 2 exs., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023. 神奈川県初記録。極小型のノメイガである。記録がないことが不思議な位採集された。食草は枯れ葉ではないだろうか。
- * 183. タイワンウスキノメイガ *Botyodes diniasalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2023.
184. ワタノメイガ *Haritalodes derogatus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.V.2023.
185. モモノゴマダラノメイガ *Conogethes punctiferalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.IV.2023.
186. ツチイロノメイガ *Syllepte invalidalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VI.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023.
187. マエアカスカシノメイガ *Palpita nigropunctalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2008; 2 exs., 同地, 8.X.2008; 1 ex., 同地, 25.X.2008; 1 ex., 同地, 22.IV.2009; 1 ex., 同地, 11.V.2009; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.X.2022; 1 ex., 同地, 14.X.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 18.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 30.IV.2023; 2 exs., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 3.V.2023; 3 exs., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 1 ex.,

同地, 6.V.2023; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 2 exs., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 2 exs., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 4.X.2023; 2 exs., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 21.X.2023; 1 ex., 同地, 7.XI.2023; 1 ex., 同地, 8.XI.2023. ナワシログミへの訪花は確認できなかった。北部では成虫越冬し、3月にキブシ、5月末はクリへの訪花を確認している。

* 188. ヒメシロノメイガ *Palpita inusitata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.X.2008.

189. ワタヘリクロノメイガ *Diaphania indica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.X.2008; 1 ex., 同地, 24.X.2008; 1 ex., 同地, 1.XI.2008; 1 ex., 同地, 2.IX.2009; 1 ex., 同地, 22.IX.2009; 1 ex., 汐見台, 27.VII.2020; 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 5.XI.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 29.X.2023; 1 ex., 同地, 31.X.2023; 2 exs., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 2 exs., 同地, 1.XI.2023.20:00,(ナワシログミ); 2 exs., 同地, 1.XI.2023.21:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 4 exs., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.18:30,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.21:30,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 8.XI.2023.17:00,(ナワシログミ).

190. ツゲノメイガ *Cydalima perspectalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 22.X.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 22.X.2023.

191. スカシノメイガ *Glyphodes pryeri* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.VII.2022.

192. チビスカシノメイガ *Glyphodes duplicalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 1 ex., 同地, 16.V.2023; 1 ex., 同地, 24.V.2023; 1 ex., 同地, 26.V.2023; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023.

* 193. シロマダラノメイガ *Glyphodes onycinalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.IV.2023; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 27.VI.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 1 ex., 同地, 2.XI.2023.20:00,(ナワシログミ).

194. ナカキノメイガ *Sameodes aptalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.VI.2023.

195. スカシトガリノメイガ *Cotachena pubescens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.V.2009; 1 ex., 同地, 7.VI.2009; 1 ex., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 31.VII.2022; 1 ex., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IV.2023; 1 ex., 同地, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 1 ex., 同地, 20.V.2023; 1 ex., 同地, 21.V.2023; 1 ex., 同地, 28.V.2023.

196. マメノメイガ *Maruca vitrata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.X.2008. 1 ex., 同地, 26.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 14.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 23.X.2022; 3 exs., 同地, 28.VIII.2023; 2 exs., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 3 exs., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 3 exs., 同地, 19.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 1 ex. 同地, 24.IX.2023; 2 exs., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 2 exs., 同地, 4.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 8.X.2023; 1 ex., 同地, 9.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 19.X.2023; 1 ex.,

同地, 26.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.21:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.22:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.20:00,(ナワシログミ); 2 exs., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 9.XI.2023.18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 13.XI.2023.

197. ワモンノメイガ *Nomophila noctuella* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.X.2008; 1 ex., 同地, 10.XI.2008; 1 ex., 同地, 11.XI.2009; 1 ex., 同地, 5.XI.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex. 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 20.X.2023.

198. シロテンウスグロノメイガ *Bradina atopalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.VII.2009; 1 ex., 同地, 29.VIII.2009; 1 ex., 同地, 16.VII.2023.

* 199. ヒメアカウスグロノメイガ *Bradina trigonalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.IX.2022.

200. クロオビクロノメイガ *Herpetogramma licarsisale* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2009; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 6.VIII.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023.

201. マエキノメイガ *Herpetogramma rude* 5 exs., 東海岸北1丁目, 8.X.2008.

202. モンキクロノメイガ *Herpetogramma luctuosale* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.V.2009; 1 ex., 同地, 30.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex. 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.V.2023.

203. キアヤヒメノメイガ *Diasemia accalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VIII.2009; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 3.IX.2023; 1 ex., 同地, 16.IX.2023.

204. クロモンキノメイガ *Udea testacea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.V.2009; 1 ex., 同地, 24.VI.2009; 1 ex., 同地, 4.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.X.2009; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 1 ex. 同地, 22.X.2022; 1 ex., 同地, 20.VI.2023; 1 ex. 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.VII.2023.

スズメガ科 *Sphingidae* スズメガ亜科 *Sphinginae*

* 205. サザナミスズメ *Dolbina tancrei* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.VIII.2010; 1 ex., 同地, 4.IX.2023. 食草はモクセイ科、都市部でもよく見られるとある。

ウチスズメ亜科 *Smerinthinae*

* 206. モモスズメ *Marumba gaschkewitschii* 1 ex., 中海岸2丁目, 13.VI.2008.

羽化して枝に止まっている個体を昼間採集した。口吻は著しく退化しているとある。

ハウジャク亜科 *Macroglossinae*

207. ホシヒメハウジャク *Neogreluca himachala* 1 ex., 新栄町地下道, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 3 exs., 東海岸北1丁目, 2.XI.2023.16:45-17:00,(ナワシログミ). 新栄町は繁華街で、17:00過ぎJR東海道線を潜る地下道の天井に静止していた個体を採集した。東海岸北1丁目の訪花個体と共に薄暮の行動であろう。

208. ホシハウジャク *Macroglossum pyrhosticta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 8.X.2008; 1 ex., 若松町, 2.XII.2008; 小池叡採集; 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 23.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.XI.2023.15:30-16:30,(ナワシログミ). ナワシログミへは昼から薄暮によく飛来した、記録のみの採集で、それ以外は灯火である。

209. キイロスズメ *Theretra nessus* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.VIII.2022.

210. セスジスズメ *Theretra oldenlandiae* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.VIII.2008; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.17:30,(ナワシログミ). 5月から10月に出現とある。11月1日、ナワシログミへの訪花を観察してこの遅い時期にと驚いた、新鮮な個体である。

211. コスズメ *Theretra japonica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.VIII.2008; 1 ex., 同地, 25.VII.2022; 1 ex., 同地, 30.VII.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2023; 1 ex., 同地, 7.IX.2023.

212. ビロードスズメ *Rhagastis mongoliana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.V.2023.

*213. ミスジビロードスズメ *Rhagastis trilineata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.VIII.2008. 県内の記録は食草がアジサイ属のわりに意外と少ない。広く栽培されている栽培品種での発生が少ないのだろうか。

カギバガ上科 Drepanoidea カギバガ科 Drepanidae トガリバガ亜科 Thyatirinae

*214. オオアヤトガリバ *Habrosyne fratena* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.IV.2023. 新鮮な個体である。

シャクガ上科 Geometroidea シャクガ科 Geometridae エダシャク亜科 Ennominae

215. ヒメマダラエダシャク *Abraxas niponibia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.IX.2009.

216. ユウマダラエダシャク *Abraxas miranda* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.V.2023.

217. マエキオエダシャク *Plesiomorpha flaviceps* 2 exs., 東海岸北1丁目, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023.

218. クロハグルマエダシャク *Synegia esther* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.IV.2009; 1 ex., 同地, 14.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.IV.2023; 2 exs., 同地, 30.IV.2023; 1 ex., 同地, 14.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023.

219. フタテンオエダシャク *Chiasmia defixaris* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.IX.2023.

220. ウスオエダシャク *Chiasmia hebesata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2023.

221. ツマジロエダシャク *Krananda latimarginaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.X.2008; 1 ex., 同地, 25.X.2008; 1 ex., 同地, 26.X.2008; 1 ex., 同地, 30.X.2008; 1 ex., 同地, 12.XI.2008; 1 ex., 同地, 18.III.2009; 1 ex., 同地, 25.X.2009; 1 ex., 同地, 26.X.2009; 1 ex., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.X.2022; 1 ex., 同地, 3.V.2023; 1 ex., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 22.V.2023; 1 ex., 同地, 26.V.2023; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 3 exs., 同地, 1.VI.2023. 18.III.2009の記録は早い羽化といえる。1.VI.2023以降は飛来があったが採集をしなかった。

222. ウメエダシャク *Cystidia couaggaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.VI.2008; 2 exs., 同地, 11.VI.2009.

昼飛性。安定して庭園樹の梅で発生している、梅が渡来する前の自然食草は何だったのだろうか。

223. シロジマエダシャク *Euryobeidia languidata* 2 exs., 東海岸北1丁目, 31.V.2023; 2 exs., 同地, 11.VI.2009; 1 ex., 同地, 5.VI.2023.

224. ナカウスエダシャク *Alcis angulifera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.V.2009; 1 ex., 同地, 12.V.2009; 2 exs., 同地, 20.V.2023.

225. ヨモギエダシャク *Ascotis selenaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VII.2008; 1 ex., 同地, 10.IX.2008; 1 ex., 同地, 29.VI.2009; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 15.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.VI.2023.

226. マエキトビエダシヤク *Nothomiza formosa* 1 ex., 東海岸1丁目, 31.X.2008. 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 1 ex., 同地, 31.V.2023; 1 ex., 同地, 20.VI.2022; 1 ex., 同地, 6.VII.2023.

227. エグリツマエダシヤク *Odontopera arida* 1 ex., 東海岸1丁目, 12.V.2009; 1 ex., 同地, 17.X.2009; 1 ex., 同地, 17.IV.2023; 1 ex., 同地, 19.IV.2023.

228. ヒメウコンエダシヤク *Corymica arnearia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.VIII.2009; 1 ex., 同地, 1.IX.2009; 1 ex., 同地, 14.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009.

229. ウスキツバメエダシヤク *Ourapteryx nivea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 2.XI.2023. 16:45-17:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.17:00-18:30,(ナワシログミ).

230. シロツバメエダシヤク *Ourapteryx maculicaudaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008.

アオシヤク亜科 Geometrinae

231. クスアオシヤク *Pelagodes subquadraria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.X.2008; 1 ex., 同地, 19.IX.2009; 1 ex., 同地, 30.IX.2009; 1 ex., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 19.VIII.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.X.2022; 1 ex., 同地, 2.XI.2022; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 2 exs., 同地, 22.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023.

* 232. ウスキヒメアオシヤク *Jodis urosticta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.IX.2023.

* 233. ナミスジコアオシヤク *Idioclora ussuriaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.X.2022.

234. ヨツモンマエジロアオシヤク *Comibaena procumbaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.IX.2009; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023.

ヒメシヤク亜科 Sterrhinae

235. フタナミトビヒメシヤク *Pylargosceles steganioides* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.IV.2009; 1 ex., 同地, 23.IV.2021; 1 ex., 同地, 10.IV.2022; 1 ex., 同地, 2.V.2022; 1 ex., 同地, 11.VII.2022; 1 ex., 同地, 21.VII.2022; 1 ex., 同地, 18.VIII.2022.

236. ベニスジヒメシヤク *Timandra recompta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.VII.2022; 1 ex., 同地, 18.X.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2023.

237. シロモンウスチャヒメシヤク *Perixara absconditaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.VII.2022.

238. クロモンウスチャヒメシヤク *Organopoda carnearia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.VII.2022.

* 239. クロスジオオシロヒメシヤク *Problepsis diazoma* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.IX.2022.

240. ウンモンオオシロヒメシヤク *Somatina indicataria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.VII.2022.

* 241. マエキヒメシヤク *Scopula nigropunctata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 24.VII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023.

* 242. チビシロヒメシヤク *Scopula kawabei* 2 exs., 東海岸北1丁目, 20.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 8.X.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.XI.2022; 1 ex., 同地, 6.V.2023; 1 ex., 同地, 7.V.2023; 1 ex., 同地,

18.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 17.VIII.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 2 exs., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 30.VIII.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023.

* 243. ウスキクロテンヒメシャク *Scopula ignobilis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.VI.2009; 4 exs., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 24.IX.2009; 1 ex., 同地, 20.X.2021; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.VIII.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.X.2022.

ナミシャク亜科 *Larentiinae*

* 244. アトスジグロナミシャク *Epilobophora obscuraria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.V.2023.

245. ウスミドリナミシャク *Episteira nigrilinearia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.VII.2008; 1 ex., 同地, 17.IX.2008; 1 ex., 同地, 24.IX.2008; 1 ex., 同地, 1.X.2008; 1 ex., 同地, 8.X.2008; 2 exs., 同地, 9.X.2008; 1 ex., 同地, 25.X.2008; 1 ex., 同地, 5.VII.2009; 1 ex., 同地, 17.VII.2022; 3 exs., 同地, 1.VIII.2022; 1 ex., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2022; 2 exs., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 18.IX.2022; 3 exs., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IX.2022; 2 exs., 同地, 4.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 10.VII.2022; 2 exs., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 2 exs., 同地, 24.IX.2023; 2 exs., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023. 食草のイヌマキは庭園樹として植栽されている。5月から11月まで記録できたが全数採集はしていない。

246. フトジマナミシャク *Xanthorhoe saturate* 2 exs., 東海岸北1丁目, 22.X.2008; 1 ex., 同地, 2.XI.2008; 2 exs., 同地, 7.XI.2008; 1 ex., 同地, 29.XI.2008; 1 ex., 同地, 26.IX.2009; 1 ex., 同地, 21.IV.2023; 1 ex., 同地, 12.V.2023; 1 ex., 同地, 19.V.2023; 1 ex., 同地, 24.V.2023; 2 exs., 同地, 31.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 4.VII.2023.

247. トビスジヒメナミシャク *Orthonama obstipata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.IV.2023.

248. ホソスジナミシャク *Lobogonodes complicate* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.VIII.2022.

* 249. ナナスジナミシャク *Venusia phasma* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.IX.2022.

* 250. ウスアカチビナミシャク *Eupithecia rufescens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VII.2009.

* 251. ハラキカバナミシャク *Eupithecia subtacincta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2009.

食草はセンニンソウの蕾とある。

252. トシマカバナミシャク *Eupithecia tenuisquama* 1 ex., 東海岸北1丁目, 31.X.2023; 1 ex., 同地, 3.XI.2023. 20:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 9.XI.2023.18:00,(ナワシログミ).

253. ホソバチビナミシャク *Spiralisigna subpumilata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 23.VIII.2022; 1 ex., 同地, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 8.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023.

* 254. ウスムラサキチビナミシャク *Gymnoscelis deleta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VII.2009.

神奈川県初記録。薄暮、玄関灯に飛来した新鮮な個体である。後翅外縁部の淡色紋で同定した。近畿地方以南に分布し個体数は少ないとある。食草はサルトリイバラ科とあるが付近にはない。ルリタテハのようにユリ科ホ

トトギスも食するのであれば、植栽を確認している。

255. クロスジアオナミシャク *Chloroclystis v-ata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.XI.2021.

256. ソトシロオピナミシャク *Pasiphila excisa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.V.2023.

ヤガ上科 Noctuoidea ドクガ科 Lymantriidae

257. ヒメシロモンドクガ *Orgyia thyellina* 1 ex., 中海岸2丁目, 24.XI.2008.

* 258. ウチジロマイマイ *Parocneria furva* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 9.VI.2023.

259. マイマイガ *Lymantria dispar* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.VII.2008. 1 ex., 同地, 27.VI.2023.

260. ゴマフリドクガ *Somena pulverea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.IV.2008; 1 ex., 同地, 5.VII.2021; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 2 exs., 同地, 9.VII.2023.

261. チャドクガ *Arna pseudoconspersa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.X.2008; 1 ex., 同地, 17.X.2008; 1 ex., 同地, 20.X.2008; 1 ex., 同地, 28.X.2008; 1 ex., 同地, 1.XI.2008; 1 ex., 同地, 31.X.2023.

ヒトリガ科 Arctiidae コケガ亜科 Lithosiinae

* 262. ムジホソバ *Eilema deplena* 2 exs., 東海岸北1丁目, 3.VI.2023.

* 263. ヤネホソバ *Eilema fuscodorsalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.V.2023; 1 ex., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 29.VIII.2023.

* 264. クロスジチビコケガ *Stictane rectilinea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 7.IX.2022; 2 exs., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2023; 1 ex., 同地, 13.IX.2023.

265. シロオビクロコケガ *Siccia minuta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VII.2022; 1 ex., 同地, 30.VII.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.V.2023; 1 ex., 同地, 30.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 2 exs., 同地, 13.VII.2023; 4 exs., 同地, 15.VII.2023; 20 exs., 同地, 16.VII.2023; 12 exs., 同地, 17.VII.2023; 3 exs., 同地, 18.VII.2023; 7 exs., 同地, 20.VII.2023; 12 exs., 同地, 21.VII.2023; 4 exs., 同地, 22.VII.2023; 5 exs., 同地, 25.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 27.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023.

266. ハガタベニコケガ *Barsine aberrans* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.V.2023.

267. ハガタキコケガ *Miltochrista calamina* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2009; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 31.VIII.2022.

268. キハラゴマダラヒトリ *Spilosoma lubricipedum* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023.

* 269. キバネモンヒトリ *Spilarctia lutea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.IX.2009.

コブガ科 Nolidae コブガ亜科 Nolinae

* 270. シタジロコブガ *Nola infralba* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.X.2022; 1 ex., 同地, 30.X.2022.

* 271. ヨシノコブガ *Manoba melancholica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.V.2023; 1 ex., 同地, 25.V.2023.

リングガ亜科 Chloephorinae

272. ネスジキノカワガ *Garella ruficirra* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.V.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 31.X.2023.

ワタリング亜科 Eariadinae

*273. アカマエアオリンガ *Earias pudicana* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023. 当種と次次種のワタリングを採集した際、次種ベニモンアオリンガの標本を全て調べ、混同がないかを確認した。

274. ベニモンアオリンガ *Earias roseifera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.VI.2009; 1 ex., 同地, 13.VI.2009; 1 ex., 同地, 15.VI.2009; 1 ex., 同地, 3.IX.2009; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 8.X.2023; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 14.IV.2023; 1 ex., 同地, 30.IV.2023; 2 exs., 同地, 2.V.2023; 2 exs., 同地, 3.V.2023; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 2 exs., 同地, 4.VI.2023; 3 exs., 同地, 5.VI.2023; 3 exs., 同地, 7.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 4 exs., 同地, 9.VI.2023; 2 exs., 同地, 20.VI.2023; 3 exs., 同地, 21.VI.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 2 exs., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 28.VI.2023; 2 exs., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 15.VII.2023; 2 exs., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 20.VII.2023; 1 ex., 同地, 24.VII.2023; 2 exs., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 2 exs., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 2 exs., 同地, 8.X.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 31.X.2023.

*275. ワタリング *Earias cupreoviridis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023. 神奈川県初記録。綿栽培の衰退とともに姿を消したとある。富永(2020)により沖縄県沖縄島でホンバキンゴジカ(*Sida*属)から幼虫を採集飼育し、羽化(26.X.2010)が確認されている。茅ヶ崎市でも同属のキンゴジカ、アメリカキンゴジカが自生している。あるいは園芸的に綿の花実が鑑賞されているようで、それによる復活であろうか。

キノカワガ亜科 Bleninae

276. キノカワガ *Blenina senex* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.VII.2023.

リュウキュウキノカワガ亜科 Risobinae

277. リュウキュウキノカワガ *Risoba prominens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 10.VII.2023; 1 ex., 同地, 18.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VII.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.17:30-18:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 8.XI.2023.19:00,(ナワシログミ).

ヤガ科 Noctuidae テンクロアツバ亜科 Rivulinae

278. テンクロアツバ *Rivula sericealis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.IV.2023; 1 ex., 同地, 3.VI.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023.

*279. オオテンクロアツバ *Rivula sugii* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.V.2023. 当標本の前翅長12.6mm、開長25.2mm、前種 21.IV.2023採集標本は同じく9.3mm、19.4mmである。大きさを判断した、有意の差であろう。

280. タケアツバ *Rivula aequalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 26.IV.2023.

* 281. フタテンアツバ *Rivula inconspicua* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.V.2022; 1 ex., 同地, 14.VII.2022.

ムラサキアツバ亜科 *Boletobiinae*

* 282. マエテンアツバ *Rhesala imparata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.VII.2023.

ミジンアツバ亜科 *Hypenodinae*

* 283. クロスジヒメアツバ *Schrankia costaestrigalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 25.X.2022.

ホソコヤガ亜科 *Araeopteroninae*

284. アヤホソコヤガ *Araeopteron amoenum* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.XI.2008.

285. クロモンホソコヤガ *Araeopteron kurokoi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.IX.2009.

ベニコヤガ亜科 *Eubleminae*

286. クロハナコヤガ *Aventiola pusilla* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VI.2023.

287. シマフコヤガ *Corgatha nitens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.IX.2022.

288. シロスジシマコヤガ *Corgatha dictaria* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 19.VI.2023; 1 ex., 同地, 14.VII.2023; 1 ex., 同地, 31.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023.

アツバ亜科 *Hypeninae*

289. クロキシタアツバ *Hypena amica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.IX.2009; 1 ex., 同地, 18.IX.2009.

290. ナミテンアツバ *Hypena strigata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.V.2023.

291. フタコブスジアツバ *Hypena sinuosa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 5.XI.2023.

* 292. オオトビモンアツバ *Hypena occata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.XI.2023.

293. トビモンアツバ *Hypena indicatalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.X.2023.

294. アオアツバ *Hypena subcyanea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.X.2008; 1 ex., 同地, 16.XI.2008; 1 ex., 同地, 10.XII.2008; 1 ex., 同地, 21.IX.2009; 1 ex., 同地, 29.IX.2009; 1 ex., 同地, 16.XI.2008; 1 ex., 同地, 10.XII.2008; 1 ex., 同地, 21.IX.2009; 1 ex., 同地, 29.IX.2009; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 24.X.2023; 1 ex., 同地, 27.X.2023; 1 ex., 同地, 5.XI.2023.

* 295. オスグロホソアツバ *Hypena lignalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.IX.2023.

ツマキリアツバ亜科 *Pangraptinae*

* 296. リンゴツマキリアツバ *Pangraptia obscurata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2023.

クルマアツバ亜科 *Hermiiniinae*

297. ソトウスグロアツバ *Hydrillodes lentalis* 2 exs., 東海岸北1丁目, 6.XI.2008; 1 ex., 同地, 12.V.2009; 1 ex., 同地, 10.VII.2022; 1 ex., 同地, 23.VII.2022; 1 ex., 同地, 9.VIII.2022; 1 ex., 同地, 14.VIII.2022; 1 ex., 同地, 19.VIII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 13.IX.2022; 2 exs., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 2 exs., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 30.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 4.X.2022; 1 ex., 同

地, 15.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 31.X.2022; 1 ex., 同地, 20.IV.2023; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 25.IV.2023; 1 ex., 同地, 29.IV.2023; 1 ex., 同地, 17.V.2023; 1 ex., 同地, 26.V.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 26.VI.2023; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 6.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 28.X.2023; 2 exs., 同地, 1.XI.2023. 19:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.18:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ).

*298. アカマエアツバ *Simplicia rectalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.V.2009. 生息域が河川敷や沼沢地の北方系の蛾ではないかと言われている。神奈川県でも近年の記録はない。

299. オオアカマエアツバ *Simplicia niphona* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 13.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.VI.2023; 1 ex., 同地, 20.VIII.2023; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.

*300. ニセアカマエアツバ *Simplicia xanthoma* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2023.

301. オオシラミアツバ *Hipoepa fractalis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.X.2022.

*302. ウスナミアツバ *Sinarella itoi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.IV.2023. 神奈川県初記録。

エグリバ亜科 Calpinae エグリバ族 Calpini

303. ヒメエグリバ *Oraesia emarginata* 2 exs., 東海岸北1丁目, 28.X.2008; 1 ex., 同地, 23.V.2009; 1 ex., 同地, 27.VIII.2009; 1 ex., 同地, 27.IX.2009; 1 ex., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 28.VII.2022; 1 ex., 同地, 6.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2022; 2 exs., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 8.X.2022; 2 exs., 同地, 23.X.2022; 1 ex., 同地, 4.VII.2023; 1 ex., 同地, 13.VII.2022; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.IX.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 31.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023; 2 exs., 同地, 2.XI.2023; 1 ex., 同地, 3.XI.2023.

304. アカエグリバ *Oraesia excavate* 1 ex., 東海岸北1丁目, 3.VIII.2009; 1 ex., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 27.VIII.2009; 1 ex., 同地, 2.IX.2009; 1 ex., 同地, 29.VII.2022; 1 ex., 同地, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 7.VIII.2022; 1 ex., 同地, 18.VIII.2022; 1 ex., 同地, 30.VIII.2022; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 3.XI.2022. 2023年の記録がないのは、採集を行わなかっただけで他意は無い。ヒメエグリバなみの飛来を確認している。

305. アケビコノハ *Eudocima tyrannus* 1 ex., 若松町, 20.IX.2009; 小池叡採集; 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VIII.2023. 大型ヤガの飛来は嬉しい物で、2個体とも新鮮である。

キリバ族 Scoliopterygini

306. ウスヅマクチバ *Dinumma deponens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.IV.2023.

シタバガ亜科 Catocalinae クビグロクチバ族 Lygephilini

307. モクメクチバ *Perinaenia accipiter* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.VIII.2022; 1 ex., 同地, 19.IV.2023.

2022年採集個体は、前日23:00過ぎに消灯した洗面所のガラス窓の室内側に翌朝止まっていた。

クチバ族 Ophiusini

308. アシプトクチバ *Parallelia stuposa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 17.VII.2023; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.XI.2023.

309. ホソアシプトクチバ *Parallelia arctotaenia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023,(糖); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ).

310. ナカグロクチバ *Grammodes geometrica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 9.X.2023.

311. オオウンモンクチバ *Mocis undata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.IX.2020; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023.

シラフクチバ族 Sypnini

312. ハガタクチバ *Daddala lucilla* 1 ex., 東海岸北1丁目, 5.XI.2022,(糖).

フサヤガ亜科 Euteliinae

313. コフサヤガ *Eutelia adulatricoides* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.IV.2023. 越冬個体であろう。

キンウワバ亜科 Plusiinae マダラウワバ族 Abrostolini

314. ユミガタマダラウワバ *Abrostola abrostolina* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.IX.2022; 1 ex., 同地, 26.IV.2023.

イチジクキンウワバ族 Argyrogrammini

315. キクキンウワバ *Thysanoplusia intermixta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.XII.2008; 1 ex., 同地, 26.X.2022; 1 ex., 同地, 2.XI.2023.17:30-19:00,(ナシログミ); 2 exs., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.19:00,(ナシログミ).

316. イラクサキンウワバ *Trichoplusia ni* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.VIII.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 2 exs., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 1.X.2022; 1 ex., 同地, 27.XII.2022; 1 ex., 同地, 1.VI.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.VII.2022; 1 ex., 同地, 4.VIII.2023; 2 exs., 同地, 9.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 1 ex., 同地, 24.VIII.2023; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 12.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.IX.2023; 1 ex., 同地, 22.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023.1 ex., 同地, 4.X.2023; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023. 1 ex., 同地, 19.X.2023; 2 exs., 同地, 20.X.2023; 1 ex., 同地, 3.XI.2023; 6 exs., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.21:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.18:30,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 22.XI.2023.

317. エゾギクキンウワバ *Ctenoplusia albostriata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.X.2008; 1 ex., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 28.X.2009; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2022; 1 ex., 同地, 27.X.2022; 1 ex., 同地, 22.VI.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 2 exs., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 5.X.2023; 3 exs., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 3 exs., 同地, 9.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2022; 1 ex., 同地, 13.X.2023; 2 exs., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地,

19.X.2023; 2 exs., 同地, 21.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 3 exs., 同地, 1.XI.2023.17:30-19:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.21:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.22:00,(ナシログ'ミ); 4 exs., 同地, 2.XI.2023.17:30-18:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.22:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 3.XI.2023.19:00,(ナシログ'ミ); 2 exs., 同地, 3.XI.2023.

21:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.18:30,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 7.XI.2023.17:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 7.XI.2023.17:30-18:30,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 8.XI.2023.16:45-19:00,(ナシログ'ミ); 1 ex. 同地, 8.XI.2023.19:30,(ナシログ'ミ).

318. イチジクキンウワバ *Chrysodeixis eriosoma* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.X.2008; 1 ex., 同地, 29.X.2008; 1 ex., 同地, 13.XI.2008; 1 ex., 同地, 3.XII.2008; 2 exs., 同地, 27.X.2009; 1 ex., 東海岸南1丁目(海岸), 29.IX.2019; 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.VII.2022; 1 ex., 同地, 24.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.X.2022; 1 ex., 同地, 19.IV.2023; 1 ex., 同地, 29.IV.2023; 1 ex., 同地, 30.IV.2023; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 24.VI.2023; 1 ex., 同地, 13.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023; 1 ex., 同地, 31.X.2023.(ナシログ'ミ); 2 exs., 同地, 1.XI.2023.17:30-19:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.21:00,(ナシログ'ミ); 3 exs., 同地, 4.XI.2023.18:30,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 5.XI.2023; 1 ex., 同地, 7.XI.2023.18:30,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 16.XI.2023; 1 ex., 同地, 19.XI.2023; 1 ex., 同地, 23.XI.2023.

319. ウリキンウワバ *Anadevidia peponis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.X.2008; 1 ex., 同地, 7.XI.2008; 1 ex., 同地, 31.X.2023.(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.21:00,(ナシログ'ミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.19:00,(ナシログ'ミ).

イネキンウワバ族 *Plusiini*

*320. キクギンウワバ *Macdunnoughia confusa* 2 exs., 東海岸北1丁目, 3.XI.2023.18:00,(ナシログ'ミ).

321. セアカキンウワバ *Erythroplusia pyropia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 8.XI.2023.18:45-19:00,(ナシログ'ミ).

*322. ワイギンモンウワバ *Sclerogenia jessica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.IV.2023.

スジコヤガ亜科 *Eustrotiinae*

323. ヒメネジロコヤガ *Maliattha signifera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.V.2009; 1 ex., 同地, 12.V.2009; 1 ex., 同地, 12.VII.2022; 2 exs., 同地, 18.VII.2022; 1 ex., 同地, 19.VII.2022; 1 ex., 同地, 26.VIII.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 22.IX.2022; 1 ex., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 4.VI.2023; 2 exs., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 21.VII.2023; 1 ex., 同地, 31.VII.2023; 1 ex., 同地, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 2 exs., 同地, 9.IX.2023. 当地では最も普通のスジコヤガ亜科の種である。5月初旬から採集しているが、全数採集はしていない。

*324. ホシコヤガ *Ozarba punctigera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.VIII.2023.

アオイガ亜科 *Bagisarinae*

325. フタトガリアオイガ *Xanthodes transversa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.VII.2022; 1 ex., 同地, 2.VIII.2022; 1 ex., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 1 ex., 同地, 11.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 2 exs., 同地, 19.VIII.2022; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023.

*326. ヒメシロテンヤガ *Amyna axis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 30.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.X.2022; 1 ex., 同地,

23.X.2022; 1 ex., 同地, 17.VII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.IX.2023; 1 ex., 同地, 11.IX.2023; 2 exs., 同地, 18.IX.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 2 exs., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 6.XI.2023.18:00,(ナシログミ).

ナカジロシタバ亜科 Aediinae

327. ナカジロシタバ *Aedia leucomelas* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.V.2023.

ウスベリケンモン亜科 Pantheinae

328. フクラスズメ *Arcte coerulea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.XII.2009; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 19.XI.2022,(糖).

ケンモンヤガ亜科 Acronictinae

329. ナシケンモン *Acronicta rumicis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.VI.2009; 1 ex., 同地, 21.IX.2023.

330. シマケンモン *Craniophora fasciata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.VI.2009; 1 ex., 同地, 3.XI.2022; 1 ex., 同地, 7.XI.2022,(糖); 1 ex., 同地, 30.V.2023.

トラガ亜科 Agaristinae

331. トビイロトラガ *Sarbanissa subflava* 1 ex., 東海岸南2丁目, 4.VI.2008, 石井準子採集.

カラスヨトウ亜科 Amphipyrinae

332. オオシマカラスヨトウ *Amphipyra monolitha* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.X.2008.

333. カラスヨトウ *Amphipyra livida* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.XI.2008.

タバコガ亜科 Heliothinae

334. オオタバコガ *Helicoverpa armigera* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.IX.2009; 1 ex., 同地, 11.X.2009; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 3.XI.2022; 1 ex., 同地, 5.XI.2022; 1 ex., 同地, 22.VIII.2023; 1 ex., 同地, 27.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 1 ex., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 19.X.2023.

* 335. タバコガ *Helicoverpa assulta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 9.IX.2023.

シマヨトウ亜科 Leuconyctini

336. オオホシミヨトウ *Condica illecta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023.

* 337. マエテンヨトウ *Condica fuliginosa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.XI.2023; 1 ex., 同地, 16.XI.2023.

338. フタテンヒメヨトウ *Acosmetia biguttula* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.VII.2023.

ツマキリヨトウ亜科 Eriopinae

* 339. マダラツマキリヨトウ *Callopietria repleta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 12.X.2023; 1 ex., 同地, 27.X.2023,(糖).

* 340. キスジツマキリヨトウ *Callopietria japonibia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.IX.2022; 1 ex., 同地, 18.V.2023.

キノコヨトウ亜科 Bryophilinae

341. キノコヨトウ *Cryphia mitsuhashi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.IX.2009; 1 ex., 同地, 8.IX.2022; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 2 exs., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 26.VII.2023; 1 ex., 同地, 4.VIII.2023; 1 ex., 同地, 7.VIII.2023; 1 ex., 同地, 12.VIII.2023; 2 exs., 同地, 18.VIII.2023; 2 exs., 同地, 21.VIII.2023; 1 ex., 同地,

22.VIII.2023; 2 exs., 同地, 28.VIII.2023; 3 exs., 同地, 29.VIII.2023; 1 ex., 同地, 31.VIII.2023; 4 exs., 同地, 1.IX.2023; 2 exs., 同地, 2.IX.2023; 3 exs., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 2 exs., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 2 exs., 同地, 12.IX.2023; 3 exs., 同地, 15.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 2 exs., 同地, 19.IX.2023; 2 exs., 同地, 20.IX.2023; 1 ex., 同地, 21.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023.

*342. アオキノコヨトウ *Stenoloba assimilis* 1 ex., 同地, 18.X.2022; 1 ex., 同地, 25.X.2022.

キリガ亜科 Xyleninae スジキリヨトウ族 Prodeniini

343. ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008; 1 ex., 同地, 17.X.2008; 1 ex., 同地, 29.X.2008; 1 ex., 同地, 17.XI.2008; 1 ex., 同地, 4.IX.2009; 1 ex., 同地, 22.VIII.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 2 exs., 同地, 3.X.2023; 2 exs., 同地, 6.X.2022; 2 exs., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 3 exs., 同地, 18.X.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023; 1 ex., 同地, 28.X.2023; 2 exs., 同地, 29.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023; 1 ex., 同地, 5.XI.2023; 2 exs., 同地, 8.XI.2023.

*344. シロイチモジヨトウ *Spodoptera exigua* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.VIII.2023; 1 ex., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 3 exs., 同地, 16.IX.2023; 2 exs., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 18.IX.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023; 2 exs., 同地, 26.IX.2023; 1 ex., 同地, 27.IX.2023; 1 ex., 同地, 28.IX.2023; 3 exs., 同地, 29.IX.2023; 1 ex., 同地, 30.IX.2023; 2 exs., 同地, 3.X.2023; 1 ex., 同地, 4.X.2023; 1 ex., 同地, 7.X.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023; 2 exs., 同地, 19.X.2023; 1 ex., 同地, 29.X.2023. 産出量は少ないとあるが、そこそこの採集数であった。

345. スジキリヨトウ *Spodoptera depravata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 7.VII.2009; 1 ex., 同地, 20.IX.2009; 1 ex., 同地, 21.X.2020; 2 exs., 同地, 26.VII.2022; 1 ex., 同地, 29.VII.2022; 1 ex., 同地, 5.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.VIII.2022; 1 ex., 同地, 27.VIII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 9.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 2 exs., 同地, 21.IX.2022; 2 exs., 同地, 22.IX.2022; 1 ex., 同地, 26.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 28.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IV.2023; 1 ex., 同地, 26.IV.2023; 1 ex., 同地, 2.V.2023; 1 ex., 同地, 4.V.2023; 1 ex., 同地, 21.V.2023; 3 exs., 同地, 25.VI.2023; 2 exs., 同地, 27.VI.2023; 2 exs., 同地, 28.VI.2023; 2 exs., 同地, 29.VI.2023; 1 ex., 同地, 1.VII.2023; 1 ex., 同地, 2.VII.2023; 1 ex., 同地, 3.VII.2023; 2 exs., 同地, 5.VII.2023; 1 ex., 同地, 7.VII.2023; 1 ex., 同地, 9.VII.2023; 1 ex., 同地, 10.VII.2023; 1 ex., 同地, 16.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.X.2023; 1 ex., 同地, 19.VII.2023; 3 exs., 同地, 21.VII.2023; 1 ex., 同地, 1.VIII.2023; 2 exs., 同地, 2.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.VIII.2023; 2 exs., 同地, 8.VIII.2023; 1 ex., 同地, 10.VIII.2023; 2 exs., 同地, 14.VIII.2023; 4 exs., 同地, 15.VIII.2023; 1 ex., 同地, 16.VIII.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 25.VIII.2023; 2 exs., 同地, 28.VIII.2023; 1 ex., 同地, 31.VIII.2023; 2 exs., 同地, 1.IX.2023; 1 ex., 同地, 4.IX.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 9.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 2 exs., 同地, 11.IX.2023; 2 exs., 同地, 12.IX.2023; 2 exs., 同地, 16.IX.2023; 3 exs., 同地, 18.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023; 2 exs., 同地, 25.IX.2023; 1 ex., 同地, 27.IX.2023; 1 ex., 同地, 1.X.2023; 3 exs., 同地, 5.X.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 2 exs., 同地, 7.X.2023;

1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 12.X.2023; 2 exs., 同地, 13.X.2023; 2 exs., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 20.X.2023; 1 ex., 同地, 10.XI.2023.

ヤガ科の中では最多の飛来をみた種であり、4月から11月まで長い間見ることが出来た。スジキリヨトウ族のナワシログミへの訪花は確認できなかった。

フタホシヨトウ族 Caradrinini ウスイロヨトウ亜族 Athetisina

346. シロテンウスグロヨトウ *Athetis albisignata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 29.IX.2023.

347. ヒメサビスジヨトウ *Athetis stellata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.IX.2009; 1 ex., 同地, 17.IX.2009; 1 ex., 同地, 16.IX.2022; 1 ex., 同地, 12.X.2022; 1 ex., 同地, 29.IX.2023.

クロモクメヨトウ族 Dypterygiini

*348. ウスアオヨトウ *Polyphaenis subviridis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.VI.2023.

349. クロモクメヨトウ *Dypterygia caliginosa* 1 ex., 東海岸北1丁目, 27.VIII.2023.

350. シロスジアオヨトウ *Trachea atriplicis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 25.IX.2023.

コモクメヨトウ族 Actinotiini

351. コモクメヨトウ *Actinotia intermediate* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.VII.2023.,

アカガネヨトウ族 Phlogophorini

352. ホソバミドリヨトウ *Euplexidia angusta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 6.II.2008; 1 ex., 同地, 12.X.2022; 1 ex., 同地, 6.X.2023.

カドモンヨトウ族 Apameni カドモンヨトウ亜族 Apameina

353. ハジマヨトウ *Bambusiphila vulgaris* 1 ex., 東海岸北1丁目, 21.VII.2023.

テンオビヨトウ亜族 Sesamiina

354. イネヨトウ *Sesamia inferens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.IX.2022; 1 ex., 同地, 4.IX.2022; 1 ex., 同地, 16.IX.2022.

キリガ族 Xylenini キリガ亜族 Xylenina

355. ノコメトガリキリガ *Telorta divergens* 1 ex., 若松町, 18.XII.2008, 小池叡採集; 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.XI.2022. 晩秋から出現するキリガグループの中で唯一灯りに来た。北部丘陵では糖蜜に多種類の飛来を見たが、当地では採集出来なかった。

コスミア亜族 Cosmiina

356. ニレキリガ *Cosmia affinis* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.XI.2023.

ヨトウガ亜科 Hadeninae ヨトウガ族 Hadenini

357. ヨトウガ *Mamestra brassicae* 1 ex., 東海岸北1丁目, 22.V.2009; 1 ex., 同地, 25.V.2009; 1 ex., 同地, 24.VII.2009; 1 ex., 同地, 3.IX.2009; 1 ex., 同地, 11.IX.2009; 1 ex., 同地, 29.IX.2009; 1 ex., 同地, 11.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 17.IX.2022; 1 ex., 同地, 20.IX.2022; 3 exs., 同地, 21.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.IX.2022; 1 ex., 同地, 2.X.2022; 1 ex., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 10.X.2022; 1 ex., 同地, 28.IV.2023; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 1 ex., 同地, 6.V.2023; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 24.IX.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.20

23,(糖).

*358. フタスジヨトウ *Protomiselia bilinea* 1 ex., 東海岸北1丁目, 20.VI.2023; 1 ex., 同地, 23.VII.2023; 1 ex., 同地, 17.IX.2023; 1 ex., 同地, 19.IX.2023. インセクトフェアで蛾類学会の方に同定をしていただいた。ヤガ科としては特異な斑紋である

キヨトウ族 *Leucanini*

359. シロシタヨトウ *Sarcopolia illoba* 1 ex., 東海岸北1丁目, 15.V.2023;

360. スジシロキヨトウ *Mythimna striata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 17.X.2008; 1 ex., 同地, 29.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IV.2023; 1 ex., 同地, 6.X.2023; 1 ex., 同地, 9.X.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2022; 1 ex., 同地, 21.X.2023.

361. マメチャイロキヨトウ *Mythimna stolidia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008; 1 ex., 同地, 25.X.2009; 1 ex., 同地, 7.XI.2009; 1 ex., 同地, 13.XI.2009; 1 ex., 同地, 12.V.2009; 1 ex., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 20.X.2009; 1 ex., 同地, 2.VII.2022; 1 ex., 同地, 3.IX.2022; 1 ex., 同地, 14.IX.2022; 1 ex., 同地, 25.IX.2022; 1 ex., 同地, 27.IX.2022; 1 ex., 同地, 18.X.2022; 1 ex., 同地, 12.XI.2022; 1 ex., 同地, 1.V.2023; 1 ex., 同地, 5.V.2023; 1 ex., 同地, 8.VI.2023; 1 ex., 同地, 14.VIII.2023; 1 ex., 同地, 26.VIII.2023; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 1 ex., 同地, 10.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 2 exs., 同地, 18.X.2023; 12 exs., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナシログミ); 2 exs., 同地, 1.XI.2023.20:00,(ナシログミ); 3 exs., 同地, 2.XI.2023.17:30-18:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 2.XI.2023.20:00,(ナシログミ); 8 exs., 同地, 3.XI.2023.18:00,(ナシログミ); 3 exs., 同地, 3.XI.2023.19:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.19:30,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 5.XI.2023.20:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 6.XI.2023.18:30,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 7.XI.2023.18:30,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 8.XI.2023.19:00,(ナシログミ).

362. アワヨトウ *Mythimna separata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナシログミ); 1 ex., 同地, 5.XI.2023.

*363. マエジロアカフキヨトウ *Mythimna pallidicosta* 1 ex., 東海岸北1丁目, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023. 「標準」発行の頃は南方系のキヨトウと認識されていたが、北進東進を続け各地で採集、記録されていて、神奈川県では中島(2022)により三国山山頂直下(ブナ帯)で14.X.2020,2♂が採集されている。記録の多くがブナ帯や山地に限られているが、採集地の偏りによるものであろう。当地は海拔6m程の平地である。

364. クサシロキヨトウ *Mythimna loreyi* 1 ex., 東海岸北1丁目, 16.X.2008; 1 ex., 同地, 15.IX.2021; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 2 exs., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナシログミ).

ハマオモトヨトウ族 *Glottulini*

*365. ハマオモトヨトウ *Brithys crini* 1 ex., 東海岸北1丁目, 23.IX.2009; 1 ex., 同地, 5.IX.2022; 2 exs., 同地, 3.X.2022; 1 ex., 同地, 17.X.2022; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 8.IX.2023; 1 ex., 同地, 10.X.2023; 1 ex., 同地, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 18.X.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023. ハマオモトの名がつくようにハマオモトが食草であった。カラフル(頭部、前胸、第10腹節はオレンジ色、中胸から第9腹節までの前縁と後縁に顕著な白紋を装う)な幼虫はヒガンバナ科スイセン属、ヒガンバナ属の球根を含む全草を食し分布を広げていて、夜盗とは名ばかりで日中でも採餌中の姿を見る事がある。藤沢市桜ヶ岡の上田康之氏からの私信によれば、終齢幼虫は地表を動き回り地中に潜らず地面に置かれている物の下で蛹化したとある。

モンヤガ亜科 Noctuidae カブラヤガ族 Agrotini

366. ニセタマナヤガ *Peridroma saucia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 10.VII.2009; 1 ex., 同地, 17.VIII.2009; 1 ex., 同地, 28.IV.2023.

367. タマナヤガ *Agrotis ipsilon* 1 ex., 東海岸北1丁目, 19.VIII.2023; 1 ex., 同地, 3.X.2023.

368. カブラヤガ *Agrotis segetum* 1 ex., 東海岸北1丁目, 13.XI.2008; 1 ex., 同地, 27.IV.2009; 1 ex., 同地, 10.V.2009; 1 ex., 同地, 21.V.2009; 1 ex., 同地, 7.VIII.2022; 1 ex., 同地, 24.IX.2022; 2 exs., 同地, 25.XI.2023; 1 ex., 同地, 26.X.2023; 1 ex., 同地, 22.IV.2023; 1 ex., 同地, 5.VI.2023; 1 ex., 同地, 25.VI.2023; 1 ex., 同地, 18.VIII.2023; 1 ex., 同地, 6.IX.2023; 1 ex., 同地, 29.IX.2023; 2 exs., 同地, 2.X.2023; 1 ex., 同地, 15.X.2023; 1 ex., 同地, 2.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 4.XI.2023.20:30,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 6.XI.2023.20:30,(ナワシログミ).

モンヤガ族 Noctuini

*369. クロクモヤガ *Hermonassa cecilia* 1 ex., 東海岸北1丁目, 28.X.2022; 1 ex., 同地, 31.X.2023,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 1.XI.2023.19:00,(ナワシログミ); 1 ex., 同地, 4.XI.2023.18:30,(ナワシログミ).

370. コウスチャヤガ *Diarsia deparca* 1 ex., 東海岸北1丁目, 24.X.2022; 1 ex., 同地, 23.IV.2023; 1 ex., 同地, 15.V.2023; 1 ex., 同地, 25.IX.2023.

371. オオバコヤガ *Diarsia canescens* 1 ex., 東海岸北1丁目, 11.X.2023; 1 ex., 同地, 14.X.2023; 1 ex., 同地, 16.X.2023; 1 ex., 同地, 25.X.2023; 1 ex., 同地, 30.X.2023; 1 ex., 同地, 8.XI.2023.17:00,(ナワシログミ).

*372. アカフヤガ *Diarsia pacifica* 1 ex., 東海岸北1丁目, 4.XI.2023.18:30,(ナワシログミ).

373. ウスチャヤガ *Xestia dilatata* 1 ex., 東海岸北1丁目, 1.XI.2023.19:00,(ナワシログミ).

茅ヶ崎南部の蛾への考察

採集地は、防潮堤防（サイクリング道路）と国道134号線で自然海浜と北側が区画され、住宅地が砂丘上に広がり、クロマツを主体とした緑地が点在し、広場として小中高の学校が存在する地域である。国道1号線から北側は、多くが自然堤防(微高地)と田圃の埋め立てで造成された住宅地で、採集の機会が無かった。

ここで373種を記録し、そのうち166種が茅ヶ崎市初記録で、内訳は小蛾類が119種で、大蛾類が47種であった。樹林地を殆ど見ない南部地域ではヤマユガ科、シャチホコガ科、カレハガ科は採集出来なかった。まれに発生を見た幼虫が多食性であるオオミズアオ *Actias aliena*、かつて普通種であったマツカレハ *Dendrolimus spectabilis* (何時からいなくなったのか不明)、夏期サクラに発生していたモンクロシャチホコ *Phalera takasagoensis* の飛来は見なかった。

2023年10月31日（開花に気付いた日）から11月8日まで、ナワシログミの開花に合わせて採集をした。昨年までは、昼間ハナアブやミツバチが訪れるのを観察して、夜の観察はしていなかった。花の香り（化学的）に対する嗅覚への反応か、薄暮から日没直後、蛾類の行動が活発な時間帯、計測をした訳ではないが香りが強い時間に多数飛来してきて、花から花へ吸蜜しながら飛び回っていた。詳細な訪花頻度の調査は行っていないが、観察状況からナワシログミに関しては蛾類が最強の送粉者で

あろう。日中はアカタテハ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチの飛来を観察したが、グミ科の花の構造上、香りにつられて飛来したと思われるハナアブなどは花蜜まで口器が届かないと思われる。

茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類報告へ以下の種を追加する。

キヌバコガ科 Scythrididae

* ヨツモンキヌバコガ *Scythris sinensis* 1 ex., 大洞谷, 4.V.2021. 昼飛性の小さな種類である。日本の同科では1種のみが知られている。北部丘陵では700種目の確認になる。

茅ヶ崎市の蛾相考察

前回までの報告に今回の結果を加え、科の順を「鱗翅類」による表を作成した(表1)。北部で45科700種、南部で27科373種、茅ヶ崎市全体で計867種記録できた。北部に対して南部の記録科数は60.0%、種類数は51.8%である。北部は雑木林や畑地、田圃等の里山的環境が辛うじて残っており、南部は住宅街でクロマツを中心とした緑地が点在するだけで、自然度の違いは歴然としている。

しかし南部で記録された茅ヶ崎市初記録は166種で思いのほか多く、鱗翅目の多様性を示している。「北部丘陵の蛾」を調査した時の採集頻度が週に1回程度で、南部の調査は特に2022年から2023年はほぼ毎日行なった事の違いかも知れないし、蛾類の移動に関するデータになるかも知れない。

神奈川県昆虫誌2018[III]によると神奈川県では2,380種(茅ヶ崎市で記録できなかった科は除く)が記録され、茅ヶ崎市産 867種は 36.4%に当たる。神奈川県でマクロと呼ばれる大蛾類の中で中心を占めるグループではヤガ科が35.6%、シャクガ科が27.9%である。茅ヶ崎市での記録が極端に少ないのはシャチホコガ科7.6%(7/92種)、カレハガ科8.3%(1/12種)、カギバガ科13.2%(7/53種)である。3科ともに幼虫の食性は木本食で、単食性あるいは狭食性を示している。これらは茅ヶ崎市の樹林の厚さ(薄さ)を表している可能性がある。採集したシャチホコガ科のウスキシヤチホコ *Mimopydna pallida*、キシヤチホコ *Cutuza straminea*、カレハガ科のタケカレハ *Euthrix albomaculata*はイネ科食で樹木に依存する種類ではない。ミクロと呼ばれる小蛾類ではハマキガ科 30.5%、メイガ上科のメイガ科 55.0%、ツトガ科 48.7%であり、メイガ上科の割合は多いように思えるが、理由は不明である。茅ヶ崎市の地形は海拔50m程の低い丘陵と砂丘低地で山地とは言えず、生物相の違う多摩地方の影響も受けていない。この数字は蛾類ファウナに茅ヶ崎市の環境を反映しているのかもしれない。スズメガ科の42.9%は広域活動性を示していて、ヤマユガ科の62.5%は当科の特性なのだろうか。ハマキガ科、メイガ上科以外の小蛾類の数字は科内種類数の少なさと調査不足であろう。

謝辞

調査にあたり小池叡氏、故石井準子氏には採集品を恵与いただいた。また、早稲田大学(元茅ヶ崎市博物館)の馬谷原武之氏には文献をご紹介いただき、文章の作成、校正においてお世話になった。

茅ヶ崎市博物館の板垣光星氏をはじめスタッフの皆さまには校正においてお世話になった。この場を借りて深く感謝する。

* 茅ヶ崎市東海岸北 1-6-45

引用参考文献

- 蛾界編集グループ, 2022. 2021の昆虫界をふりかえって;蛾界. 月刊むし, 615:54-55.
- 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛・大和田守(著), 1982. 日本産蛾類大図鑑I解説編, 966pp. 講談社, 東京.
- 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛・大和田守(著), 1982. 日本産蛾類大図鑑II図版・目録編, 552pp. 講談社, 東京.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2018. 神奈川県植物誌2018.xviii+1720+128pp. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.
- 金子岳夫, 2023. 静岡県におけるシナチクノメイガの採集例. 誘蛾燈, 252:93.
- 勝山輝男, 2018. キク科. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌2018(下). pp1492-1645. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.
- 岸田泰則(編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑I, 352pp. 学研教育出版, 東京.
- 岸田泰則(編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑II, 416pp. 学研教育出版, 東京.
- 岸田泰則(編), 2013. 日本産蛾類標準図鑑III, 359pp. 学研教育出版, 東京.
- 岸田泰則(編), 2013. 日本産蛾類標準図鑑IV, 552pp. 学研教育出版, 東京.
- 駒井古実・吉安裕・那須義次・斎藤寿久(編), 2011. 日本の鱗翅類 系統と多様性, 1305pp. 東海大学出版, 神奈川.
- 前田憲吾・吉安裕, 2020. 滋賀県守山市で採集された北米からの移入種と思われる *Pyrausta inornatalis* (鱗翅目: ツトガ科, ノメイガ亜科) -日本における2番目の分布記録. 誘蛾燈, 240:43-45.
- 間野隆裕, 2022. シナチクノメイガの愛知県と岐阜県の記録. 誘蛾燈, 247:43-44.
- 馬谷原武之・緒方隆, 2019. 神奈川県沿岸部におけるハマゴウノメイガ *Aglaops lbipennis* 幼虫の確認と分布. 日本生物地理学会会報, 74:59-64.
- みんなで作る日本産蛾類図鑑V2, 日本産蛾類標準図鑑 IV 正誤表 (2017年12月17日版). <http://www.jpmoth.org/eratta2.html>
- 宮野昭彦, 2020. 日本未記録のピンク色のノメイガ. 誘蛾燈, 239:1-2.
- 中島秀雄・山本光人, 2004. チョウ目(ガ類). 神奈川昆虫談話会 神奈川県昆虫誌 2004 III, 907-1158.
- 中島秀雄・阪本優介, 2018. チョウ目(ガ類). 神奈川昆虫談話会 神奈川県昆虫誌 2018 [III], 702-831.
- 中島秀雄, 2022. 神奈川県蛾類分布資料VI-三国山周辺の蛾類-. 神奈川虫報, 207:81-97.
- 緒方隆・小池叡・真保忠治, 2018. 茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(1)-アツバモドキガ科・ヤガ科-. 文化資料館調査研究報告, 27:35-55.
- 緒方隆・小池叡・真保忠治, 2019. 茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(2)-カギバガ科、ツバメガ科、シャクガ科、カレハガ科、オビガ科、カイコガ科、ヤママユガ科、イボタガ科、スズメガ科、シャチホコガ科、ドクガ科、ヒトリガ科、コブガ科-. 文化資料館調査研究報告, 28:41-62.
- 緒方隆・小池叡・真保忠治, 2020. 茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(3)-ハマキガ科、ハマキモドキガ科、ニジュウシトリバガ科、トリバガ科、マダガ科、メイガ科、ツトガ科-. 文化資料館調査研究報告, 29:41-59.
- 緒方隆・小池叡・真保忠治, 2021. 茅ヶ崎市北部丘陵の蛾類(4)-コウモリガ科、ヒゲナガガ科、マガリガ科、ヒロズコガ科、ホソガ科、スガ科、クチブサガ科、コナガ科、アトヒゲコガ科、ホソハマキモドキガ科、ヒラタマルハキバガ科、マルハキバガ科、ヒゲナガチビキバガ科、ニセマイコガ科、ミツボシキバガ科、エグリキバガ科、カザリバガ科、キバガ科、ネムスガ科、イラガ科、マダラガ科、スカシバガ科-訂正および追加等. 文化資料館調査研究報告, 30:29-39.
- 長田庸平, 2023. 大阪府堺市でシナチクノメイガを採集. 誘蛾燈, 254:166.
- 田中淑喬・坂本優介, 2006. 2005年に神奈川県で採集された興味ある蛾類. 誘蛾燈, 184:77-84.
- 田中淑喬・次田章・沼田和洋, 2021. *Pyrausta inornatalis* (Pryer) アメリカピンクノメイガの累代飼育による生態観察. 誘蛾燈, 243:41-47.
- 富永智, 2020. ワタリングが沖縄島のホソバキンゴジカで発生した記録. 誘蛾燈, 239:17-19.

表 1 確認種の科別割合

茅ヶ崎市北部と南部の蛾類					茅ヶ崎 市全体	北部			南部			* 神奈川 県(2018)	茅ヶ崎市 種類数
No.	上科名	No.	科名		種類数	種類数	科内種 数/全 種類数	種類数	茅ヶ崎 初記録 種数	科内種 数/全 種類数	種類数	茅ヶ崎 種類数	茅ヶ崎 種類数
1	コウモリガ	Hepialoidea	1	コウモリガ	Hepialidae	1	1	0.1%				3	
2	マガリガ	Incurvarioidea	2	ヒゲナガガ	Adelidae	3	3	0.4%				10	
			3	マガリガ	Incurvariidae	1	1	0.1%				2	
3	ヒロズコガ	Tineoidea	4	ヒロズコガ	Tineidae	11	8	1.1%	6	3	1.6%	22	
4	ホソガ	Gracillarioidea	5	ホソガ	Gracilliridae	13	8	1.1%	5	5	1.3%	11	
5	スガ	Yponomeutoidea	6	スガ	Yponomeutidae	5	4	0.6%	2	1	0.5%	18	
			7	クチブサガ	Ypsolophidae	1	1	0.1%				9	
			8	コナガ	Pultellidae	2	2	0.3%	2		0.5%	3	
			9	アトヒゲコガ	Acrolepiidae	3	2	0.3%	1	1	0.3%	4	
			10	ホソハマキモドキ	Glyphipterigidae	3	3	0.4%				7	
6	キバガ	Gelechioidea	11	ヒラタマルハキバガ	Depressariidae	3	2	0.3%	1	1	0.3%	13	
			12	クスバコガ	Scythrididae	1	1	0.1%				1	
			13	マルハキバガ	Oecophoridae	9	6	0.9%	5	3	1.3%	16	
			14	ヒゲナガキバガ	Lecithoceridae	8	4	0.6%	5	4	1.3%	11	
			15	ニセマイコガ	Stathmopodidae	5	2	0.3%	3	3	0.8%	5	
			16	ミツボシキバガ	Autostichidae	4	2	0.3%	4	2	1.1%	3	
			17	エグリキバガ	Peleopodidae	1	1	0.1%	1		0.3%	1	
			18	カザリバガ	Cosmopterigidae	12	5	0.7%	9	7	2.4%	6	
			19	キバガ	Gelechiidae	20	14	2.0%	8	6	2.1%	24	
7	ネムスガ	Galacticoidea	20	ネムスガ	Galactiidae	1	1	0.1%				1	
8	マダラガ	Zygaenoidea	21	イラガ	Limacodidae	5	4	0.6%	4	1	1.1%	18	
			22	マダラガ	Zygaenidae	4	2	0.3%	3	2	0.8%	11	
9	スカシバガ	Sesioidea	23	スカシバガ	Sesiidae	3	3	0.4%				18	
10	ハマキガ	Tortricioidea	24	ハマキガ	Tortricidae	67	43	6.1%	37	24	9.9%	220	30.5%
11	ハマキモドキガ	Choreutoidea	25	ハマキモドキガ	Choreutidae	3	1	0.1%	2	2	0.5%	4	
12	ニジュウシトリバガ	Alucitoidea	26	ニジュウシトリバガ	Alucitidae	1	1	0.1%				2	
13	トリバガ	Pterophoroidea	27	トリバガ	Pterophoridae	7	5	0.7%	4	2	1.1%	18	
14	マドガ	Thyridoidea	28	マドガ	Thyrididae	3	3	0.4%				10	
15	メイガ	Pyraloidea	29	メイガ	Pyralidae	72	43	6.1%	41	29	11.0%	131	55.0%
			30	ツツガ	Crambidae	109	89	12.7%	61	20	16.4%	224	48.7%
16	カレハガ	Lasiocampidea	31	カレハガ	Lasiocampidae	1	1	0.1%				12	8.3%
17	カイコガ	Bombycoidea	32	オビガ	Eupterotidae	1	1	0.1%				1	
			33	カイコガ	Bombycidae	1	1	0.1%				4	
			34	ヤマムユガ	Saturniidae	5	5	0.7%				8	62.5%
			35	イボタガ	Brahmaeidae	1	1	0.1%				1	
			36	スズメガ	Sphingidae	18	15	2.1%	9	3	2.4%	42	42.9%
18	カギバガ	Drepanoidea	37	カギバガ	Drepanidae	7	6	0.9%	1	1	0.3%	53	13.2%
19	シャクガ	Geometroidea	38	ツバメガ	Uraniidae	2	2	0.3%				7	
			39	シャクガ	Geometridae	148	137	19.6%	42	11	11.3%	530	27.9%
20	ヤガ	Noctuoidea	40	シャチホコガ	Notodontidae	7	7	1.0%				92	7.6%
			41	ドクガ	Lymantriidae	10	9	1.3%	5	1	1.3%	32	31.3%
			42	ヒトリガ	Arctiidae	24	20	2.9%	8	4	2.1%	56	42.9%
			43	コブガ	Nolidae	21	17	2.4%	8	4	2.1%	46	
			44	アツバモドキ	Micronoctuidae	1	1	0.1%				1	
			45	ヤガ	Noctuidae	238	212	30.3%	96	26	25.7%	669	35.6%
				計		866	700	100.0%	373	166	100.0%	2380	36.4%

* 神奈川県の種類数(2018)は茅ヶ崎市に産しない科は除く。

純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全（2）

～房全のキリスト教信仰～

名取龍彦*

1 はじめに

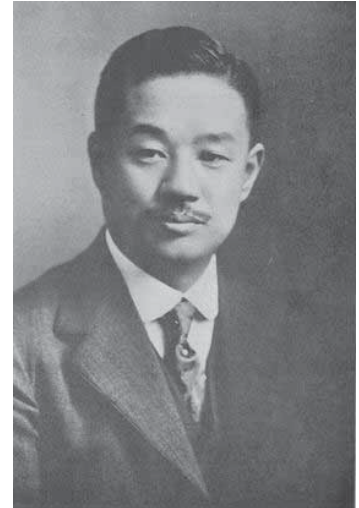
今から100年程前、約1万2千坪の広大な敷地を有し、高度な繰糸技術を誇った大製糸工場「純水館茅ヶ崎製糸所」が茅ヶ崎駅の北側にあった。館長を務めたのが、明治15（1882）年に長野県上丸子村（現上田市）で生まれた小山房全（第1図）である。純水館茅ヶ崎製糸所は高品質生糸の生産だけでなく、南湖院と同様に茅ヶ崎町の発展にも大いに貢献した。

川原利也が著書『南湖院と高田畊安』の中で「茅ヶ崎市の歴史遺産の中で、埋没への哀惜をかき立てるものに「高田畊安と南湖院」というテーマのほかに「小山房全と純水館」というテーマがある（註1）」と述べたが、南湖院と高田畊安については、同書が世に出たことで歴史遺産の中に埋没することなく研究が進んだ。しかし、歴史遺産の中に埋没した小山房全と純水館については、『茅ヶ崎市史』とその関連書以外に研究の進展がほとんどなかった。

本稿はキリスト教を信仰していた房全について、信仰に視点をおいてまとめたものである。目的は、新資料も含めて複数の資料によって房全がキリスト教を深く信仰していたことを明らかにするとともに、その信仰に基づいた工場経営を行っていたことを述べることにある。尚、キリスト教の信者（キリスト教徒・クリスチャン）とは、正式には洗礼を受けた者を言う。房全はキリスト教を信仰していたが信者にはなっていない。現在は「信徒」という名称が一般的であるが、本稿では筆者が参考にした資料にある「信者」の名称を使った。

2 純水館の概略

純水館の本拠地は長野県小諸町（現小諸市）である。小諸で延宝2（1674）年から続く豪商小山家の当主小山久左衛門が、明治23（1890）年に長野県大里村諸で製糸工場の純水館を創業し、最盛期には同県内に10余りの工場を有していた。純水館茅ヶ崎製糸所は、小山久左衛門の長女喜代野と結婚した房全（旧姓工藤）が館長に就き、大正6（1917）年に繰糸を開始した。発明から間もない御法川多条繰糸機を工場に設置して生産された生糸は、大正末にニューヨークで「Special Grand Double Extra（スペシャル・グランド・ダブル・エキストラ）」と高品質の格付けがなされ、他の日本の製糸工場に先駆けてアメリカへ輸出された。その生糸は、第一次世界大戦の戦勝国アメリカで、女性の社会進出と



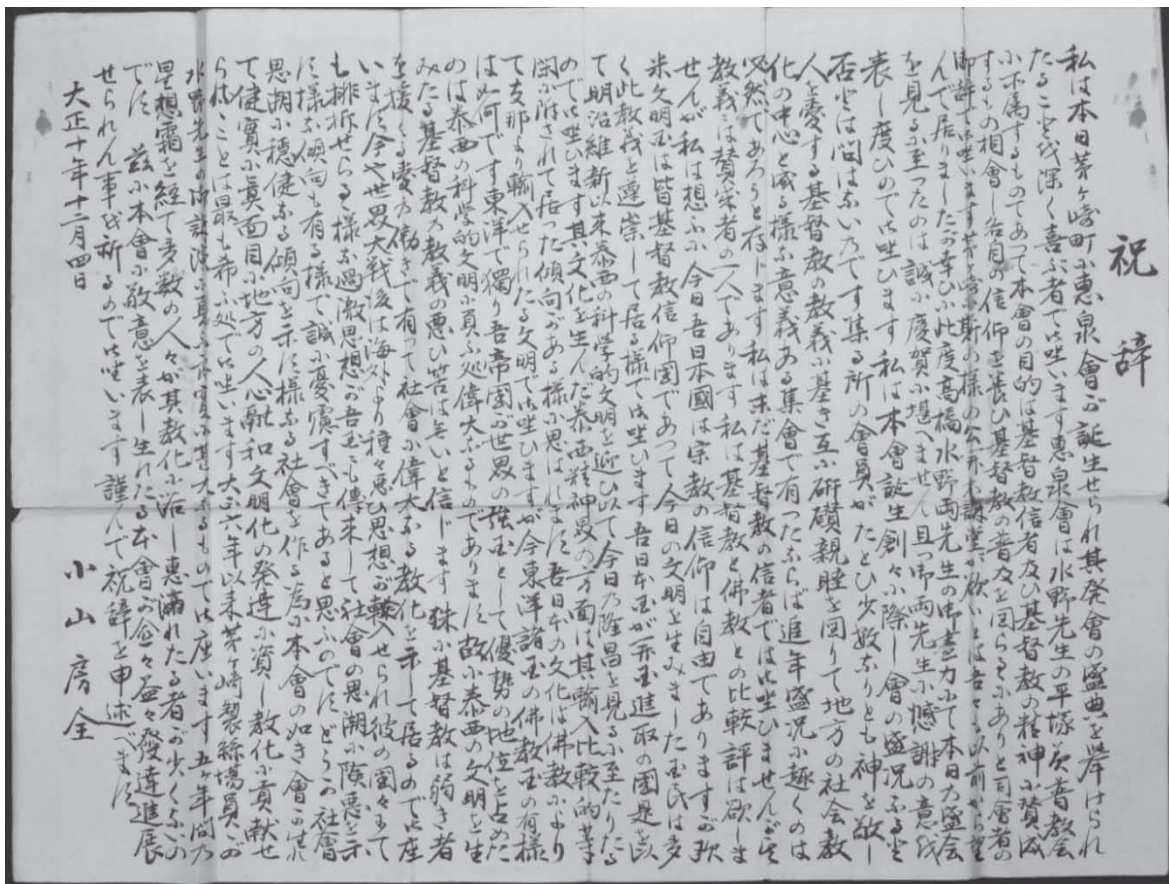
第1図 小山房全
『房全追憶録』より

ともに流行し始めた女性用絹靴下の原料になった。フルファッションと呼ばれる、足にぴったりフィットする絹靴下の原料として求められたのは、細く、強く、均質で美しい光沢のある最高品質の生糸だった。また、国内では、大正12(1923)年の皇太子(後の昭和天皇)のご成婚に際して、全国から集められた繭が純水館茅ヶ崎製糸所で繰糸され、皇室へ献上された。この繰糸は、純水館茅ヶ崎製糸所が全国で唯一選ばれた製糸工場として有名になった。工場経営に関しても、房全は「糸もつくるが、人間もつくる」と言われ、従業員の健康や教育にも心を配り、模範工場としての名も馳せた(註2)。

しかし、大正12(1923)年9月1日の関東大震災では工場が全壊し、房全の妻の喜代野が震災死した。その後、横浜の生糸貿易商の渋沢商店や小山一族会の支援で工場を再建するが、昭和恐慌、生糸相場の下落、人造絹糸(人絹、レーヨン)の生産・消費拡大等により経営は厳しさを増して行く。「製糸業は生死業」とも言われた時代に、純水館茅ヶ崎製糸所は絶頂期と衰退期を経験した。房全は、工場の経営に加え、製糸業界全体が苦難の時代に、神奈川県製糸同業組合長を務め県下蚕糸業界の発展にも尽力するが、持病に心労が重なり昭和10(1935)年に53歳で病死する。そして、純水館茅ヶ崎製糸所(以降純水館)は昭和12(1937)年に廃業し、20年程の歴史に幕を閉じた。

3 房全のキリスト教信仰に関する資料

(1) 掛川國雄氏所蔵資料



第2図 小山房全 恵泉会発会式の祝辞 大正10年12月4日 所蔵：掛川國雄氏

次章第4章で紹介する既刊資料からは、房全がキリスト教を信仰していたことがわかるが、確実な資料となるのが房全の孫の掛川國雄氏が所蔵している恵泉会発会式の祝辞(第2図)である。恵泉会

はキリスト教の団体である。第2図は縦39cm、横52.5cmの大きさで、毛筆で書かれている。文末に「大正十年十二月四日」の日付があり、「小山房全」と署名がある。発会式のために房全が書いたものである。『茅ヶ崎教会六十年史』には、「いよいよ〈恵泉会発会式〉が大正十年十二月四日（日）午後六時半、青年会館において行なわれた。もちろん、平塚教会の水野重吉牧師、恵泉会長波多野貞夫と恵泉会の人たちが多数かけつけ、参加者七十余名という盛大なものであった。このうちに小山房全（純水館長）木島鄰（寒川町の医師）がいた（註3）」とあり、第2図の大正十年十二月四日の日付と一致する。平塚の恵泉会と関係しながら茅ヶ崎の恵泉会が発会したのである。発会式のプログラムによれば、司会者を高橋誠一が務め、説教を水野牧師が行なっている。そして、波多野貞夫、木島鄰、小山房全の3人が祝辞を述べている（註4）。この祝辞の原稿が第2図である。

次に第2図の全文を紹介する。句点は筆者が付け加えた。

「祝辞

私は本日茅ヶ崎町に恵泉会が誕生せられ其発会の盛典を挙げられたることを深く喜ぶ者で御座います。恵泉会は水野先生の平塚美普教会に所属するものであつて本会の目的は基督教信者及び基督教の精神に賛成するもの相会し各自の信仰を養ひ基督教の普及を図らるるにありと司会者の御辞で御座います。茅ヶ崎に斯の様の公開の講堂が欲しいとは吾々も以前から望んで居りましたが幸ひに此度高橋水野両先生の御尽力にて本日の盛会を見るに至つたのは誠に慶賀に堪へません。且つ御両先生に感謝の意を表し度ひので御座います。私は本会誕生創々に際し会の盛況なると否とは問はないのです。集る所の会員がたとひ少数なりとも神を敬し人を愛する基督教の教義に基き互に研鑽親睦を図りて地方の社会教化の中心となる様な意義ある集会で有つたならば追年盛況に趣くのは必然であらうと存じます。私は未だ基督教の信者では御座ひませんが其教義には賛成者の一人であります。私は基督教と仏教との比較評は欲しませんが私は想ふに今日吾日本国は宗教の信仰は自由であります。欧米文明国は皆基督教信仰国であつて今日の文明を生みました。国民は多く此教義を尊崇して居る様で御座います。吾日本国が開国進取の国是を以て明治維新以来泰西の科学的文明を迎ひ以て今日の隆昌見るに至りたるので御座います。其文化を生んだ泰西精神界の方面は其輸入比較的等閑に附されて居つた傾向がある様に思はれます。吾日本の文化は仏教によりて支那より輸入せられたる文明で御座いますが今東洋諸国の仏教国の有様は如何です。東洋で独り吾帝国が世界の強国として優勢の地位を占めたのは泰西の科学的文明に負ふ処偉大なるものであります。故に泰西の文明を生みたる基督教の教義の悪ひ筈は無いと信じます。殊に基督教は弱き者を援くる愛の働きで有つて社会に偉大なる教化を示して居るので御座います。今や世界大戦後は海外より種々悪ひ思想が輸入せられ彼の国々にては排折せらるる様な過激思想が吾国にも伝来して社会の思潮に險悪を示す様な傾向も有る様で誠に憂慮すべきであると思ふのです。どうか社会思潮に穩健なる傾向を示す様な社会を作る為には本会の如き会が生れて健全に真面目に地方の人心融和文明化の発達に資し教化に貢献せらるることは最も希ふ処で御座います。大正六年以来茅ヶ崎製糸場員が水野先生の御講演に負ふ処実に甚大なるもので御座います。五ヶ年間の星想霜を経て多数の人々が其教化に浴し恵まれたる者が少くないのです。茲に本会に敬意を表し生れた

る本会が愈々益々発達進展せられん事を祈るので御座います。謹んで祝辞を申述べます。

大正十年十二月四日

小山房全

房全は、初めに恵泉会の誕生を喜び、水野牧師と高橋誠一に感謝している。「私は未だ基督教の信者では御座ひませんが其教義には賛成者の一人であります」と述べている。「恵泉会の会則」第2条に「本会は基督教信者及び基督教の精神に賛成する者をもって組織する。但し基督教信者を正会員としその他は賛助会員とす(註5)」とある。高橋が房全のことを「私共茅ヶ崎にある基督教信者が、恵泉会を組織し、茅ヶ崎町青年会館を借りて集会を開き、茅ヶ崎の伝道を開始した際などは、受洗はされなかつたけれども、進んで賛助会員となられた(註6)」と書いている。房全は洗礼を受けた信者として正会員になるのではなく、賛助会員として恵泉会に参加したのである。

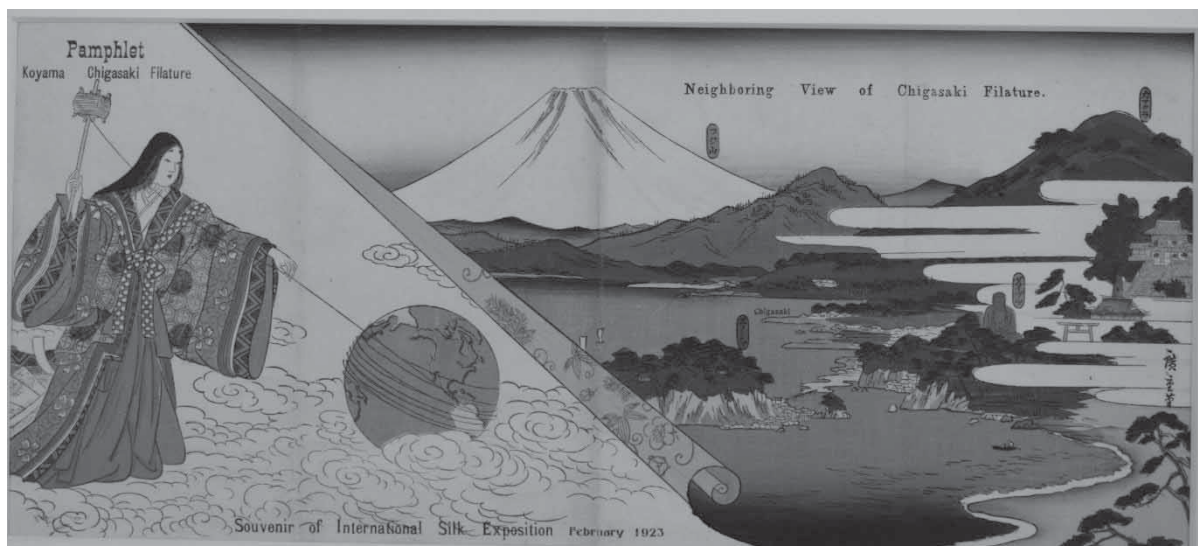
祝辞では、房全の宗教観および当時の日本社会に対する考え方も述べられている。房全は基督教と仏教を比較することは望んでいない。欧米が現在の文明を生んでいるのは基督教の教義によるのであり、日本では「科学」は輸入したがその精神がおざなりにされていると述べて、さらに、ヨーロッパでは、基督教が弱き者を助ける愛の働きで社会に偉大な教化を示していると考えている。併せて、「大正六年以来茅ヶ崎製糸場員が水野先生の御講演に負ふ処実に甚大なるもので御座います五ヶ年間の星想霜を経て多数の人々が其教化に浴し恵まれたる者が少くないのです」とあり、基督教の信仰が純水館工場内に広まったことにも触れている。

恵泉会発会式の会場になった青年会館については、房全の長女泰子が「水野牧師の導きにより、工場にはキリストを信じる者がふえてきましたので、この人びとのために福音の集まりが必要となりました。大正十年ごろより工場の門外に出て集会を持つようになりました。水野先生によって高橋誠一先生ご夫妻、私の両親が発起人と申しましょうか、先き立ちになり、工場内の特に信仰を求める人たち、また町の希望者などによってささやかながら誠に熱心な集会が行われました。場所は震災前のことでしたから工場の門の外の左側に町役場があって、その続きに町の青年会館があり、それを借りて行われました(註7)」と書いている。文中の「私の両親」が、房全と喜代野である。祝辞のなかで「本会誕生創々に際し会の盛況なると否とは問はないのです。集る所の会員がたとひ少数なりとも神を敬し人を愛する基督教の教義に基き互に研鑽親睦を図りて地方の社会教化の中心となる様な意義ある集会で有つたならば追年盛況に趣くのは必然であろうと存じます」と房全が予想した通り、基督教を信仰する人が増え、集会が純水館工場内から外へも広がっていったことがわかる。

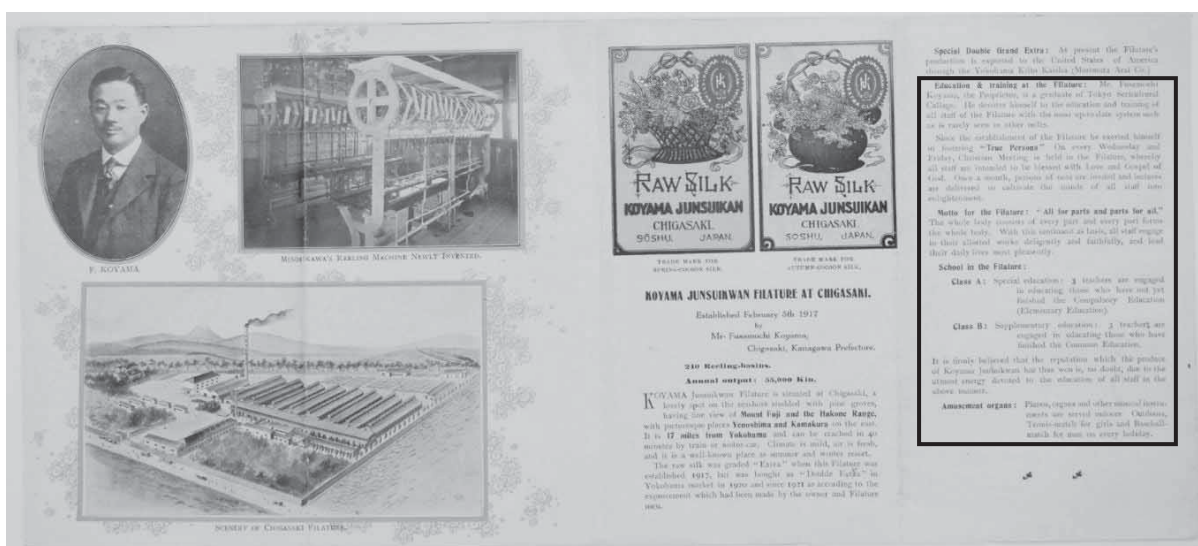
恵泉会は、その後昭和2(1927)年10月30日に教会堂を十間坂に建て「茅ヶ崎美普教会」の創立へと至る(註8)。

(2) 茅ヶ崎市所蔵英文パンフレットと『横浜貿易新報』

第3図、4図は、茅ヶ崎市が所蔵する縦17cm、横38.5cmで両面刷りカラー版英文パンフレットである。表面(第3図)の左上には「Pamphlet Koyama Chigasaki Filature」(小山・茅ヶ崎製糸



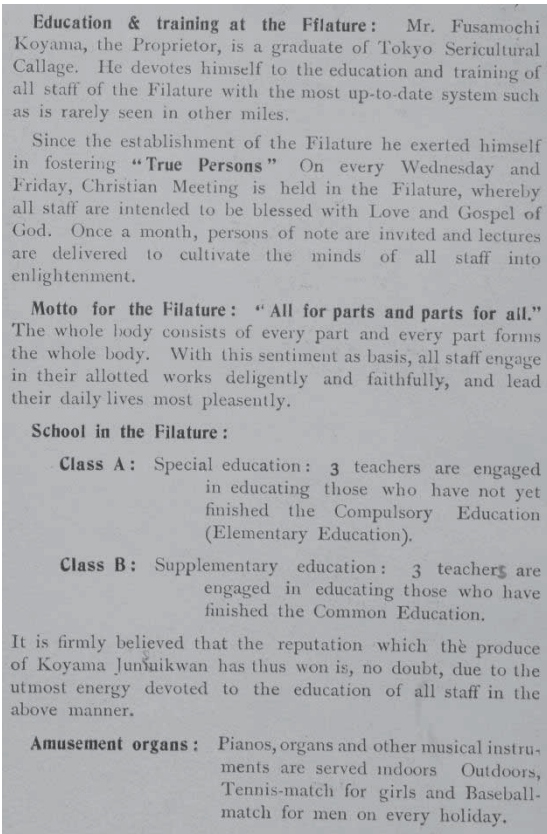
第3図 Pamphlet Koyama Chigasaki Filature (表) 所蔵：茅ヶ崎市



第4図 Pamphlet Koyama Chigasaki Filature (裏) 所蔵：茅ヶ崎市

工場のパンフレット)とあり、左下には「Souvenir of International Silk Exposition February 1923」とある。このパンフレットが、大正12(1923年)2月に開催された国際絹物展覧会のために純水館が作成した土産品、記念品であることを示している。

この展覧会に日本は御法川多条繰糸機を出展、実演し、片倉製糸、郡是製糸、純水館を含めた26工場が生糸を展示した(註9)。裏面(第4図)には、房全の肖像、純水館で導入した御法川多条繰糸機、工場の鳥瞰図、シルクラベルの写真とともに、純水館の工場、生糸の説明および房全の経営信条が書かれている。第5図は、第4図のうち、経営信条に関して書かれた部分に筆者がつけた を拡大したものである。文章量において、純水館の経営信条が純水館の工場、生糸の説明を上回っている。これは、恵泉会発会式の祝辞で述べた「泰西精神界の方面は其輸入比較的おごり等閑に附されて居つた傾向がある」と考える房全が、純水館の経営信条を欧米諸国へアピールするためだったと推測する。泰西



第5図 第4図の□部分

製糸場内の学校

A組 特別教育 3人の教師が、義務教育をまだ終えていない人々の教育に従事している。(初等教育)

B組 補習教育 3人の教師が、普通教育を修了した人々の教育に従事している。

小山純水館が獲得した評判は、間違いなく、上記の方法で全従業員の教育に注がれた最大限のエネルギーによるものであると固く信じられている。

娯楽設備

ピアノ、オルガンやその他の楽器が室内に用意されている。戸外では、休日ごとに少女のテニスの試合、男性の野球の試合が行われている」

この文章と関連する記事が、英文パンフレットが作成された翌年大正13(1924)年6月15日の『横浜貿易新報(現神奈川新聞)』にある。句点は筆者が付け加えた。

「寄宿舎は六人一室年長者を室長とし監督に重きを置かず互に自由を尊重昼間の仕事にも舎の生活にも各自の自覚を重んじて居る。毎週金曜日の夕平塚キリスト教会水野牧師を招聘して宗教を加味せざる修養談を聴かして居る。記者一昨夕これを参観したが全館員広々とした新材の香に満ちた清楚なる食堂に集まり牧師に連れて讚美歌を合唱女子が美音を発するを好む性を喜ばしむる目的の下に社会問題時事問題を平易巧妙に講演あり。次に再び讚美歌を合唱して終つたが聴き馴れた聴講者話し馴れ

とは西洋(欧米)のことである。

筆者が試みた第5図の日本語訳である。訳文の太字は、英文の太字部分である。

「製糸場での教育および訓練

経営者の小山房全は東京の蚕糸専門学校を卒業し、他の工場ではめったに見られない最新の方法で、全従業員の教育と訓練に専念した。

製糸場の創業以来、「真の人(True Persons)」を育てる努力をした。水曜日と金曜日ごとにキリスト教の集会があり、すべての従業員は神の愛と福音の恵みにあずかることを目指している。1か月に一度、著名人を招き、全従業員の心を啓発するための講義を行っている。

製糸場のモットー 『全体は部分のために、部分は全体のために (All for parts and parts for all)』 全体はすべての部分からなり、すべての部分が全体を形づくる。この気持ちをもとに、全従業員が最も楽しく日常生活を送っている。

た講師其の間に口も云はれぬ親しみあるを感じた。尚毎月一回東京成溪学園小瀬松次郎氏の「心の力」につきての講義鉄道青年会布教師神谷徳倫氏の禅味を帯びた修養談がある。女工の修学欲盛に「婦人公論、改造、女学講義録」等を始め八十余の雑誌、十余種の新聞が這入って居る。男工は十四五歳小学卒業より養成し特に補習学校を設けて中等教育を授けて居り野球、庭球等の運動に依つて鍛身をはかつて居る。館長小山房全氏は頗る好学家にて社会時事に関する新刊書は常に之を求め図書室へ供へて読ませて居る」

新聞記事では毎週金曜日に、平塚教会の水野牧師が「宗教を加味せざる修養談」を行なっているとあるが、讚美歌を歌いながら「宗教を加味しない」とは考えにくい。先述の英文パンフレットにも「水曜日と金曜日ごとに基督教の集会があり、すべての従業員は神の愛と福音の恵みにあずかることを目指している」とあるので、新聞記事の間違えではなく、基督教に対する何らかの配慮があつて、「宗教を加味しない」との表現になったのでないかと推測する。

「東京成溪（成蹊）学園」は中村春二が創立した学校で、大正自由教育の学校として知られている。小瀬松次郎も大正自由教育運動に関わった人物である。

「鉄道青年会」は、東京基督教青年会（東京YMCA）宗教部主任だった益富政助が主唱し、発起人に新渡戸稲造、大隈重信らを迎えて明治41（1908）年に発会式を行った。「鉄道青年会」は基督教青年会との関わりがあるが、同会の募集要項には「基督教徒たらねばならぬ義務はありません」とある（註10）。鉄道青年会布教師による修養談の内容を知る手がかりとなる資料がある。鉄道青年会出版部が発行した『修養往来』（註11）と題された書籍である。鉄道省図書館の青木清一が編集した格言集で、「鉄道編」「社会編」「生活編」「宗教編」等12に分類され、先人の言葉を多数紹介している。同書には新渡戸稲造が序文を書いている。純水館に招聘された鉄道青年会布教師は、様々な格言を紹介しながら従業員への講話を行なっていたと考える。神谷徳倫についての詳細は不明である（註12）。

『女学講義録』は通信教育の雑誌名である。純水館では、英文パンフレットにある教師による対面授業以外に、通信教育の機会が従業員にあつたことがわかる。

英文パンフレットと『横浜貿易新報』の記事から明らかなことは、純水館では水野牧師をはじめ多くの著名人が招かれて定期的な基督教の集会が開かれ、講話（修養談）を行ない、讚美歌を歌い（註13）、図書室も備わった工場内で様々な教育活動が行なわれ、スポーツも盛んだつたことである。

4 房全の基督教信仰に関わった人々

房全は、明治37（1904）年に入学した東京蚕業講習所（現東京農工大学）の在学中から基督教の信仰に関する悩みがあつたようだ。当時房全は喜代野と婚約し、小山家の婿養子になることが決まっていた。東京蚕業講習所の学友の新居金三郎が「其当時己に宗教心の芽^{めば}へがあつて、それと自身の実生活との乖離にも苦しまれたやうでしたが（註14）」と書いている。宗教心が基督教とは書かれていないが、その後の房全の人生を考えると基督教と考えるのが自然である。

房全が東京蚕業講習所在学中の「宗教心の芽へ」から、深い信仰心へと変わっていくのに影響を与えたのは、平塚美普教会の水野重吉牧師、高橋誠一南湖院副長、妻の小山喜代野の3人が主であると

考える。

(1) 水野重吉

水野重吉は、大正 3 (1914) 年から大正 15 (1926) 年まで平塚美普教会の牧師であった(註 15)。『日本基督教団平塚教会五十年史』の大正 11 (1922) 年に「水野重吉牧師を中心として職域伝道、訪問伝道盛んになる 海軍火薬廠、南湖院、杏雲堂、茅ヶ崎純水館などにおいて」とあり、純水館については「茅ヶ崎市に大正時代にあった製糸工場。経営者小山房全兄は大正 10 年ごろは、高橋誠一兄宅で開かれていた家庭集會にしばしば出席、女子従業員に対しての伝道の道まで開かれ、受洗者も次々に出しています。同工場へは、牧師をはじめ婦人伝道師その他青年信者が応援、奨励感話などがありました。聴衆は数百ということもありました(註 16)」と説明が付されている。水野牧師を中心に平塚美普教会が教会外での伝道を盛んに行なっており、「聴衆は数百」という記録から、純水館の集會がかなり多数の集會であったことがうかがえる。『日本基督教団平塚教会五十年史』では、この頃の盛んな伝道が「明治から大正時代における教会の黄金時代」と表現している。また、房全は工場内の集會に出席していただけでなく、高橋誠一兄の家庭集會にも度々出席していたことになり、積極的にキリスト教との関わりを持っていたことがわかる。

純水館の集會に水野牧師が招かれていた期間は、純水館開業の大正 6 (1917) 年秋頃から水野牧師が平塚美普教会の牧師を辞任して渡米するまでである。英文パンフレットには水曜日と金曜日ごとにキリスト教の集會があると書かれているが、『茅ヶ崎教会六十年史』『日本基督教団平塚教会五十年史』の記録と『横浜貿易新報』の記事から、純水館での集會は毎週金曜日に開かれていたと考える。

房全が書いた水野牧師の渡米送別会の式辞草稿には「回顧すれば当館も先生を迎へて、館主始め精神修養に就き御教導を仰ぎてより既に十年に相達し、其無形的斯業の発展の上に見逸がす能はざる偉大なる御寄与を賜りたるは、感激の至りに不堪、当館が全国同業者中に有数の成績を挙げ得たるは、諸種還境に育成せられたる処ありと雖も、先生により克く教仕の実を挙げ、直接に其感化の及ぼしたる力は甚大にして、工場として既往の実蹟に照し、今後尚ほ一層の御尽力を仰ぎ、多々益々靈的方面に御教化に御教導をと切望いたし居り(註 17)」とある。この式辞からは、純水館が全国で有数の実績を上げることができたのは、水野牧師の力により従業員が感化された結果だと房全が考えていることがわかる。房全は、キリスト教の精神により工場が導かれることを切望していたのである。

また、水野牧師義妹の西森いは婦人伝道師は、純水館で工場の子どもの日曜学校を担当していた(註 18)。

(2) 高橋誠一

高橋誠一は明治 42 (1909) 年に南湖院医員となつてから洗礼を受けたキリスト教の信者である。後に南湖院の副長を務めた。南湖院内には、院長の高田畊安、副長の河野桃乃を始めキリスト教の信者が多数いた。院長の高田はキリスト教を重んじ、それに基づく病院経営を行なっていた。高田はキリストを医王、クリスマスを医王祭、南湖院関係のキリスト教信者の団体を医王団とよび、一般のキリスト教社会からは批判を受けていたが、高橋は院長の高潔な人格と熱烈な信仰心、深甚な愛情に深い

尊敬と厚い信頼をおいていた（註19）。

房全は明治40年代に南湖院に入院しており（註20）、高田院長を含めて南湖院との関係ができていた。特に高橋誠一が、大正10（1921）年に純水館の嘱託医となることで房全との関係はさらに深まり、恵泉会の創立へと繋がっていった。房全が妻の喜代野を失った関東大震災の際には、南湖院が被災したにもかかわらず、高橋は純水館に駆けつけ従業員の治療に専念している（註21）。

房全は工場内での従業員教育と社会教育に尽力するが、高橋は幼児教育と社会教育へ進み、後にキリスト教の信仰に基づく恵泉幼稚園を創立した。

（3）小山喜代野（第6図）

房全、喜代野夫妻の長女泰子の文章には、「父は理想家であり、ファイトマンであり、愛深く善良そのものの人でした。母は明治の女性らしく、つつましやかな心の通った、優しく賢い人でありました。二人の間にかもされたうるわしい愛情は、子供心にも常に喜びと安心感と誇りを与えてくれました」「母は娘時代から、また結婚後二人の子持ちになってからの入院生活からも、多くの立派なクリスチャンに出会う幸いを得てキリスト教を信じる心篤き人に育まれました」「父はそうした母の話しによく耳をかたむけ、かなり感化されていたようです」とある（註22）。これらから、房全がキリスト教を信仰するようになったのは、妻の喜代野の影響が大きいと考える。

喜代野が、キリスト教の信者に接した時期は3回ある。

〈第1期 小諸義塾女子学習舎時代〉



第6図 小山喜代野

提供：掛川國雄氏

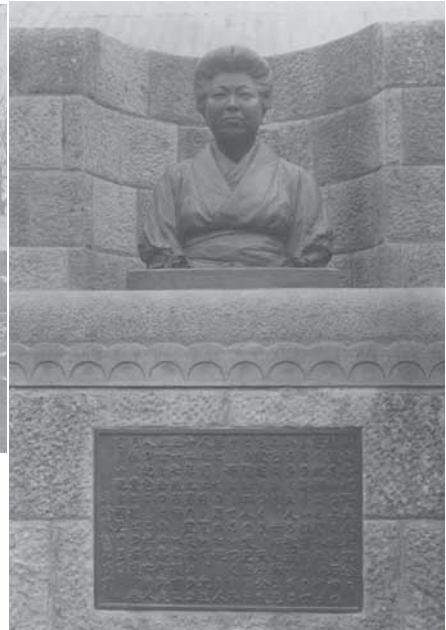


第7図 小諸義塾女子学習舎卒業記念写真（明治36年）

提供：信州味噌株式会社

前列左から2人目：小山喜代野 3人目：木村熊二塾長

後列左端：島崎藤村 後列右端：小山久左衛門



第8図 小山喜代野胸像、

島崎藤村追悼文

提供：信州味噌株式会社

泰子は母喜代野の小諸時代を「少女時代小諸に滞在された内村鑑三先生のお話を聞くとか、小学校卒業後小諸義塾に三年間学んで校長木村熊二先生に学びました（この先生は明治初年にアメリカに留学され十年の後マスター・オブ・アーツの称号や牧師の資格を得て帰朝された先生）。この塾は木村先生を尊敬して多くの立派な先生がたが集まれ、中には島崎藤村先生もおられました。母は塾生として三年間薫陶を得ることができたのです（註23）」と書いている。

キリスト教思想家の内村鑑三は、喜代野が小諸義塾女子学習舎在学中の明治35（1902）年5月21日に小諸義塾で講演をしている（註24）。この講義を喜代野が聞いたと推測する。

第7図は明治36（1903）年の小諸義塾女子学習舎の卒業記念写真である。この写真には喜代野、父親の小山久左衛門、塾長の木村熊二、島崎藤村が写っている。小諸義塾は明治26（1893）年に木村熊二が創立した私立中学校である。資金面では、小山久左衛門ら小諸の有力者が援助をしている。島崎藤村は、明治32（1899）年に塾長の木村熊二に招かれ小諸義塾の教員となり、英語と国語を担当した。島崎藤村は牧師でもある木村熊二から洗礼を受けたキリスト教の信者である（註25）。

女子学習舎は、明治34（1901）年4月に小諸義塾に併設された。塾長木村熊二の妻隆子の仕事として開校されたもので、塾長宅で教授された。資産家、有力者の娘に高等女学校程度の教育をすることを目的として、教員は島崎藤村ら小諸義塾の教員が兼務していた。しかし、女子学習舎には料理を教える施設がないため、旅館の調理室を借りて授業をするなどお嬢さん教育的な面があった。このような派手な教育と隆子のキリスト教伝道が、小諸義塾はキリスト教の学校であるとの印象を与えていた（註26）。この女子学習舎の1回生に久左衛門の長女喜代野がおり、喜代野は島崎藤村の教え子となった。

女子学習舎卒業後の喜代野と島崎藤村とのつながりを述べる。島崎藤村は、小諸を去った後の大正元年（1912年）12月に、小諸義塾の教員時代の生活を題材にした『千曲川のスケッチ』を発表する。その中に「理学士の住んで居るあたりは、荒町の裏手で、酢屋のKといふ娘の家の大きな醤油蔵の窓などが見える（註27）」との文がある。この酢屋が小山家のことである。豪商の小山家は醸造業も営んでおり、酢屋の久左衛門で「酢久商店」と呼ばれていた。Kとは喜代野のことである。

第8図は、房全が茅ヶ崎の自宅の中庭に作った喜代野の胸像である。胸像が建てられたのは大正14（1925）年で（註28）、製作したのは北海道大学構内のクラーク博士胸像を製作した田嶋碩朗^{たじませきろう}である（註29）。喜代野は、大正12（1923）年9月1日の関東大震災で自宅の倒壊により圧死している。胸像の下のプレートに追悼文を書いたのが島崎藤村である。プレートには「小山喜代野夫人の記念に 信濃の山の上に咲く石楠の花の純粹にも譬へたいやうなその美しい性質はおのづから多くの人の敬慕するところとなり、世にも稀に見る家庭をつくり、夫房全氏との間に四人の愛児をまうけ、母としてのいつくしみ妻としての思ひを親しき人々の胸に残し置いて、大正十二年九月の震災のために三十七歳の惜しい年頃でこの世を去つた小山喜代野夫人の記念に。これは亡き人の^{おもかげ} 倂、愛と徳との名残、香はしい魂の形見である 藤村しるす」とある（註30）。

この胸像は、太平洋戦争中の金属供出で失われた。しかし、追悼文のプレートは難を逃れて、損傷

はしているが、現在、小諸市立藤村記念館に保管されている。田嶋碩朗が製作した小山久左衛門の胸像は、現在も小諸の小山本家の中庭にある。

喜代野は、明治36(1903)年に小諸義塾女子学習舎卒業後すぐに房全と婚約をする。その後、渋沢栄一と親交のあった小山久左衛門は、横浜の生糸貿易商渋沢商店(栄一の従兄の喜作が創業)に勤めていたキリスト教信者の書上家^{かきあげ}に喜代野を預け、家事見習いや英語を学ばせている(註31)。房全とは明治40(1907)年に結婚した。

〈第2期 南湖院入院時代〉

泰子は母喜代野の南湖院入院時代を「明治四十四年肺結核におかされて私と弟を小諸に残し、茅ヶ崎の南湖院に三年、四年もお世話になった時、高田畊安先生のほか河野桃代(桃乃)先生、高橋誠一先生がたが皆クリスチャンでいらしたと、また南湖院では入院中日曜礼拝があって、有名な信仰の師がたびたび説教に招かれて聞かせていただいたことがあったそうです(註32)」と書いている。

南湖院入院時の明治45(1912)年2月8日には、島崎藤村から「一月の九日に下すつた御手紙を拝見したのは、丁度私が箱根まで一寸養生に参りまして、帰京した晩でした。茅ヶ崎に入院して被入つしやることを知つて居ましたら、私はあの帰途に御見舞に寄つたものをと残念しました。そんなことは存じませんでしたから、箱根の往きにも還りにも汽車かの窓からあの海岸の松林を眺めて茅ヶ崎を通りました(註33)」で始まる長文の手紙が喜代野へ届いている。小諸義塾女子学習舎卒業後も島崎藤村との交流が続いていることがわかる。

〈第3期 純水館時代〉

喜代野は、純水館開業前の大正5(1916)年9月24日に、房全、長女泰子、長男英朋と共に小諸から茅ヶ崎に転居している。茅ヶ崎の生活では、水野重吉牧師、西森いは婦人伝道師に出会い、高橋誠一南湖院副長らと再開している。

以上の3期を通して喜代野は多くのキリスト教の信者と出会い、影響を受け、キリスト教を信仰するようになった。

房全は、水野重吉牧師、高橋誠一、喜代野らと出会い、交流を重ね、影響を受けるなかでキリスト教の信仰心を深めていったと思われる。そして、純水館工場内でキリスト教の集会を毎週金曜日に行ない、従業員にもキリスト教を信仰する人が増え、信者も増えていった。

5 受洗しなかった房全と喜代野

『茅ヶ崎教会六十年史』の会員名簿には房全と喜代野の名前は載っていない。房全も喜代野も洗礼を受けて信者とはなっていないからである。房全は受洗しなかったが、恵泉会の賛助会員であったことは先述した。『茅ヶ崎教会六十年史』には、喜代野に関して「小山夫妻は南湖院で療養を受けた折からキリスト教の感化を多大に受け、妻喜代野は内村鑑三の影響もあって、洗礼こそ受けなかったが〈小諸義塾〉に木村熊治(熊二)の下で薫陶を受け、夫をよく助け〈純水館〉をキリスト教の精神で貫こうと、南湖院以来親交のあった高田院長、高橋副長の理解と協力を得、工場医師としての高橋の担当をねがい、健康管理を怠らなかつた(註34)」と書かれている。

なぜ房全と喜代野は洗礼を受けなかったのだろうか。受洗しなかった確かな理由はわからない。小諸では、小諸義塾が「^{やそきょう}耶蘇教の機関的学校」との印象を持たれていた(註35)。旧家小山家の名のあふたりが、耶蘇教とも呼ばれたキリスト教の信者になるのは難しかったのかもしれない(註36)。

房全と喜代野は、キリスト教を深く信仰していたにもかかわらず信者にはなれなかったことに苦悩していたのではないかと推測する。

尚、房全と喜代野夫妻の長女泰子は大正11(1922)年に13歳で洗礼を受け、キリスト教の信者になっている。受洗当時の泰子は、キリスト教の信仰に基づく女子教育を実践するフェリス女学院に在学中であり、母の喜代野は関東大震災前なので存命している。当然、両親の祝福のもとでの受洗と考えられる。純水館工場内での毎週金曜日のキリスト教の集會に小山家が家族全員で必ず出席していた家庭環境(註37)からすれば、泰子の受洗は自然である。

房全の死を看取った後妻の敬子も、房全病死の翌年昭和11(1936)年に洗礼を受けている。受洗に関して敬子は「昭和10年9月夫小山は病死、時代と共に製糸の事業は不振、逆境の中に置かれたことも、私の受洗の決意を早めたようであった(註38)」と述懐している。

6 房全と喜代野の墓

宗教が関係するので、房全と喜代野の墓について触れる。房全は昭和10(1935)年9月15日に亡くなり、葬儀が10月13日に本村の海前寺(曹洞宗)で行なわれた。墓に関しては「本村の相模鉄道の線路を前に見晴らしもよく富士の姿も眺められる小山家の墓地に納まった(註39)」とある。相模鉄道は現在JR相模線になっている。令和元(2019)年11月20日に、房全と喜代野の墓に関して海前寺25代目住職赤間芳陽氏から聞き取り調査を行なった。「相模鉄道の線路を前に見晴らしもよく富士の姿も眺められる」と思われる観音山共同墓地(海前寺と円蔵寺の共同墓地)には、現在、房全の墓はない。寺の過去帳には「昭和十年九月十五日没義光院大機房全居士 小山房全 五十四歳」との記録はあるが、改葬の記録はない。関東大震災で震災死した喜代野に関しては、海前寺の過去帳に記録は全くない。赤間住職から、房全の戒名に関して、「機」の字を使う戒名は珍しいと伺った。筆者は「大機」に製糸工場を連想した。

掛川國雄氏によると、太平洋戦争中の昭和18~19(1943~1944)年頃に敬子が小諸へ疎開をする際、海前寺にあった房全、喜代野、長男英朋の墓を、小諸の海応院へ改葬したとのことである。

小諸の海応院(曹洞宗)は小山本家の近くにある小山家の菩提寺である。境内の墓地の一角には他と区切られた小山家の広い墓域がある。そのなかに第9図の墓石がある。正面の中央に房全の戒名「義光院大機房全居士」が刻まれ、右には「清光院徳質慧明大姉」、左には「清心院感恩慈恵大姉」が刻まれている。右は喜代野、左は敬子の戒名である。敬子はキリスト教の信者である。敬子は、複数のキリスト教会で作った平塚の共同墓地と小諸の海応院



第9図 小山房全、
喜代野、敬子の墓
小諸海応院

に分骨されていると掛川國雄氏から伺った。

7 おわりに

純水館支配人であり、一番身近で工場経営を支えた土屋文雄は、房全について「従業員の将来を慮り、人間第二流に不落を標榜し、京都府郡是製糸株式会社の初代社長波多野鶴吉翁を範とし（註 40）」と記している。

郡是製糸株式会社創立者の波多野鶴吉は熱心なキリスト教の信者として従業員教育に尽力した人として知られている。波多野はキリスト教信者の川合信水を明治 42（1909）年に郡是製糸株式会社に招き従業員教育を任せ、教育総理とした。また、誠修学院と名づけた教育施設を大正 12（1923）年に社内設立した（註 41）。

川合の言葉に「神の直接教育によつて、東西両洋の信仰、思想、道徳の粹を不十分ながらも一身に調和総合して、今から三十年前、郡是製糸株式会社に入り、其の基督教主義と営利主義とを混合した経営の中に於て、其の精神上に於ける矛盾を見、如何にして其の矛盾を脱することを得るか、如何にして道と利とを調和することを得るか、如何にして不完全の信仰を完全ならしむるか、如何にして個人を善くするのみならず会社という大団体を善くすることを得るか等の問題を実地に当つて研究し、実施し、内外幾多の反対妨害の間に、六年間の苦心を経て、漸く以上の教を立つることを得たのである（註 42）」とある。川合は昭和 2（1927）年に^{きりすとしんしゅう}基督心宗を開宗するが、その後も郡是製糸株式会社の従業員教育を継続する。基督心宗はキリスト教の教えだけでなく他の信仰も融合したが、根底にはキリスト教の信仰があった（註 43）。

房全が、工場経営とキリスト教との関わりについてどんな考えをもっていたかがわかる長女泰子の文章がある。「いよいよ工場の運転開始に当って、両親の関心事は工場に働く全ての人びと、特にたくさん預かっている大切な娘さんたちに対して最高最善を尽くすにはいかにすべきかという問題でありました。工場全体の中心となる心の拠りどころは何か。大切な一人びとりの心に確かな拠りどころを得させ、確信をもって生きること、やがて世に出ていかなる立場境遇に遭遇しても立派に生き抜くことのできる力を与えるためには……。なお、また美しく立派な絹糸を創り出すには一同の魂が清められていなければ駄目であるというような観点から、キリスト教を心の拠りどころとすることを願って、南湖院の高橋誠一先生にご相談申し上げたのだと思います（註 44）」

また、高橋誠一が書いた房全の追悼文には、「従業員に対しては温情溢るゝ慈父の如き工場主であつた。従業員に対して、物質的によく考へてゐるばかりでなく、精神的修養の事を多く考へられてあつた。屢々知名の人士を招いて精神修養の講話をなされた。殊に水野重吉牧師を信頼されて、每周（週）1 回時を定めて信仰の講話をされ、従業員の信仰による、精神の向上と幸福を願って居られた。御自分も又之を熱心に聴かれたものである。（略）而して男女工の中から受洗者が続々出来るやうになつた（註 45）」とあり、房全がキリスト教の信仰に基づく工場経営を行なっていたことがはっきりとわかる。

そして、房全は工場内で「True Persons（真の人）」を育てる努力をして、すべての従業員が神の愛

と福音の恵みにあずかることを目指しながら工場経営をしていた。また、「All for parts and parts for all」を工場のモットーとし、全従業員の教育に力を注いだ。

大島英夫は『南湖院 高田畊安と湘南のサナトリウム』で、高田畊安と南湖院について「医師にしてクリスチャンの高田畊安。彼にとって医学とキリスト教は分かちがたく結びついている。だから茅ヶ崎の海岸に築きあげた南湖院は、ただ治療するだけの医療機関ではない。魂の救済を使命とする宗教施設でもない。その二つが一体となった弱者の楽園なのである（註46）」と述べている。

房全も、従業員一人ひとりを単に従業員としてではなく、家族の一員とみなして、純水館工場内にキリスト教精神に基づく理想の工場、理想の世界を作ることをめざしていたと筆者は推察する。

房全が御法川多条繰糸機を日本で最初に実用化して生産した世界屈指の高品質生糸は、女性用靴下の原料として、他のどこの工場よりも先にアメリカへ輸出された。それは、房全の不断努力と研究開発の成果である。そして、その努力と成果を活かして生糸を実際に作ったのが、房全が育てた「真の人」である従業員一人ひとりであった。

まさしく「糸もつくるが、人間もつくる」のが小山房全であった。

謝辞

日本キリスト教団茅ヶ崎教会の櫻井重宣牧師には教会の歴史に関して多くのことをご教示いただいた。掛川國雄氏、海前寺の赤間芳陽住職には聞き取り調査にご協力をいただいた。掛川國雄氏、信州味噌株式会社の森健氏、茅ヶ崎市役所文化推進課には貴重な資料をご提供いただいた。本稿をまとめるにあたり茅ヶ崎郷土会長の平野文明氏、茅ヶ崎ゆかりの人物館学芸員の平山孝通氏、茅ヶ崎市博物館学芸員の渡部敦寛氏にご助言をいただいた。皆さまに感謝申し上げます。

* 茅ヶ崎純水館研究会

〈註〉

註1 川原利也 1977年 『南湖院と高田畊安』 中央公論美術出版 129頁

註2 名取龍彦 2021年 「純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全（1）」『文化資料館調査研究報告』30 茅ヶ崎市文化資料館 51～70頁

註3 日本キリスト教団茅ヶ崎教会 1987年 『茅ヶ崎教会六十年史』 72頁

註4 同上 73頁

註5 同上 71～72頁

註6 見上義一 古谷平蔵 新居金三郎 1942年 『房全追憶録』 55頁

註7 註3同書 133頁

註8 註3同書 77～79頁

註9 註2同書 54～56頁

註10 三上敦史 2006年 「鉄道省勤務の若年労働者の学びと教育情報」『愛知教育大研究報告』55 111～119頁

註11 青木清一 1927年 『修養往来』 鉄道青年会出版部

註12 『房全追憶録』の70頁には、仏教界の神谷篤倫師が毎月1回純水館工場内で講話をしていると書かれている。神谷徳倫も神谷篤倫も「かみやとくりん」と読める。篤倫は仏教関係の人物、徳倫はキリスト教関係の人物として資料に名前が載っている。

註13 『純水館茅ヶ崎製糸所の想い出』（純水館講演会実行委員会 2023年 42頁）に純水館従業員が義母の齋藤れい子への聞き取り調査がある。義母は純水館退職後も、讃美歌をよく歌い、聖書の話をしていた。純水館工場内での従業員へのキ

リスト教会の広がりが見える。信仰心については触れられていない。

- 註14 註6同書 33頁
- 註15 日本基督教団平塚教会 2001年 『日本基督教団平塚教会五十年史』 69～72頁
- 註16 同上 7頁
- 註17 註6同書 158～159頁
- 註18 註3同書 132頁
- 註19 高橋誠一 1969年 『私の生涯』 茅ヶ崎恵泉学園 34頁
- 註20 註6同書 1頁
- 註21 註19同書 45頁
- 註22 註3同書 131頁
- 註23 註3同書 131頁
- 註24 岩波書店 1984年 『内村鑑三全集40 雑纂・年譜・題名索引』 419頁
- 註25 林勇 1973年 『写真資料集 小諸時代の島崎藤村』 信濃路 138頁
島崎藤村は明治21（1888）年6月に高輪の台町教会で木村熊二から洗礼を受けているが、明治26（1893）年1月に教会を退会している。
- 註26 註24同書 38頁
- 註27 島崎藤村 1947年 『千曲川のスケッチ』 岩波書店 52頁
- 註28 小諸市教育委員会 1990年 『文学探訪 小諸・藤村記念館』 蒼丘書林 68頁
- 註29 山崎貞子 2016年 『彫刻家田嶋碩朗』 共同文化社 382頁
- 註30 追悼文は『藤村全集第十三巻』（筑摩書房 1967年）の126頁にも収められている。
- 註31 並木張 1998年 『島崎藤村 春雨の旅』 櫟 204～205頁
同書では、喜代野はクリスチャンだったとしている。
- 註32 註3同書 131頁
- 註33 島崎藤村 1968年 『藤村全集第十七巻』 筑摩書房 183頁
- 註34 註3同書 67～68頁
- 註35 註28同書 23頁
- 註36 『茅ヶ崎純水館研究会研究集録2024』（茅ヶ崎純水館研究会 2024年 33頁）に掛川國雄氏が、房全と喜代野のキリスト教信仰に関して、二人とも受洗していないこと、受洗しなかった理由は不明であるが、小山久左衛門と小山家（曹洞宗）への遠慮ではないかと述べている。
- 註37 註3同書 132頁
- 註38 註3同書 138頁
- 註39 註6同書 129頁
- 註40 註6同書 70頁
- 註41 誠修学院 1939年 『教育施設ノ概要』 郡是製糸株式会社 9頁
- 註42 同上 29頁
- 註43 大塚栄三 1931年 『郡是の川合信水先生』 岩波書店 243頁
- 註44 註3同書 131～132頁
- 註45 註6同書 55頁
- 註46 大島英夫 2003年 茅ヶ崎市史ブックレット5『南湖院 高田畊安と湘南のサナトリウム』 茅ヶ崎市 1頁

茅ヶ崎における子どもと生業とのかかわりについて

佐藤 彩*

1 はじめに

毎年、茅ヶ崎市内の小学校(2学期制)では、3年生の社会科単元にて「昔の道具とくらし」(教育出版)を後期後半で扱う。そこで、茅ヶ崎市博物館ではこの期間、学校教育との連携を図るため、昔のくらしを伝える展示会やワークショップを企画している。

令和4年(2022)度はくらしの道具に注目し冬の企画展「昔のくらしの道具」を開催したが、茅ヶ崎市の昔の人々の生業については伝えられなかった。そこで、令和5年(2023)度は「冬の企画展 昔の子どものくらし」として、生業について紹介する展示を企画した。特に、小学校3年生の子どもたちがより親しみを持って展示会を観られるように、自分たちと同世代の昔の子どもたちが生業やくらしの中でどんな役割を担ったのか、生業で使った道具と、当時の写真や記録の紹介を交えながら、伝える内容とした。

展示会の中身を考えるにあたり多様な参考文献に目を通したが、そこで確認できた「子どもと生業とのかかわり」に関する聞き取りの言葉や記録を今後の調査研究のためにまとめ、報告する。

2 本稿における昔の定義について

茅ヶ崎市内小学校が使う教育出版の「昔の道具とくらし」学習指導案では、「祖父母が生まれ育った頃の人々の生活の様子について考え小単元末では学習したことを通して道具の利便性と人々の思いや願いについて発展的に考える」とある。令和5年(2023)現在、10歳の子どもは祖父母はおおよそ、70~80代位であろうと推測される。そこで、展示会の企画当初は、おおよそ70~80年前の昔のくらしを伝えることとした。が、調査をしていく中で、生業と子どもの生活が密接なつながりを持って伝えられているのは、戦前の記述が多く、結果、生業については明治末大正~昭和前期までが中心となった。そのため、ここであげる「昔」とは概ね70~120年ほど前を指す(展示会では家での様子や、学校の様子も道具や写真を通して紹介した。こちらは、60~80年前が中心となったことも申し添えておく)。

また、本稿は聞き取り調査をもとにした記録を参考に執筆しているため、時代や家、生業が専業農業なのか半農半漁なのかによっても内容に相違がみられる。当地における70~120年前のおおよその特徴として捉えているものとご理解いただきたい。

3 茅ヶ崎の生業について

江戸時代から明治まで、茅ヶ崎の人々のくらしは大きくは変わらない。明治10年代末の戸数は茅ヶ崎地区が約750戸、鶴嶺地区約700戸、松林地区約580戸、小出地区約320戸で合計約2350戸であり、このうち、9割以上の生業が農業だった。茅ヶ崎・小和田・柳島の各村には漁師もいたが、ほとんどが半農半漁であり、漁業だけを生業とするものはごく限られた少数だった(註1)。

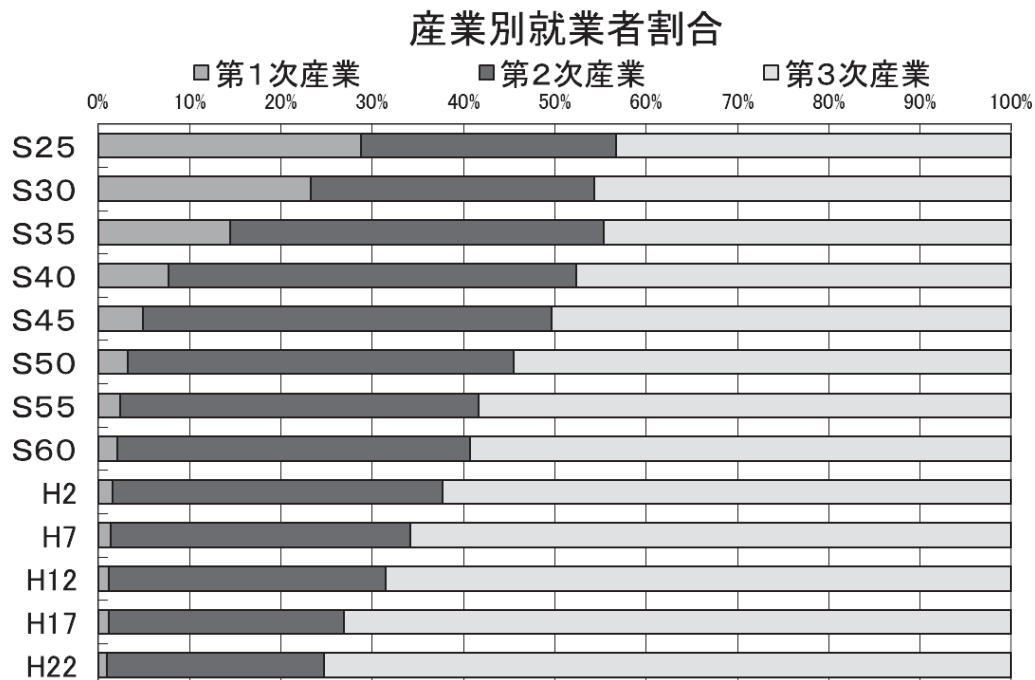
各地域の記録をみると海沿いの茅ヶ崎・小和田・柳島は漁の話と農業にまつわる記述が多く、鶴嶺・松林・小出などでは農業と養蚕の記録が多くみられる。

くらしの変化は社会情勢や経済、地理的要因(当市は東京・横浜に近く、現在は京浜地区の衛星都市としての性格が強い)等が絡むため一概にどれが原因とは言いきれないが、生業と経済の変化がくらし

しにもたらした影響は大きい。また、長く続いた戦争と、昭和 20 年（1945）の終戦によっても、多くの変化が起きている。

例えば明治末には農業従事者は 9 割を超えていたのが、茅ヶ崎の「産業別就業者割合」（第 1 図）によれば、昭和 25 年（1950）には、農業・漁業などの第 1 次産業に携わる人口は 30%に満たない。昭和 40 年（1965）には第 1 次産業の就業者の割合は 10%を切り、製造・建設などの第 2 次産業への従事者が増え、昭和 50 年（1975）には、全体の 50%以上が各種サービス業、医療・福祉、金融、情報通信業に携わる第 3 次産業となっていく。平成 22 年（2010）には第 3 次産業が全体の 70%を超えている。なお、茅ヶ崎市における「産業別就業者割合」については、平成 22 年以降のデータがないため、この情報が最新となるが、戦後から平成にかけての急激な生業の変化を見て取ることが出来る。

第 1 次産業に携わる者が多かった時代は、家内でした仕事や家族が担う仕事も多くあっただろうが、第 3 次産業は仕事自体が外でするものが多い。家族が働く姿を見ることや、生業に関する家族の手伝いが必要となる場面は減ったものと推測する。



第 1 図 中学校地域学習副読本私たちの茅ヶ崎 2019 年版より

4 子どもと生業等のかかわり

(1) 茅ヶ崎の農業と子ども

先に述べたように、明治時代後期、茅ヶ崎にくらす人々の 9 割以上が農家であった。農作物は米のほか、麦、大豆などを栽培していた。当時の農作業は繁忙の程度によって農繁期（おおよそ 5、6、7、10、11、12 の 6 カ月）・農閑期（おおよそ 1、2、3、4、8、9 の 6 カ月）とに分けられ、農繁期は鍬や鋤を使った田起こし、作物の植え付けと収穫などが連続した。農閑期は作物の植え付けの準備や収穫の用意をおこないながら、養蚕や炭焼き、呉服屋の下請けの機織り等の副業をおこなった。

農繁期には、農繁休暇といい、子どもたちも仕事の手伝いをするため、約 2 週間、学校を休業にした。当時を語る言葉から、赤ちゃんの子守りや蚕の世話、田植えなどの手伝いをしていたことがわか

る。普段の手伝いとしては、田植え、稲刈り、麦刈り、秋の終わりに蒔いた麦が霜で浮かないようにする麦踏み、体力を消耗する農作業の合間にとった「おこじゅう」（おやつの意味）とよばれた時間にしたお茶運びの記録が残っている。

なお、農繁休暇は茅ヶ崎固有のものではなく、日本各地でおこなわれていたが、昭和22年（1947）、学校教育法が施行されて以降、次第におこなわれなくなった。

(2) 養蚕と子ども

養蚕は明治時代になると現金収入の手立てとして「どの家も蚕を多くかかっていました」（わたしたちのつるみね／茅ヶ崎市立鶴嶺小学校／昭和54年（1979））とも言われたように、急速に広まった。

急激な発展の背景には、製糸工場であった純水館（大正5年（1916）工場建設、昭和12年（1937）工場閉鎖）が大きく影響している。純水館の生糸は「世界最高級品」として国際市場への進出を果たすが、関東大震災で経営に大きな打撃を受け、やがて工場が閉鎖される。時を同じくして大正の末ごろから養蚕をやめだす家が増え、昭和にはいって戦争が激しくなると、桑畑をつぶして食料となる作物を作ることが優先された。こうして、太平洋戦争を境に、茅ヶ崎では養蚕はおこなわれなくなった。

子どもたちは桑の葉を摘んだり、枝を片づけたり、蚕に葉をやった記録が残っている。

(3) 茅ヶ崎の漁業

茅ヶ崎の漁業は江戸時代からイワシ・アジ・シラスなどをとる地引網が中心であった。とれた魚は浜で行商人や干物・鰹節などをつくる加工業者に販売した。漁師は、網元・船元（漁業経営者）と乗子・引子（ともに漁の従事者）に分かれ、その多くが半農半漁の生活を送った。

明治後期になると、巻網（魚を網で囲み網の底部の袋網に集める）、潜水具によるアワビ採り、カツオ漁などの新しい漁法が導入された。大正期には巾着網（巻網に同じ）や大謀網（大がかりな定置網）などが導入され漁法は大型化していく。ところが、関東大震災が起きたことで、多くの船や網が失われ、海底の地形も大きく変わった。さらに漁獲量の多かったブリの激減や、戦争による人手不足もあり、漁業に従事する人は減少した。

明治～大正の記録によると、南湖や柳島の子どもたちは、学校に行く前に地引網を引き、相応のシロワケ（賃金）が支払われている。豊漁のときは、子どもたちは学校から帰った後に、再び引きに行くこともあった。

(4) 川と子ども

関東大震災までは柳島では川漁で生計を立てていた人もいた。主に小出川や相模川が漁場であり、当時の茅ヶ崎の水産物一覧にはアジ、イワシなどの海水魚にまじってアユやウナギなどの回遊魚があげられている。なかでもウナギは河口にのぼってくる稚魚を浜名湖などに出荷するほどであった。

子どもたちは川でもよく遊んだ。松尾川で釣りをした際には、コイ、フナ、ナマズ、ウナギ、イナ、ハゼ、エビ、ドジョウなどをとった。また、夜に川に仕掛けを沈めて置き、翌朝、捕まえた魚を朝食にすることもあった。

柳島はかつて湿地帯であったことから、小舟を操ることが子どものころに身に付けておくべき素養とされた。

(5) 家と子ども

子どもたちはその地域や年齢に合わせて農業や漁業以外にも様々な役割を担っていた。好むと好まざるとにかかわらず、そうしなければ生活が成り立たなかった。

家の中でも同じことで、どの子も朝夕の部屋の掃除・雑巾がけ、ランプのほやの掃除、石油などを買に行くおつかい、子守りをおこなった。家に赤ちゃんがいなければ、他の家の赤ちゃんや幼児の子守りをおこない、お駄賃をもらった。子守りをするときは、みんな、赤ちゃんや幼児を背中におんぶしたそうである。

また、10～15歳から女の子は、裁縫を習いに地域の上手な人のところへ通った。裁縫ができることは機織りと同じように嫁入りの条件であった。浴衣なら一日三枚仕上げなければ一人前ではなかったと記録にある。

(6)子どもの遊び

子どもの遊びは、身近にあるものを利用し、大勢で遊ぶことが多かった。明治から大正、昭和初期では、いろはかるた、双六、羽根つき、毬つき、あやとり、折紙、お手玉、おはじき、紙風船、めんこ、たが廻し、相撲、鬼ごっこ、かくれんぼ、けん玉、竹笛、風車、竹とんぼ、ピー玉、三角ベースボール、ピンポン、バレーボールなどである。

自然とのかかわりを持つ遊びも多く、例えば、海や川で泳ぎ、貝を拾い、魚をとった。野山では、栗などの木の実を拾うこともあったが、これらは持ち帰って家庭の食料となった。子どもにとっては、採ったり拾ったりすることが喜びでもあり、遊びでもあったのではないかと推測する。

(7)学校と子ども

江戸時代の後半には茅ヶ崎の村々には寺子屋があり、読み書きそろばんを中心とした教育が行われていた。

明治33年(1900)、尋常小学校4年の義務教育制度が無償になると、茅ヶ崎・鶴嶺・松林・小出の四か村で尋常4年制と高等4年制の課程のある学校ができた。ただ、昭和恐慌による生活の困窮化も相まって、昭和8年(1933)の記録によると、尋常小学校(このころは義務教育は6年)を卒業すると同時に家業の農業・漁業を本格的に手伝うことが多かった。

また、他家に住み込み、子守りや大きな農家の手伝いをする子ども、町中の商店、大工や工場に奉公に出る子どもも多くいた。女の子は奉公先で家事作法を習得するという花嫁修業の側面もあった。

昭和22年(1947)、学校教育法が施行され、義務教育は9年(6年間の小学校教育、3年間の中学校教育)と規定され、現在に続く6・3制と称される制度がはじまった。

(8)社会と子ども

年中行事や村祭り、家の祝事などにしても、子どもたちは年齢相応の役割をもった。盆のご先祖様迎えの役割、村祭りの太鼓をたたく役割、供物を配る役割などを子どもが担当する地域は多い。

茅ヶ崎では神様のヨリマシ(神様がよりつくもの)としての稚児の役割、豊漁のときに神様へのお供え物をささげる役割、結婚式で新郎新婦にお神酒を注ぐ雄蝶雌蝶(両親の揃った男女の子どもが担う)の役割の記録が残っている。

現代では子どもは個々の家に属する印象があるが、当時は社会のもの、村の共同体に属する存在であった。

これまで見てきたように子どもたちは幼いころから生業を身につけられるよう家や地域で準備がされ、村の共同体に直接つながった生活をしており、それは人生の大切な訓練になったと推測される。

5 さいごに

子どもと生業のかかわりを中心にみていくことで、人々のくらしの変遷をたどることができた。記

録には「大変な苦勞であった」「休む暇がなかった」「母はとても辛かったに違いなかった」という言葉が散見される。当時苦勞した人々の想いが、現代の人々のより快適な暮らし、効率のよい生活様式に繋がっていったと想像できる。とはいえ、記録からは苦勞だけでない、自然環境や人とのつながりが散見されるし、とくに子どもたちが、社会の中において役割を負うことで、これから大人になっていく過程でのロールモデルに触れていくいい機会でもあったと想像する。昔の子どもと生業のかかわりについて調査し、展示会という方法で、多くの方に知っていただく機会とした。展示会と本調査が今の暮らしを省みるきっかけになれば幸いである。

最後に、参考文献にあるとおり、沢山の市民の方の証言や先達がまとめた記録をもとに、子どもと生業とのかかわりをまとめることができた。貴重な記録が残っていたことで、本稿を書き上げ、展示会をつくることができた。感謝を申し上げる。

※本来ならば、本稿で対象とした「昔」(70～120年前)には戦時下の暮らしも含まれるため、戦時下の暮らしの様子も含めて報告するところではあったが、戦時下の暮らしも交えると中身が多岐にわたるため、あえて戦時下の暮らしの報告は省略した。今後、調査研究が進展した暁には改めて報告をしたい。

* 茅ヶ崎市博物館学芸専門員

〈註〉

註1：茅ヶ崎市史5 概説編

参考文献

- 1：茅ヶ崎市 1980『茅ヶ崎市史3』
- 2：茅ヶ崎市 1981『茅ヶ崎市史4』
- 3：茅ヶ崎市 1982『茅ヶ崎市史5』
- 4：茅ヶ崎市史編集委員会 2003『茅ヶ崎市史現代4』茅ヶ崎市
- 5：茅ヶ崎市教育研究所 1985『茅ヶ崎市教育史』茅ヶ崎市教育委員会
- 6：神奈川県企画調査部県史編集室 1977『神奈川県史各論編5 民俗』神奈川県
- 7：茅ヶ崎市教育委員会 1979『資料館叢書5 柳島生活史』
- 8：茅ヶ崎市教育委員会 1995『資料館叢書11 南湖郷土史』
- 9：あしかび郷土史研究グループ 2000『としよりの話』
- 10：あしかび郷土史研究グループ 2003『としよりの話』
- 11：武蔵野大学社会人類学研究会 1981『茅ヶ崎市堤の民俗』
- 12：茅ヶ崎市立鶴嶺小学校 1979『わたしたちのつるみね』
- 13：茅ヶ崎市立松林小学校 1984『松林のあゆみ』
- 14：柳島自治会・五三会 1990『柳島うつりかわり』
- 15：茅ヶ崎市立小出小学校 1973『100年のあゆみ』
- 16：萩園郷土史勉強会 1993『萩園のうつりかわり』
- 17：『柳島いま・むかし』編集委員会 2016『柳島いま・むかし』
- 18：丸山久子 1984『こどもとことば』 堺屋図書

19：茅ヶ崎市教育研究所 2019『中学校地域学習副読本私たちの茅ヶ崎』

凡例

本稿にて紹介する聞き取りの言葉や記録は、可能な限りそのまま掲載したが、一部読みやすさの観点から要旨のみ示した。話者がわかっているものについては、話者の生年を記載した。また、同じ話者であっても、要素によってわけて掲載した。要素については、下記のとおりとした。なお、ここにまとめた記録の引用元は、表中に参考文献番号としてあらわしたが、その番号は先に挙げた参考文献の付番に対応する。

—農業：農業と子どものかかわりの記録

—半農半漁：半農半漁と子どものかかわりの記録

—川：川と子どものかかわりの記録

川・釣り：川の中でも釣りの記録

—家：生業で区切らず、家の中での様子の記録

—遊び：遊びの記録

—学校：学校の記録

学校・奉公：学校に通っていたが奉公にでるなど、奉公の記録

—社会：社会と子どものかかわりの記録

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
1	農業	家の職業は農業がほとんどで、農作物を作るほかに、どの家も蚕を多くかかっています。学校ではその時期を農はんといい、十日から二週間ぐらいお休みにしたそうです。子どもたちは家で赤ちゃんの子守や、蚕の世話をして働きました。	懐島小学校 (明治25年～ 明治42年)	12	30
2	農業	農家の仕事は家じゅう全員の仕事でした。おじいさんもおばあさんも子どもみんなそれぞれの仕事もっていました。	大正末～昭 和10年ころ	12	66
3	農業	お茶運び／朝昼夜のほかにお茶とか「おこじゅう」の時間があって、午前10時と午後三時ころ、お茶と食事を持って行った。大きいやかんやどびんにお茶をいっぱい入れて、おむすびやおだんごなどを入れたふろしき包みを下げていくのは大変なことだった。	大正末～昭 和10年ころ	12	64
4	農業	野良仕事の手伝い・麦踏み／秋の終わりに蒔いた麦の芽が霜で浮かないように丁寧に踏みつける。大人も子どもも一緒にやった。	大正末～昭 和10年ころ	12	65
5	農業	田植えの時は苗を運んだ。田植えの人の手が空かないようにたくさんの稲束を手に入れて背負ったりして運んだ。	大正末～昭 和10年ころ	12	55
6	農業	麦刈りや稲刈りの束運び、脱穀の時から運び→小さいとげが体についてちくちくする。	大正末～昭 和10年ころ	12	64
7	農業	農繁休暇があったことを覚えています。五月の末から六月の初めにかけて休みがあり、この時は子守りをしたり、野良にお弁当を運んだり、農業の手伝いをしたりしました。小出の農家は養蚕が盛んでした。	明治35年 小出	15	49
8	農業	草履・アシナカは子どもどきに習い、イチッコの作り方を老人に手伝いながら覚えた。	—	6	195
9	農業	春先の農閑期とか雨降りには必ず一家中のアシナカやワラゾーリ・ワラジづくりをした稲わらを打って、十歳くらいの子どもも手伝った。	—	6	369
10	農業	一人前／うちの方は砂っぱたと違って畑がかたいでしょ。だから一日三畝うなえば一人前といわれた。でも三畝うなうにやよっぽど達者でなければうなえなかんべ。あとはツクテ（堆肥）を入れて運ぶイチッコを一日に一荷こせえて一人前ってんだけど、イチッコ、タアラ（俵）、ムシロだの編む縄をコゼナワ（コデナワ）こせえて一番はおせえ（細い）縄。これを一ポ五十七ロ（一房五十尋）ですよ。それをなつて編んでシキ（底）をこせえて、かつぐ紐は三本になって、仕上げ。米なんかも入れてかつぐだけだよ。じゃがたらだの、白菜だのそんなものきり入れないのは大きかったです。	明治18年 西久保	9	55
11	農業	蚕が大きくなって摘み桑ばかりで桑摘みに忙しい。夕食が過ぎても夜食をくれるのは寝られない。一人でくれるのは大変だし、おっかさんに「起きて手伝ってくれな。氷水買ってやるから」とだまされては手伝わされた。八つか九つの時だったね。	明治末～大 正初め	14	108
12	半農半漁	学校に行く前に地引網を引きました。そして学校から帰るとお金（賃金）をもらいに行きました。小遣い一銭でお菓子に十分を買えた時代に、二〇銭から二二銭もらえ、うれしかったです。また、学校から帰っても浜に魚がとれていけば地引網を引きました。	大正4年	8	168
13	半農半漁	台風のととは流れてきた浜水を朝早く起きて拾いに行きました。浜に干し、雨に当てて塩分を抜き、家に持ち帰ってご飯を炊いたり、お茶を沸かしたりしました。薪は値段が高かったので南湖の人々は砂防林の松葉をとってきて燃料にした。小学生のころから縄をなつて藁草履を作りました。	大正4年	8	168

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
14	半農半漁	網は漁があれば一日に何回でもかけるので、食事も決まった時間には食べられなかったですね。そこで弁当をとりに行かせるんですが、漁師の家では年寄りから若い人も家で家中が浜へ出てたから、弁当は漁になれてない者か子どもにとりに行かせたです。「おい、弁当とりに行ってこいよ!」というのと、子どもは引子の家を、一軒一軒集めて歩くんです。昔の漁師の弁当箱というとおひつりの少し小さ目ので、これをメンツウとってたです。メンツウには、ごはんとおかずが八分目くらい入ってましたが、そのころは米のごはんはでなくて、芋だんごかさま芋が主食だったんですよ。その弁当も、座って食べるなんてことはできなくて、網を引っ張りながら立ち立って食べてました。	明治28年	9	75
15	半農半漁	引子の賃金は漁が終わるとその日その日で支払うんです。これをシロワケとっていましたが、その割合は網元が四分、引子が六分というのが普通だったですね。子どもたちも、手伝いに出ていますからシロワケがあったんですが、それは大人の半分と決まってきました。	明治28年	9	75
16	半農半漁	小学校のころ、地引網漁にアルバイトに行った。農繁休暇とか養蚕休みとか云われた学校休みの六月上旬の海は鱈や鱒の季節で地引網の袋がはちきれ、海中で船一ぱいはいかき込む豊漁があった。とれたての魚の手料理の御馳走、沢山のお菓子もいただいたき子供に過ぎた代分(賃金)をもらって、母の笑顔を見ながら帰る時は最高の喜びであった。	—	14	115
17	半農半漁	しみ取りは夏の風物として忘れることのできないものです。子供は引潮の時に手で砂を掘り、しみをととりみそ汁の実にして喜ばれました。	明治38年	14	136
18	半農半漁	平塚市須賀・茅ヶ崎市柳島などでは男女とも八歳ぐらから子守りをしながら、地引があるところ(おかずもらい)に行った。	—	6	475
19	半農半漁	昔の子どもにもは学校に行く前に糞を一把でも二把でも打たせた。早くから家の仕事を手伝わせた。	—	7	123
20	半農半漁	わたしは高等三年まで学校へ行ってましたけど「何時まで学校行ってんだ」なんていわれて、中途で学校よっちゃって船に乗って働いた。自分では船に乗ろうなんて思ってたから自動車の運転を習ったりしてたけれど、どうしてもこういうことになっちゃった。網元の長男だからね。昔は男の兄弟は家にいるうちは、みんな船や網を手伝った。男の子の多いのは働き手があつたよかったです。	明治25年 南湖	9	80
21	川	柳島には川漁で生計を立てている人がいたが、南湖では遊びだった。遊びながらの自己流の水泳も自然に身に付き、いつの間にかそれなりに泳げるようになったものである。	明治～大正	8	146～ 147
22	川・釣り	・コイは、餌にサツマ芋のふかしたものを糞の目にして、一本竿で釣った。	明治～大正	8	146
23	川・釣り	・フナは、細いミミズか、うどん粉をサツマ芋と練り合わせた餌で釣った。またウロさがしをして手づかみで取ったり、網でも取った。	明治～大正	8	146
24	川・釣り	・ナマズは、五〇メートル位の延縄の両端に五〇センチ程度の竿をつけて、それに一五～二〇センチおきに技縄を下げ釣針をつけ、太いミミズを刺し、夕方、川辺にさし込んで餌が水中に沈むようにしておく。翌朝、靴を上げると三〇センチ位のナマズが数匹かかっていた。	明治～大正	8	146
25	川・釣り	・ウナギは、柳島の人が舟で来て、川の中央にモジリをさし込んで置く。餌はタニシをつぶしたものをモジリの中に入れた。南湖では釣竿で釣った。太いウナギは穴がしで取ったが、よく釣れたのは細いものでノーメンコといい、これが釣れると糸をからませしてしまうので急いでカニの穴の中に入れてしまう。	明治～大正	8	146
26	川・釣り	・エビのいるところは水辺の葦の根元で、短い竿で釣糸を垂らして釣り上げる。	明治～大正	8	146

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
27	川・釣り	・イナは川の中で群れをなしてウワ水をのんで泳いでいる。この魚はきわめて敏捷なため釣るのは非常にむずかしい。ウキと釣針の間を一〇センチ位にして一瞬に釣り上げた。また、田仕事のはじまるころは「イナ飛ばし」でもとった。上げ潮にのってきたイナが、田の水口から田の中まで入ってくる。そこで水口に障害物を置いておくと、引潮で海に戻ろうとするイナが、その障害物に当たって飛び上がる。そこに網を張っておいて、受けてとった。	明治～大正	8	146
28	川・釣り	・ハゼはあまり移動しない。竿でミズズを餌にして釣った。	明治～大正	8	146
29	川・釣り	・メダカは田んぼの中や川面を群れをなして泳いでいる。タマヤカゴですくって取って水槽で飼った。	明治～大正	8	146
30	川・釣り	・ドジョウは田の畔道の脇の水溜まりや、小川の雑草の生えている所などにいる。大雨が降って大水が出て道路が水没するようになると、四角のオカメカゴですくって取った。	明治～大正	8	146
31	川・釣り	・シジミヤカタケやタニシは昔は田にたくさんいた。素足で歩くと、足の裏に当たる。カタケは大きいものは一〇センチ位あった。シジミは黒い色をしているので良質であった。川で取れるのは大きく、田の中で取れるのは小さかった。たくさんとれた時には家に持ち帰り、水に浸して泥を吐かせて食べた。	明治～大正	8	146～147
32	家	南湖の子供達は、学校の勉強はそっちのけでよく遊んだ。しかし、家の手伝い仕事も一生懸命行ったものである。	明治～大正	8	145
33	家	子守り／お母さんが夕方方に帰ってくるまで赤ちゃんを背中におんぶしたり、庭で遊ばせた。	大正末～昭和10年ころ	12	64
34	家	お勝手の仕事／女の子は家の中の掃除や食事の手伝い、おふろの火もなまもやめた。	大正末～昭和10年ころ	12	66
35	家	一番つらいだろうなと思った事は、子供が具合の悪い時だった。畑仕事をし、一足早く帰って食事の支度、少々子供が病気で中々見ていてやることは出来なかった。当時医者も少なく、手遅れで亡くなる子供も多かった。子供も可哀想であったが、母親はもともとつらかったと思う。	明治末～大正始め	14	108
36	家	私も学校から帰ると、子守りやら、夕飯の支度をさせられたり、まだ遊びたい盛りなのに、まだ遊びたい盛りに、学校もよく休まされた。	明治末～大正始め	14	108
37	家	浜の弁天様の南に偉人館があり、そのあたりから今の湘南道路の碑が建っている辺り迄ぎっしり松山で、わたしなんか子供頃の頃は、中へ入ったら出られない位でした。でも親の喜ぶ顔が嬉しくて、よくこの山へ松葉かきに行ったね。女は米と燃やし木のあるのが一番気が楽だといったものですよ。	明治末～大正始め	14	106
38	家	味噌作りは、秋の収穫後、まず、大豆を水に浸して柔らかくし、庭先に据えた臨時のかまどの大釜で煮ました。豆が指先で無抵抗につぶれるほど柔らかくなるまで、夜は火を落として次の日にまた、続けて煮ることもありました。(中略) 桶の中の豆をぐちゃぐちゃ踏みつぶすのは桶が壊れたらめんどくさいので、役割でした。	—	17	44
39	家	農家や漁師の家では、倫理的なしつけというより、いやおうなしに家の仕事を子どもたちに手伝わせ、その中でしつけられる面が多かった。子守りのところで述べたように、兄弟が多かったので、五、六歳から下の子守りをせねばならず、一四歳くらいまで子守りをしながら畑の草むしりしたり、朝作りに、学校に行く前に、畑草の虫取り、ご飯炊き、みそ汁づくり、水くみ、煮干しほし、風呂たきなどをさせられた。	—	6	474

No.	要素	記録・言葉	話者の生年 等	参考文献 番号	頁
40	家	十〜十五歳から女の子はみんな裁縫を習いに、村の上手なお師匠さんのところへ通った。裁縫ができることは機織りと同じように嫁入りの条件であった。浴衣なら一日三枚仕上げねば一人前ではないといわれた。	—	6	372
41	家	ふわふわになった綿からこんどは糸をとるんですねえ。まあす(升)をひっくりかえして、その裏でシノマキをつけて、まきつけた綿からよじって細い糸のはしをこしらえてね。撚りをかけながら、細い織維をひき出すようにする。それを糸とり棒にまきつけ、回しながら撚りかけ、糸にして行くんです。そうして取った糸を機で織ったんですよ。みんな家でやっていたんです。もうわたしら一人前になってからは、あんまりやんなかったけどねえ。子供のうちは、ずっとやってきました。糸を取るのには、夜なべに糸とり車でやりました。今のようない電気もなしで、豆ランプ。炉があった、炉のワクの上に車の頭をのせて、手元に豆ランプをのせて、親がやるのを見てました。	明治19年 萩園	9	16
42	家	食事前には板の間の雑巾がけや掃除をさせられたねえ。庭掃きも子供の仕事だった。昔は板の間が多かったから、みんな雑巾がけをやったもんですね。こうして学校へ行く前に掃除やご飯たきの手伝いをしました。学校から帰って来ても手伝いをしました。夕方学校から帰ると、ランプのほや掃除、あれをだいいぶさせられたねえ。石油を入れたり。子守りはみんな子供はやりましたね。家に赤ん坊がいなければ他家の子供の子守りをやりました。お駄賃なんか貰ってねえ。今はおんぶしたりはしないけど、昔はみんな背中におんぶして子守りをしたものでした。	明治19年 萩園	9	27
43	家	ランプの明るさは、灯心の先端の長さで加減した。灯心を長く出して明るくすると、ほやの内側が油煙で真っ黒に汚れた。ほやは毎日磨かなければならなかった。ほやのガラスは壊れやすく、しかも汚れた内側に手を突っ込むには狭いので、手の小さい子どもの仕事であった。ほやのすすは、古新聞紙を丸めて擦るとよく落ちた。	明治〜大正 初め	17	42
44	家	女の人は学校よりも縫ったり織ったりできなくちゃ一人前でないねって、学校へ行ってもそれ位はできなくちゃいけない。縫い物は村の中でちったあよくできる人の所へ、お師匠さんだといって習いに行ったりです。女の人は、繭をほごして機にして着物まで縫わなきゃ一人前でないって、木綿機織ったり絹機織ったり、それも一日一反織らなきゃ一人前でなかった。	明治18年 西久保	9	39
45	遊び	半農半漁の家が多かったので、庭が広く、部屋もひと間が六畳、八畳あるので、春夏秋冬いろいろな遊びを大勢で楽しんだ。	明治〜大正	8	145
46	遊び	明治から大正、昭和初期のころ正月から春にかけては、いろはカルタ、双六、羽根つき、毬つき、あやとり、折紙、お手玉、おはじき、紙風船、メンコ、たが廻し、相撲、鬼ごっこ、かくれんぼ、けん玉、竹笛、風車、竹トンボ、ビー玉、三角ペースボール、ピンポン、バレーボール等をして遊んだ。風揚げは五月。当地では風の加減がちょうど良い。また、昔は松尾川もよい遊び場だった。	明治〜大正	8	145
47	遊び	今の様に遊ぶために造った物はほとんどなかったが、お宮さん(村の神社)がよい遊び場でした。大木がたくさんあるので夏は特に涼しかった。	明治〜大正	14	120
48	遊び	遊びはめんこ・こま・野球などをやりました。	懐島小学校 (明治25年〜 明治42年)	12	29
49	遊び	女の子はまりつき、お手玉、なわとびなどをやりました。男の子は陣取り、竹馬、キャッチボールなどをやりました。	明治35年 小出	15	49

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
50	遊び	子どもの遊びの中には自然とのかかわりを持つものが多い。海や川で泳ぎ、山へ登るなど、また、山の木の葉拾いや草を採ること、貝を拾い魚をとる、それ時代は子どもにとってしなくてはならない仕事であるよりも、採ったり拾ったりすることが遊びである場合が多い。ヤマイチゴ・クワノミ・サクランボ・アケビ等はそのまま自分の口へに入れる場合も多いだろうし、栗などは持ち帰って家庭の食料となることは山菜も魚貝類も同じである。	—	6	887
51	遊び	なわとび、竹うま、陣とり、馬とび、地つくい、凧つくり、凧あげ、水鉄砲、独楽まわし、石けり、独楽まわし、めんこ、水泳ぎ、雪合戦、たがまし、かけっこ、鬼ごっこ、かくれんぼ、蝉とり、ほたるがり、魚つり、鰻とり、魚うち、かいぼり、かるた、すごろく、まりつき、まりつき、おはじき、あやとり、人形つくり、お客ごっこ、羽根つき、風船とばし、あわとばし、折り紙この他にもたくさんある。もっぱら自然を相手に、手作りの道具での遊びが多かった。	—	16	128
52	遊び	遊びは石けり、おはじき、お手玉。	明治35年 小出	15	47
53	遊び	農村では人手の足りない時代でしたから、小学校三、四年生になると「から遊び(一人で遊びに行くこと)はさせてくれません、必ず背中に妹や弟をおんぶさせられるとか、手を引いて遊ばせなければならぬ」を連れて行かなければなりません。でも合間を見ては、親の目を盗んで遊びに出かけます。ですからどの遊びを見ても、その辺にあるもので、その辺のものを利用して、大勢で楽しく遊んだものですが、今の子どもたちの遊びとはだいぶ違う様です。	明治～大正	14	123
54	遊び	子どもの遊びというと、お正月なんか独楽とか羽子板ぐらいいはあったんですね。木でこさえたろくなくもんでなかったです。凧は盛んにあげたね。普段はどんな遊びをしたかな。記憶ないですよ。子供の時だって、学校の時だって、学校から帰ってくれば何か手伝う。	明治24年 赤羽根	9	64
55	学校	一年間成績が悪いと落第した。一クラスで三人くらい落第することもあった。	大正4年	8	168
56	学校	南湖の小学生は弁当を持って行かないで昼休みに家に食べに帰った。サツマイモや芋団子を昼食にしていたからだった。	—	8	82
57	学校	藁草履は大正のころは子どもが学校へ履いて通った。昭和になると、革靴、ビニール靴、ズック靴がだんだんと一般的になった。服装は着物に下駄またはわら草履ばかり。教室でははだし。冬は足袋をはいた。	大正～	8	113
58	学校	お弁当は持っていても、家に帰って食べてもよかったです。お米は貴重品であり、麦ごはんや芋団子を主食にしていた家もあった。麦は冷めるとポロポロになり腐りやすいのでお弁当には向かなかった。クラスの三分の二ぐらいいが帰って食べていた。往復ともみんで走った。	大正14年 生、昭和7年 尋常高等小 学校入学	8	168
59	学校	男女別のクラスで、一年から六年までクラス替えはなく、担任だけが変わった。着物のこと洋服のこと半々ぐらいいだった。女の子はよくゴム段をしたが、その時、どの子も色とりどりの縞模様の毛糸のパンツをはいていた。毛糸は貴重品だったので、母親が再生毛糸やありありの糸で心を込めて編んだのであろう。	同上	8	168
60	学校	集団登校していて、冬の寒い日は朝友達と待ち合わせるときはきき火をしていた。	同上	8	169

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
61	学校	昔は今みたいに学校へ行かなければならないって規則はなかった。ほかのことを覚えていた方がいいっていうんで、行かない人の方が多かったですよ。行きたい人は三年でも五年でも行くって、まあそんなもんで、勘定する位しか行かなかった。私の時代はそういう時代だったですよ。学校は二本松に高等科があったけど、小出小学校の分教場が遠藤にあつたのでそこへ行くです。四年位はそこで、あと高等科へ行く人は小出まで行った。着物に前掛けをしお弁当持ってね。お弁当箱も別にきまなくて瀬戸物や塗りもので何でも詰めていった。お弁当も梅干とおこし位のものでした。	明治18年 西久保	9	38~39
62	学校	学校は尋常小学校が四年までと、高等科が四年で計八年でした。高等科四年を卒業する男はあっても、女はいなかった。そのころは小学校四年までが義務年限だから、たいてい小学校四年までしか行かなかった。そのあと、奉公に行ったりした。学校に行ったりして宿題なんてめったにない。帰って来て勉強なんて誰もやっちゃいない。かえってやっていたらいいと叱られちゃう。	明治24年 赤羽根	9	63
63	学校	学校は一年生から四年生まで、一つの学年は二十名から二十五名、校舎は茅葺屋根、窓には障子。一つの教室で二つの学年が学習。普段着は着物、ランドセルの代わりに風呂敷包みを肩から斜めに背負って学校へ。勉強の中心は算術(算数)、国語(書き方)が一番大切な勉強で、それに修身と言って今の道徳のようなもの、音楽、図画、体育もやった。ノートはなく、石板と言って黒板の小型のものを石筆と言ってろう石を補足して鉛筆のようにしたものを使って書いた。体育は道路でかけ足の練習。	懐島小学校 (明治25年~ 明治42年)	12	27~29
64	学校	雨の日は、廊下でおしくらまんじゅうをしました。でもこれは先生に、怒られました。	明治35年 小出	15	47
65	学校	冬になると、今よりずっと寒かったそうですが、ストーブなどないので、からだをあたたためるには、教室のあいてるところで、おしくらまんじゅうのようなことをしたそうです。	懐島小学校 (明治25年~ 明治42年)	12	31
66	学校	一年に一回、遠足があったようです。目的地は、一、二年生は近くへ、三、四年生は江の島へ行ったそうです。乗り物は使わず、行き帰り歩きました。おべんとうはおにぎりを竹の皮に包み、ふろしきにくるんで、右肩からななめにせおって、はき物は、竹の皮でぞうりを作り、それを履いていきました。	懐島小学校 (明治25年~ 明治42年)	12	31
67	学校	上級生の大山登山/学校を夜の九時に出発し、涼しいうちに登山して、頂上に上り、下山の途中で大山小学校でお昼寝をして体を休め、それから伊勢原、平塚を通って学校には午後三時に帰ってきた。先生も生徒も地下たびやわらじをはいて歩いた。	大正末~昭和10年ごろ	12	67~68
68	学校	何をやるにも裸足が多かった。当時は舗装されている道路と云えば東海道だけでその他は石ころ道ですが、雨や雪の日等は、学校へ行くにも履物が大切で、ふところにしまい、或いは手に持ち、裸足で行きました。	明治~大正	14	123
69	学校・奉公	大正の末から、昭和十年ごろまで、日本の農村の生活は大変苦しいものでした。小学校四年生でやめてしまいう子もいました。家のくらしが苦しいので、学校をやめて働くことになるのでした。友達や両親と別れて遠いよその家に行き、その家の人と一緒にくらしながら、その家の子守をしたり、大きい農家の手伝いをしたりする子もいました。町中の商店や大工さん、工場に奉公に行つて、住み込みで仕事を手伝いながら教えてもらいました。	大正末~昭和10年ごろ	12	62
70	学校・奉公	家によっては子守りを頼むところもあった。小学校を出たところの女の子をやとう。一年いくらで頼む。住み込みで、盆・正月には着物をやる。シキセという。藪入りには家に帰らせる。	—	7	123

No.	要素	記録・言葉	話者の生年等	参考文献番号	頁
71	学校・奉公	昔から昭和初期くらいまで学校が終わると次男以下は大きな商店等へ女は行儀見習いに女中奉公に行った。年に正月とお盆と二度だけ暇が出て家に帰ることができた。正月は十五日から一晩泊りで暇が出た。これを戴入りといって当人は勿論、親達も楽しみにこの日を待った。	～昭和初期	14	98
72	学校・奉公	どの子もよく働いた。「宿題がある」と言っても、「宿題は夜やればよい」と言われた。女子は子守奉公、男子は丁稚奉公に出るために小学校5年くらいで学校をやめるものも多かった。	大正14年生、昭和7年尋常高等小	8	168
73	学校・奉公	一人前にできなきや嫁に行ってもつとまらないって、縫ったり織ったりがいがいっかげんできると奉公に行った。身の修業ですよ。十九か二十歳になれば、たとえ一年でも奉公へ出た。ほとんどの人が皆行かれた。奉公に出なくちゃ、世帯の持ちはじめに姑、小姑のご機嫌が取れないから、何が何でもととめろと親に聞いて聞かせられたですよ。私は、丸三年東京の軍人さんの家にいましたよ。やっぱりきびしかったね。給金はこっちから持ち出す位のもだった。奉公させてもらうだから。ごく困った家の人は百姓奉公とか、子守り奉公とか、百姓の女中に行ったりした。そういうのは給金をもらえたから。	明治18年西久保	9	39
74	学校・運動会	運動会は男女青年団、婦人会、消防団、青年訓練所等、一緒に行われ全村挙げての楽しい行事でした。	昭和初年	15	40
75	学校	卒業期の小学校を概観すると中等学校入学者及高等小学への向学者は極めて少なく義務教育を終えて痛々しくも世間へ巣立つ児童が非常に多い、深刻な家庭生活の影響たる所と見られている。(昭和八年三月二五日)	昭和8年	5	296
76	学校	茅ヶ崎町本年度義務教育を終るものは五百四十八名にて中学校入学志望者は、茅ヶ崎男二十六、計五十二、鶴嶺男七、女〇、松林男七、女四、計十一、合計七〇名にて高等小学へ進むもの男約二五名、女一七〇名、計三九五名、義務教育だけで終わるもの約八〇名を示している、昨報藤沢町と比較するに一般に都会地の児童は中等教育に進出者多く農村部落は高等小学を終えて実直なる農民として進むもの多く、茅ヶ崎町の如く義務教育にて終る者比較的多きは漁民の子弟であろう。	昭和9年	5	296
77	社会	一年中みんな忙しく働かなければなりませんから、お正月だから、お正月だの、ちんじゅ様のお祭りなどは本当に楽しい行事でした。七月十四日のみそぎ祭りに全地区の子どももみこしが校庭に勢ぞろいし、子どもたちはねじり鉢巻きをして大人に負けないくらい元気にかつぎました。	大正末～昭和10年ころ	12	67
78	社会	七月十五日 浜降祭 十三、十四、十五、十六日と長い野良浜止メ正月である。戦前迄十四日には子供の神輿が小学校へ勢揃いした。七月に入ると子供達が麦藁で神輿をこしらへ棒を通してかついで遊び、お祭りの日を待ちこがれたものである。	—	14	99
79	社会	浄土宗の西蓮寺のお十夜の縁日は毎年十月七、八、九日の三日間催され「南湖のお十夜」として大変有名だった。八日は本堂でまた法要があり、檀家の若い男の子と女の子のお稚児に出た。	—	8	148
80	社会	お嫁さんが着いて門を入る時、お酌に頼んだ十歳か十一歳ぐらいの男の子と女の子に、わらで作った松明を持ち火を付けて錠口の左右に立って貰う。その間を囊と傘(傘は蛇の目でも何でもよい)をさしかけ、その下をくぐって家に入ってくる。お嫁さんが錠口に入れば火は消してしまう。玄関から入り、式が始まるまでのひと時、裏の鞆戸で休んだですよ。みんながくたびたろうってのぞきにくるし、村の人たちがみな大勢で見に来て、障子なんて穴あけちゃってね。昔はにぎやかだったですよ。	明治18年、明治39年西久保に嫁ぐ	10	6

No.	要素	記録・言葉	話者の生年 等	参考文献 番号	頁
81	社会	花嫁が婿家に着くと十二歳くらいの男の子と女の子が藁束の松明を持ち、家の入口の両側に立つ。嫁は松明の下をくぐり、さらに差しかけられた傘か、菅笠の下をくぐる。これは水と火を乗り越えて、この家のために尽くすということを表している。(略)続いて三三九度の盃が交わされる。入り口で松明の儀式をした男の子と女の子がこの三三九度の盃に酒を注ぐ。この二人の子どもを「男蝶女蝶」という。	一	8	119
82	社会	お月見/旧暦の九月十三日は十三夜といい、この日は十三個の団子と、十五夜の時と同じようなものを供えます。子供のころ、外に売っているものを取ってはいけませんが、月に供えてあるものは盗んでも良いといわれて、よその供え物を取りに行ったりしたことがあります。	明治24・27 年、赤羽	10	38
83	社会	昔は一ヶ月に何回もいろいろなお日待ちがあった。「今日は、何のお日待ちをしますから」って言ってね。子どもや、おばあさんが、オサンゴ(お散供)を集めに歩いたもんだね。オサンゴは三合ずつ米を集めたねえ。オサンゴの袋にいれてね。オサンゴをもらって歩いて、そういうことをしたねえ。	明治19年 萩園	9	32

堤貝塚出土の注口土器

三戸 智也

はじめに

本稿では、市内堤地区に所在する堤貝塚の概要、注口土器が出土した調査の概要を報告したのち、注口土器の内容について報告する。注口土器については本稿の執筆にあわせて実測・観察・写真撮影を行い、実測図及び写真を掲載した。本注口土器は茅ヶ崎市博物館のサマリー展示に常設展示されている資料であり、来館時には本物を見ることができる。

なお、本稿を執筆するにあたり大村浩司氏、澤村奈穂子氏、土屋健作氏に資料の提供、ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

1 堤貝塚の概要

(1) 遺跡の位置と立地

堤貝塚（以下「本遺跡」という）は茅ヶ崎市の北部に位置し、地形的には相模原台地の南端に立地する。本遺跡の周辺は谷と尾根が入り組んだ地形を呈しており、標高 27 m～44 m の複雑に開析された丘陵地形を示している。そのうち本遺跡が所在するのは、北側に向かって緩やかに傾斜している平坦面で、貝塚は東西に位置する傾斜面を中心に形成されている（第1図）。

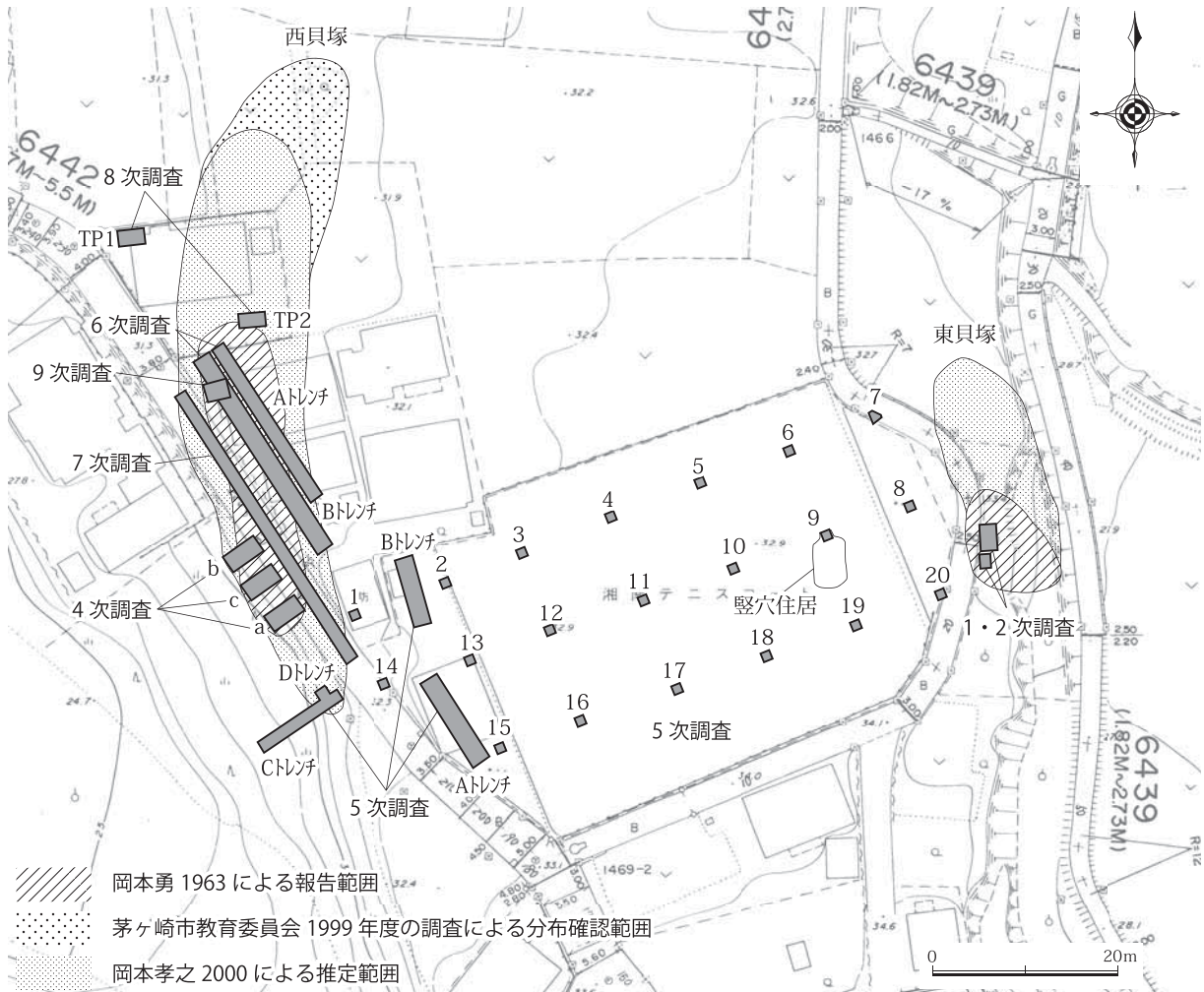
本遺跡はこれまで9回の調査が行われており、縄文時代後期の竪穴住居址や貝塚が発見されている（第2図、第1表）。貝塚の範囲については岡本勇の調査（岡本 1963）、茅ヶ崎市教育委員会の調査（大村 2000）、岡本孝之の論考（岡本 1994）によって、西貝塚が南北約 70 m、東西約 14 m、東貝塚が南北約 26 m、東西約 10 m と推定されている。貝塚はダンベイキシヤゴを中心にハマグリ、カキなどが見られ、堀之内 1・2 式の土器が出土している。また、東・西貝塚間の平坦面には貝塚と同時期の縄文時代後期の集落が営まれたことがわかっている（岡本 1963）。なお、貝塚については平成 4（1992）年 2 月に西貝塚の一部が神奈川県指定、平成 27（2015）年 6 月に東貝塚の一部が市指定史跡になっている。



第1図 堤貝塚位置図（1/10,000）

2 調査の概要

次に記す内容は平成12(2000)年12月発行『第11回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』に掲載された大村浩司「3. 堤貝塚の調査」を引用・参考としたもので、図面については一部加筆修正した。調査の詳細については原典を参照されたい。



第2図 堤貝塚の調査地点と貝層ブロック推定図 (1/800)

第1表 堤貝塚の発掘調査等一覧

次数	調査年	調査原因	調査主体	調査地点
1	昭和13(1938)年	—	赤星直忠	東貝塚
2	昭和14(1939)年	—	赤星直忠	東貝塚
3	昭和20(1940)年代?	—	鎌倉中学校(現鎌倉学園)	西貝塚
4	昭和34(1959)年	—	茅ヶ崎市教育委員会 ・茅ヶ崎郷土会	西貝塚 abc 発掘区
5	昭和37(1962)年	確認調査	岡本勇・茅ヶ崎市教育委員会	東貝塚(A・Bトレンチ) 平坦部(ボーリングピットNo.1~20)
—	昭和53・54(1978・1979)年	分布調査	岡本勇	
6	昭和54(1979)年	学術	岡本勇	東貝塚A~Dトレンチ
7	昭和57(1982)年	下水道	茅ヶ崎市教育委員会	東貝塚
8	平成11(1999)年	個人専用住宅	茅ヶ崎市教育委員会	TP1・2
9	平成12(2000)年	個人専用住宅	茅ヶ崎市教育委員会	TP1

(1) 調査地点

今回報告する注口土器は、平成 12 (2000) 年 1 月 18 日～ 22 日に行われた個人専用住宅建築の浄化槽設置に伴う発掘調査(第 8 次)で出土した。調査地点は西貝塚の範囲にあたり、県指定範囲より北側の平坦面に位置する。現地の標高は約 32 m を測る。

(2) 調査結果

調査は浄化槽設置範囲に T P 1 (1.7 m × 2.7 m)、貝層の広がりを確認するために敷地の南東部に T P 2 (1.4 m × 2.7 m) を設定して実施した。

調査の結果、T P 1 は地表下 50cm までは客土でそれ以下から本来の土層が確認された。IV—1 層からは完形の注口土器(本報告資料)が出土し、それ以外にも多量の縄文土器が出土した。注口土器付近からは礫も出土したが、これらに伴う遺構については明瞭に判断しえなかった。

T P 2 では地表下 55cm で貝層ブロックを確認した。貝層ブロックは、35cm ～ 60cm の厚みを有し、ダンベイキシャゴを中心としてハマグリ、カキなどが見られた。貝層は調査区の西側を中心に広がっていたが、これは東側部分が後世の遺構と現代の攪乱によって壊されたもので、本来は全面に広がっていたと推測される。貝層ブロックからは土器のほかに貝輪、釣針などが確認された。

3 注口土器の観察と位置づけ

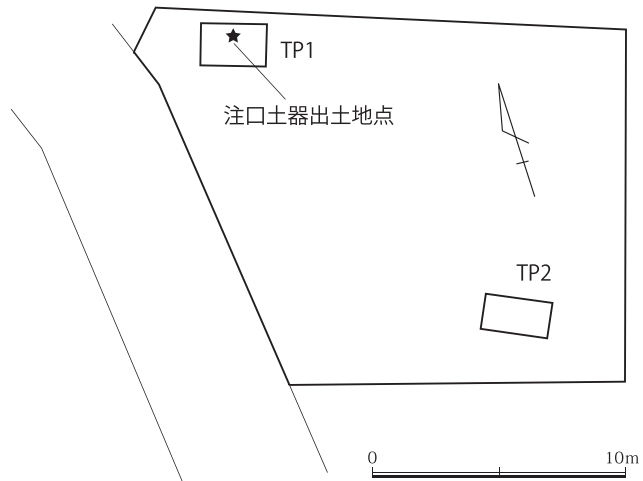
本資料は堀之内 2 式の注口土器である(註 1)。わずかに表面が剥離している部分があるが、ほぼ完形の資料であり、注口土器の出土例としては稀有である。以下では、本資料の観察を通して特徴を記述するとともに製作技術の一端を読み取ってみたい。

(1) 資料の特徴(第 4 図、写真 5)

当該期の注口土器については秋田かな子氏による整理がなされている(秋田 1994)。したがって、本稿では資料の基本的な観察項目と各部位の呼称などについて秋田氏の論考を参考とした。

器形は底部が張り出し、体部がそろばん玉状を呈する形状である。体部の屈曲(体部最大径)は低い位置でそこから内湾しながら立ち上がり頸部に至る。窄まった頸部から口縁部へは外反気味に立ち上がり、口端部で肥厚する。体部の最大径は直径 14.2 ～ 14.5cm とほぼ正円である。輪積みの幅は接合部の盛り上がりや水平方向のヒビから 1.5cm ～ 3cm とみられる。器厚は 5mm 程度と薄い。把手は連繋部が口頸部の無文帯に装着され口端部とは離れている。把手が口縁部成形後に装着されたのか、把手装着後に口縁部が付け足されたのかは不明だが、上位装着部には粘土紐が巻きつけられる。注口部は体部最大径のやや上に装着され先端は口縁部より約 1.5cm 低い位置に留まっている。

把手は下位装着部の幅が広い正面観三角形を呈する。連繋部及び正面基部には沈線、正面基部上位には円形突起が貼り付けられる。口端部は把手と同様の円形突起が前後に貼り付けられその間に 3 条



第 3 図 調査区位置図(1/300)

の沈線が配される。沈線は中央が4～5mmと太く内外が2mm以下と細い。中央の沈線は2本の沈線を隣接して引くことで太い沈線を表出している。円形突起の中央には円孔を擁している。

文様の施文域は頸部から体部上半に認められ、口縁部と体部下半は無文である。文様は細密な数条の沈線によって描かれる。体部の文様は、注口部を正面にその左右と裏の各面において体部屈曲部に据えられた渦文を起点に、その周囲に弧文、主軸方向に渦文が配される。渦文を連絡する副軸方向の沈線によって施文域の上下が区画される。渦文は注口部と注口部左右の2面は右回り、裏面は左回りで描かれている。弧文は3～5条の沈線を1単位として2単位が配される。沈線の幅は1mm以下で沈線間の幅は一定しない。

器面は平滑でよく調整されている。ミガキの痕跡は器面全体に見られ、体部下半・頸部が横位、施文域は沈線間無文部の長軸に沿って、注口部は筒の弧に沿って行われている。内面は完形資料ゆえ観察できなかった。底面は無文で網代痕などはない。器面には土器焼成時に付着した黒斑が部分的に見られるが、使用に際して被熱を受けた痕跡はない。胎土には0.5mm以下の礫が少量含まれる。

(2) 製作技術の検討

上述した痕跡は、土器製作者が土器製作の実践の中で知識を生成し、作業レパートリーを発展させ、省察し、枠組みを再構築したプロセスの結果である(三戸2020)。したがって、ここでは観察された痕跡から土器製作者の試行錯誤ともいえるそのプロセスについて検討してみたい。

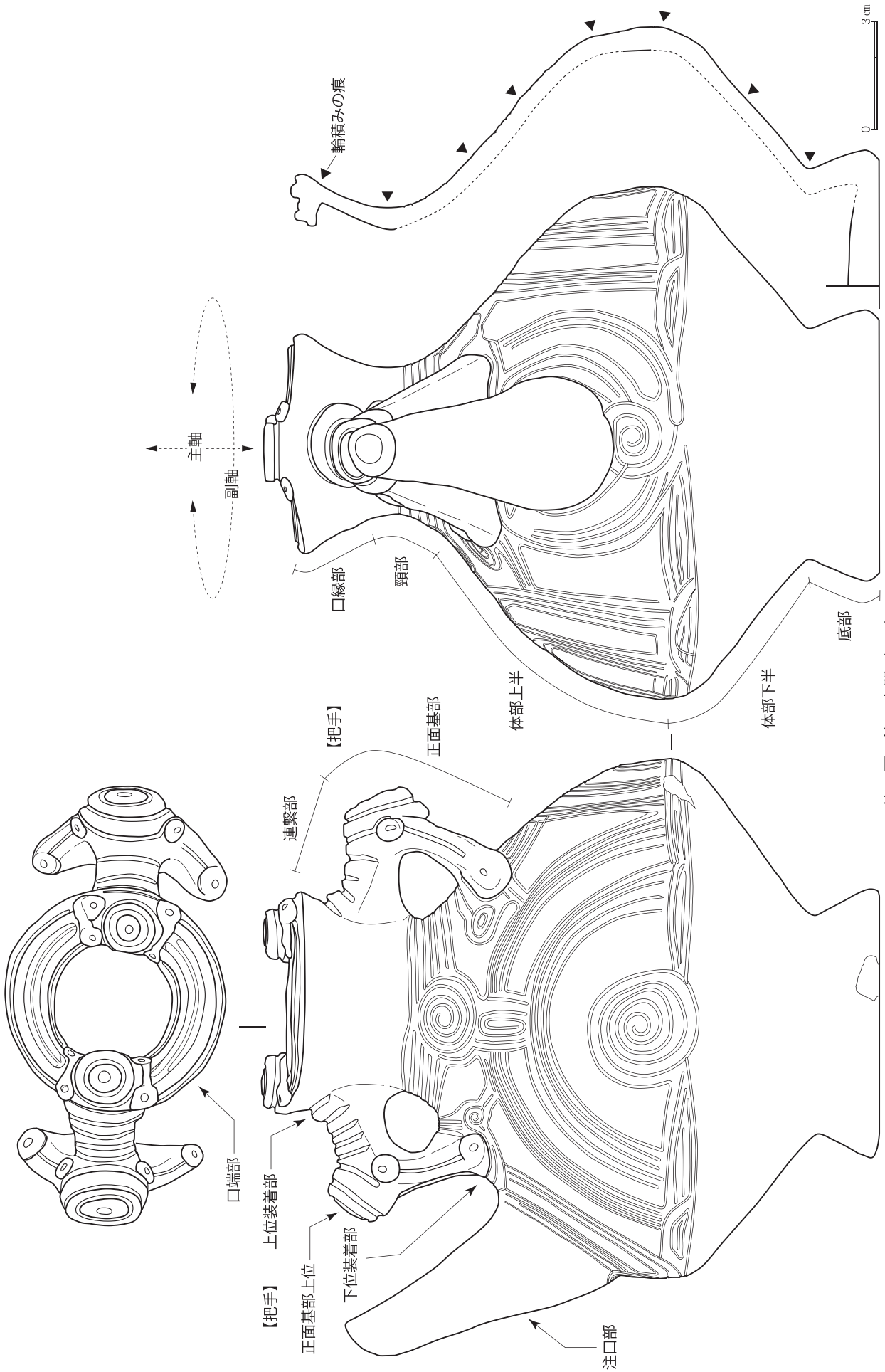
本資料の素地は5mm以下の礫が少量含まれ、極端に粒の大きいものはない。素地が精錬された可能性がある。土器成形時においては、2cm前後の粘土紐をもって輪積みされたようである。器厚は薄く、一定である。ここには土器製作者の「適当な厚さになるまで」(大西2007)の感覚と身体所作が内在していることが読み取れる。

装飾は、文様の切り合いから把手や注口部をつけた後に沈線による施文が行われた。また、体部上半の沈線は、わずかに残る沈線の切り合いから、①渦文②弧文③横位区画文の順に行われ、注口部の裏面が最後に仕上げられた可能性がある。各面の中心にある渦文から描くことは、文様構造を決定する施文順序の優位性を示す可能性がある(後藤1997)。

1本の沈線が引かれる方向は大部分が捉えられなかったが、渦文においては沈線内の礫の引きずられ方向から外から内に描かれたようである。また、沈線間の距離が一定でないため1本ずつ引かれたと判断される。さらに浅い沈線であることから器面が一定程度固結した状態で施文されたと考えられる。沈線による施文は器面の乾燥具合という時間制限のなか沈線の引き直しができない状態で薄い器壁を貫かないよう絶妙な力加減で意匠を描いていたことが読み取れる。また渦文や弧文など細密な沈線モチーフが重複しないよう描いていることから丁寧な作業を心掛けていたのだろう。

文様帯の無文部のミガキについては、沈線を避けて行われたことが窺われたが、ミガキの作業によって沈線文が損なわれることが意識された結果であろうか。また注口部や口縁部・底部のミガキは縦方向(弧に直交する方向)で施すのではなく、一貫しての弧に沿った方向であり、律動的でパターン化した動作の存在が窺われる。

上述した検討項目については、複数の注口土器を調査することで製作者に迫ることができる。例え



第4図 注口土器 (2/3)

ば土器製作に不可欠な素材を扱う知識でかつ同じような状況が多く発生し、作業横断的で、感覚的で、パターン化するようなレベルの痕跡が多く出土する土器に観察される場合は、他者から得た知を示すとともに、知を得るために複数の土器製作者が関与する土器製作の場が存在した可能性が高いと推測される。一方、痕跡は部分的に共通するが、現れ方が異なる場合にはみずから発展させてきた知を示す可能性がある。共通項がなく全く新しいものである場合、前者が既存のレパートリーの新しい組み合わせなどである程度効果を予期しながら作り上げるような探究が行われた可能性があったのに対し、全く意図しないことから好ましい状態が生まれたような探査的な探究を行った可能性がある。

以上、堤貝塚出土の注口土器について報告した。堤貝塚は保存状態がよく相模湾岸において数少ない貝塚の一つであり、市内の行谷貝塚、久保山貝塚、遠藤丸山貝塚とともに縄文時代後期における地域の動態を明らかにするうえで重要な遺跡である。今度とも恒久的な遺跡の保存、積極的な活用を図っていききたい。

註1 本注口土器は大村 2000 による報告で加曾利 B 式土器とされていたが、頸部を有し口縁部と把手の位置関係、正面三角形の把手、集合沈線による文様表出などから堀之内 2 式後半の土器と判断した。なお、1962 年に実施された第 5 次調査では堀之内 2 式土器が床面から出土した竪穴住居址が発見されており、西貝塚は堀之内 I 式土器の時期から II 式土器の時期に営まれ、東貝塚は堀之内 II 式土器の時期に形成されたとされている。加曾利 B 式土器に伴う竪穴住居や貝塚は確認されていない。

引用参考文献

- 秋田かな子 1994 「加曾利 B 1 式注口土器の成立（予察）—王子ノ台遺跡出土の注口土器から—『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 秋田かな子 2008 「加曾利 B 式土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 我孫子昭二 2008 「注口土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 大西秀之 2007 「フィリピン・ルソン島山地民の土器製作技術の一考察—語りえぬものの民族誌に向けて—」『土器の民族考古学』同成社
- 大村浩司 2000 「3. 堤貝塚の調査」『第 11 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
- 大村浩司 2001 「7. 堤貝塚の調査」『第 12 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
- 岡本勇 1960 「堤貝塚の調査」『郷土茅ヶ崎改巻 2』（1973 『郷土茅ヶ崎 上巻』に再録）
- 岡本勇 1963 『堤貝塚』茅ヶ崎市文化財資料集第二集茅ヶ崎市教育委員会（1981 『茅ヶ崎の遺跡』茅ヶ崎市文化財資料集第八集に再掲）
- 岡本勇 1981 「考古学的にみた茅ヶ崎」『茅ヶ崎市史 3 考古・民俗編』茅ヶ崎市
- 岡本勇 1981 「石器時代の文化」『茅ヶ崎市史 4 通史編』茅ヶ崎市
- 岡本勇 1981 『堤貝塚試掘調査報告』茅ヶ崎市教育委員会
- 岡本勇 1998 「茅ヶ崎を掘って」『文化資料館調査研究報告 6』茅ヶ崎市教育委員会
- 岡本孝之 1994 「第三の堤貝塚」『湘南考古学同好会会報 54』
- 後藤明 1997 「実践的問題解決課程としての技術—東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作」『国立民俗学博物館研究報告』22(1)
- 茅ヶ崎市教育委員会 1981 『昭和 54 年度茅ヶ崎市遺跡分布調査報告（小出地区・鶴嶺地区）』
- 茅ヶ崎市教育委員会 1981 「堤西貝塚の応急調査」『昭和 57 年度茅ヶ崎の社会教育』
- 茅ヶ崎市教育委員会 1985 「市内遺跡分布調査」『昭和 60 年度茅ヶ崎の社会教育』
- 堤貝塚資料整理グループ 2000 『神奈川県指定史跡堤貝塚』茅ヶ崎市文化財資料集第 13 集 茅ヶ崎市教育委員会
- 岡本孝之 2000 「堤貝塚（付編 堤貝塚調査図の作成と巡検）」『神奈川県指定史跡堤貝塚』茅ヶ崎市文化財資料集第 13 集 茅ヶ崎市教育委員会
- 三戸智也 2020 「苗場山麓における縄文土器製作技術の検討」『苗場山麓ジオパーク研究集録』第 2 号
- ドナルド・A・ショーン 2007 『省察の実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』柳沢昌一・三輪建二訳



写真1 TP2 貝層範囲



写真2 TP1 注口土器出土状況



写真3 TP2 貝層堆積



写真4 TP2 貝輪出土状況



写真5 注口土器

高座郡家の区画範囲を考える

加藤 大二郎

1 はじめに

国指定史跡下寺尾官衙遺跡群を構成する高座郡家は、史跡指定後から今日までに規模の差はあるものの、18回の調査が行われており、調査成果が増えるとともに、新たな課題がうまれてきた。ここでは、現在の発掘調査成果のみで予測が難しい郡家の範囲について、昭和2年の古地図と一部の調査成果から考察する。なお、近年の調査成果については整理作業中であり、一部報告書未刊行であることから、正式な遺構の見解は報告書刊行の際に変わる可能性があることをご理解いただきたい。

2 下寺尾官衙遺跡群とは

茅ヶ崎市で見つかった約1300年前の役所や寺の遺跡で、平成27年3月に我が国の歴史に欠かせない遺跡として、国から史跡に指定された下寺尾官衙遺跡群は、指定されるまでの発掘調査によって、役所には当時の税を納めるための正倉という高床式倉庫が4棟以上並んでいること、郡庁院として正殿、正殿を囲む東脇殿、後殿が存在すること、郡庁院と正倉の間に館(たち)・厨(くりや)と想定される建物群が存在していることがわかっている。これらの施設が存在する範囲を高座郡家としてとらえてきた。

高座郡家の南西に下寺尾廃寺(七堂伽藍跡)と呼ばれる郡家と同時期の寺が見つかっており、今から46年前に初めて発掘調査が行われ、寺院跡であることが明らかになった。その後主要な建物や寺院の範囲を明らかにするための調査を行い、約80m四方の塀に囲まれた2つの建物址を見つけている。2つの建物は金堂と講堂と推定されている。

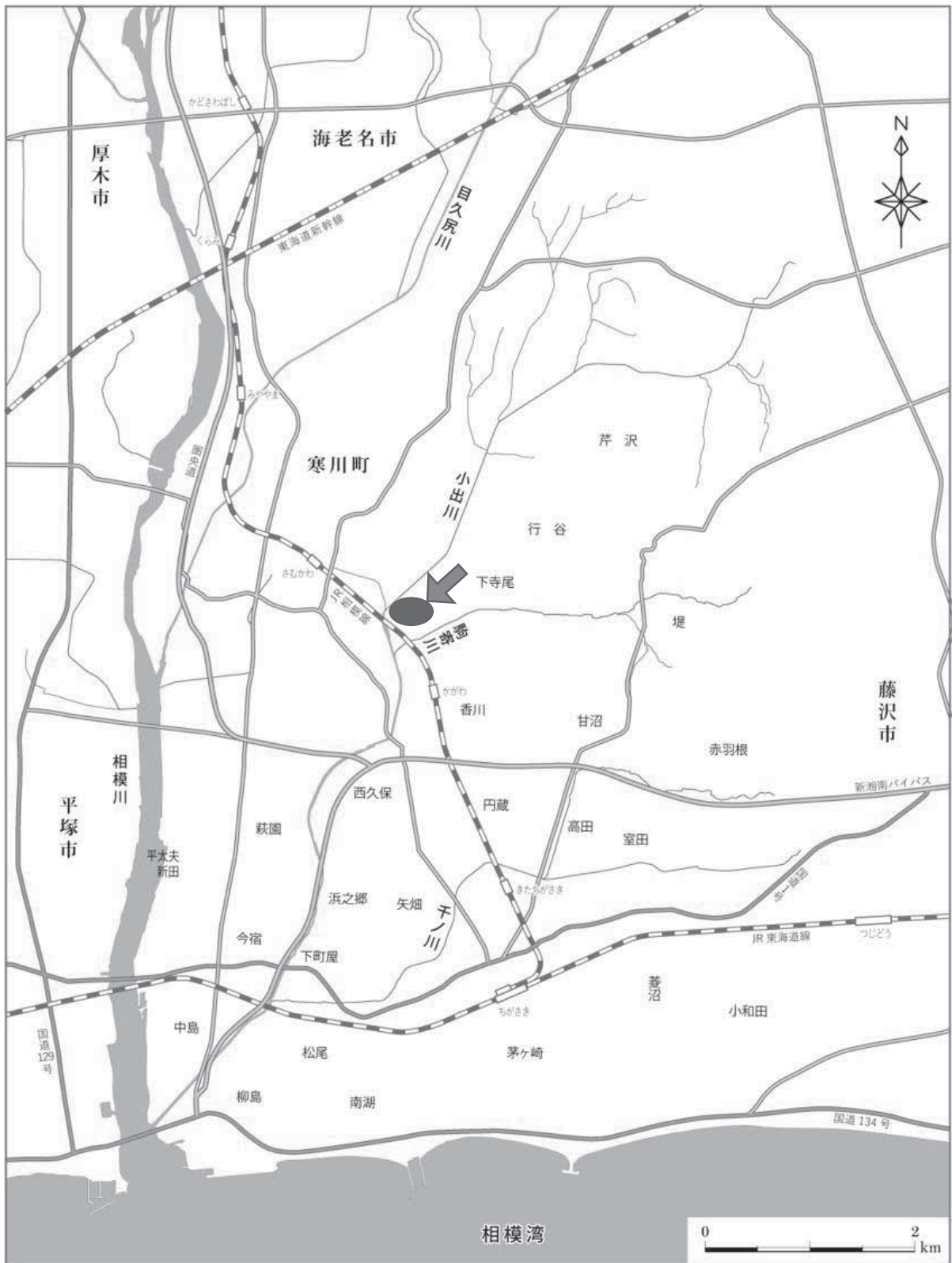
高座郡家と下寺尾廃寺の周囲には小出川と駒寄川が流れており、郡家・廃寺の北東から南西に流れ、相模川の河口付近で合流する小出川、東から南西に流れ小出川に合流する駒寄川に囲まれるようにこれらの遺跡は存在している。

廃寺近くで見つかった駒寄川の旧河道からは、祭祀の痕跡が多く見つかっており、祭祀場と考えられ、遺跡のすぐ西側で小出川が屈曲する部分では、川の内側に水を引き込み、船を川岸に着けるための川津が見ついている。川津の近くにも祭祀を行った場所や、荷ほどき場であったと考えられる建物群が見ついている。

下寺尾官衙遺跡群は、役所、寺、祭祀場、船着き場が限られた範囲にそろって見つかっており、地方官衙の様相をうかがうことのできる貴重な史跡である。

3 史跡指定までに把握した高座郡家の様相

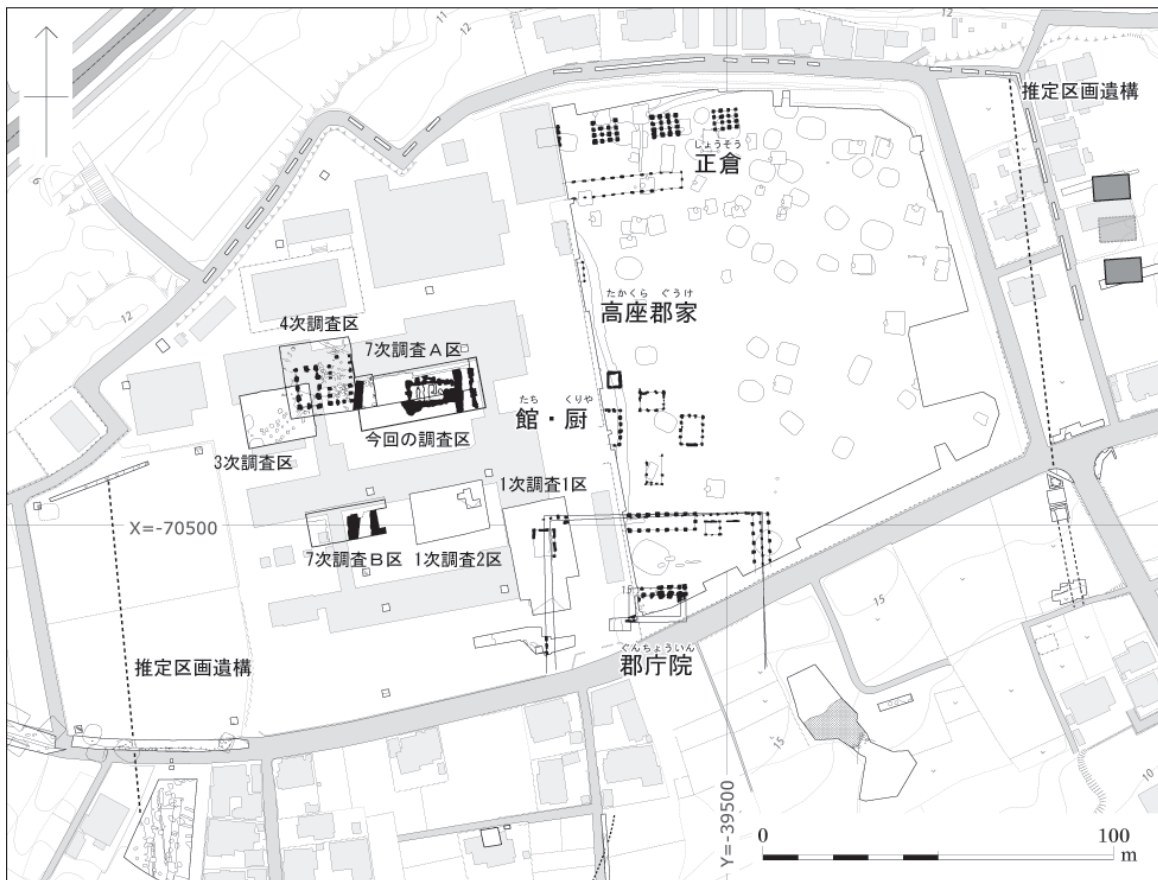
高座郡家は、相模国高座郡の郡家に比定されており、高座は現在「こうざ」と読まれているが、文献でみられる万葉仮名から、古代には「たかくら」と読んでいたと考えられるため、「たかくらぐうけ」と呼称している。



第1図 下寺尾官衙遺跡群の位置



第2図 下寺尾官衙遺跡群の主な遺構



第3図 高座郡家で発見された古代の主な遺構

県立茅ヶ崎北陵高等学校の建て替えを目的として行われたグラウンド部分での発掘調査によって、郡家が存在することが明らかになっており、グラウンドの南西端において、郡家の中心に正殿、正殿を取り囲む東脇殿と後殿が確認された（第2図A地点）。脇殿や後殿と同様の位置に塀と考えられる柱列が確認されており、西脇殿が存在すると思われる位置には北陵高校の校舎が存在し（調査当時）、正殿の南側は道路が存在している。

グラウンド北端には東西に4棟正倉が並んで発見され、正倉の南側には東西に長い長大な建物が見つかった（第2図B地点）。

正倉と正殿の間には建物址がまとまっており、館や厨が存在していたと推定された（第2図C地点）。

グラウンド南東の道路の交差点における歩道の整備の際に行われた歩道部分の発掘調査や、グラウンド北東部の道路における発掘調査によって発見された溝状遺構（第2図D地点）が郡家の東側を区画する塀の役割を持つものと想定され、正殿と東側区画遺構の距離と正殿から西側にほぼ同距離の位置に、東側より遺構の幅や深さの規模は小さいものの、溝状遺構が確認され、西側の区画遺構と推定された（第2図E地点）。

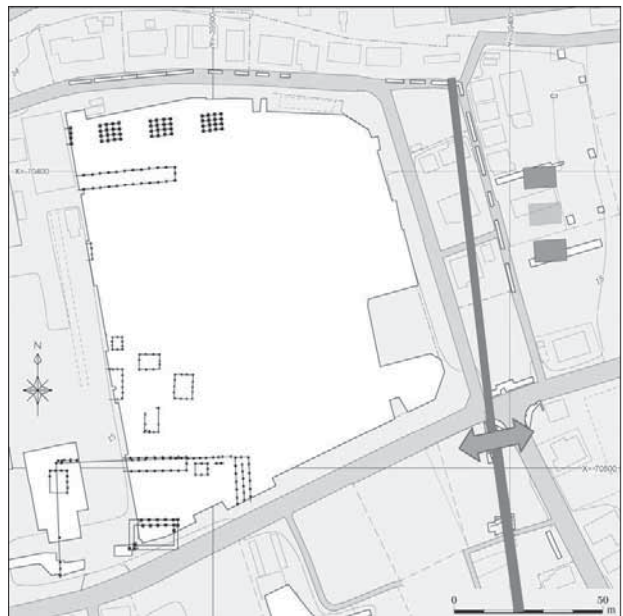
南側、北側の区画遺構として明確なものは見つっていない。

4 近年の調査によりわかってきた郡家範囲に関連する可能性のあるもの

- 1 郡家の立地する高台の地形の高台から低い土地にかけて、郡家東側の南部が1707年以前に奥行き約1.5m、高さ約20cmの階段状に約50mの距離の間を掘削されている可能性を確認
- 2 郡家推定東側区画遺構より外（東側）において、古代の版築遺構が複数存在（第2図F地点）
- 3 郡家推定東側区画遺構の出入り口部を発見（第2図G地点）
- 4 郡家推定東側区画遺構より外（東側）において、区画遺構と近似した溝状遺構を発見（第2図H地点）

5 近年の調査成果から推測されること

これまで高座郡家の見つかった地形（遺跡）からは、郡家廃絶後の内容は近世以降の耕作が大半で、中世の遺構や遺物はほとんど見つかっておらず、平安時代の遺跡内容も決して多くはない。そのような歴史背景のある地域で、地形を階段状に掘削する行為は、郡家廃絶後から近世前半までに行われる可能性はどれ程あるのだろうか。地形南東部の調査成果が今後蓄積されることで解決されることを期待したい。



第4図 区画遺構と出入り口部



第5図 東側推定区画出入り口部発見時の鳥瞰写真

古代の版築遺構は正倉の下部構造である可能性があり、これまで想定していた郡家の範囲の外である東側に正倉群が存在する可能性が高まってきた。その場合、発見された出入り口部は、郡家の中と外を行き来する空間ではなく、正倉域との行き来のための空間だったであろうか。

それでは、ここまでの東側区画の仮定を信じた場合、本来の東側区画はどこにあたるのであろうか。新たに発見された遺跡（地形）南東部の区画遺構の可能性のある溝状遺構の位置と遡ることができる限り古い地図であった昭和2年に製図された小出村の地図から考えてみたい。なお、小出村とは茅ヶ崎市と藤沢市に合併された現在の茅ヶ崎市北部の村である。

6 区画遺構を地図から読み解くということ

茅ヶ崎市内では、円蔵や西久保、矢畑、浜之郷などの地域の遺跡調査で、現況の道路と並行、あるいは重複する溝状遺構がしばしばみられる。これらは、近世や近現代まで土地の区画を溝状遺構によって区画していたものが、道路整備に伴い、現在ではみることができなくなっているものと考えられる。これは、茅ヶ崎市が戦後に道路整備を再度大きく見直すほどの必要性がなかったことにより、古くからの土地区画を引き継いでいるものと考えられる。

円蔵などの地域では、発見された溝状遺構が明治時代以前の絵図に載っていることもあり、かつての区画と推定することができることがある。

また、茅ヶ崎市内の遺跡は分布調査により遺跡範囲を細分し、周知化した際に、地形的に同じような遺跡内容が続くと思われる場合には、大正時代の字境で遺跡を便宜的に分割して呼称（例：上ノ町遺跡、下ヶ町遺跡、明王ヶ谷遺跡）しており、字範囲が広い場合にはさらにA、B、C…と分割（御屋敷A遺跡、御屋敷B遺跡）している。下寺尾官衙遺跡群は高座郡家が所在する西方遺跡と、廃寺周辺を七堂伽藍跡、祭祀場周辺を北B遺跡として周知化している。なお、周知化した際には、西方遺跡

は台地地形の概ね平たい高台の範囲としており、元々は現在の道路で分割して西方A遺跡、西方B遺跡、西方C遺跡と呼称していたが、史跡指定と同時期に西方遺跡として統合している。

今回遡れたのは、昭和2年に製図された小出村の字毎に分割された地図である。大日本市町村地番入地図刊行會が刊行したもので、地図の中には住居や郵便ポスト、寺社などのマークも描かれており、当時住居があった場所も把握することができる。字西方の範囲は小出村の中でも西端に位置しており、比較的住居の少ない地域であったと思われる。発掘調査成果からも北陵高校建設以前は長く耕作が行われていたと考えられる。

最も東側で発見された区画の可能性のある溝状遺構は317番地の南側道路に概ね並行するわずかに道路よりも北で発見されたもので、地形的にも台地地形から低地へと切り替わる付近となっている。317東側の道（第2図、第8図Ω地点）が西方と北方の字境となっている。この字境を南北に追うと、北側も南側もわずかに東側に広がっていく。この広がる部分は概ね東西方向に複数水路（太線）が描かれており、地形的にも高台部分と比較して低い土地となっていることがわかる。これは小出川や駒寄川の影響を受けやすい低い土地で、水田等の部分が東に広く描かれているものと考えられる。つまり、高台部分の東側字境は南北方向のほぼ直線である。

この地図に正殿の概ねの位置（第8図A地点）、東側推定区画遺構（第8図D地点）、出入り口部（第8図G地点）、西側推定区画遺構（第8図E地点）を当て込むと、その周辺には、現在ではいわゆる赤道と呼ばれるものや、市道となっているような道、その交差点が近いように思われる。あくまでも低い可能性ではあるが、西方の周辺の道路は、古代からの様相を引き継ぎつつ、長い年月により利便性の向上や土地の交渉により少しずつ区画に動きがあったと考えることができるのではないだろうか。これは、字西方周辺が高座郡家廃絶後に大規模な遺跡が形成されなかったこと、戦後の区画整備の影響が少なかったこと、開発調整区域になっていることにより、開発の影響を大きく受けなかったことなど、多くの条件が重なった結果、古地図と遺跡を結びつけて考えることが根も葉もないことではないと考察する可能性を生んだのである。

今後の発掘調査成果により、否定される可能性はあるが、現状の資料から古きを考えるという考古学の原点に立ち返り、この仮説をあえて世に出したいと思う。

この仮説にさらに想像を加えれば、大岡越前通りと呼ばれる正殿を壊すこの道は、地形的にも高台部分の中心付近を通るようにしつつも、東側出入り口部の区画位置を継承し、有効に転用しているようにもみることができる。もちろん偶然重なるということもあり得、それ故に、仮説の域を出ないのであるが、人類活動の必然性を以て、歴史を順に紐解いていくことができると下寺尾西方遺跡をはじめ、市内の遺跡とその調査成果に期待したいのである。

最後に、古い地図資料をご教示いただいた平山孝通氏、須藤格氏に厚く御礼申し上げます。

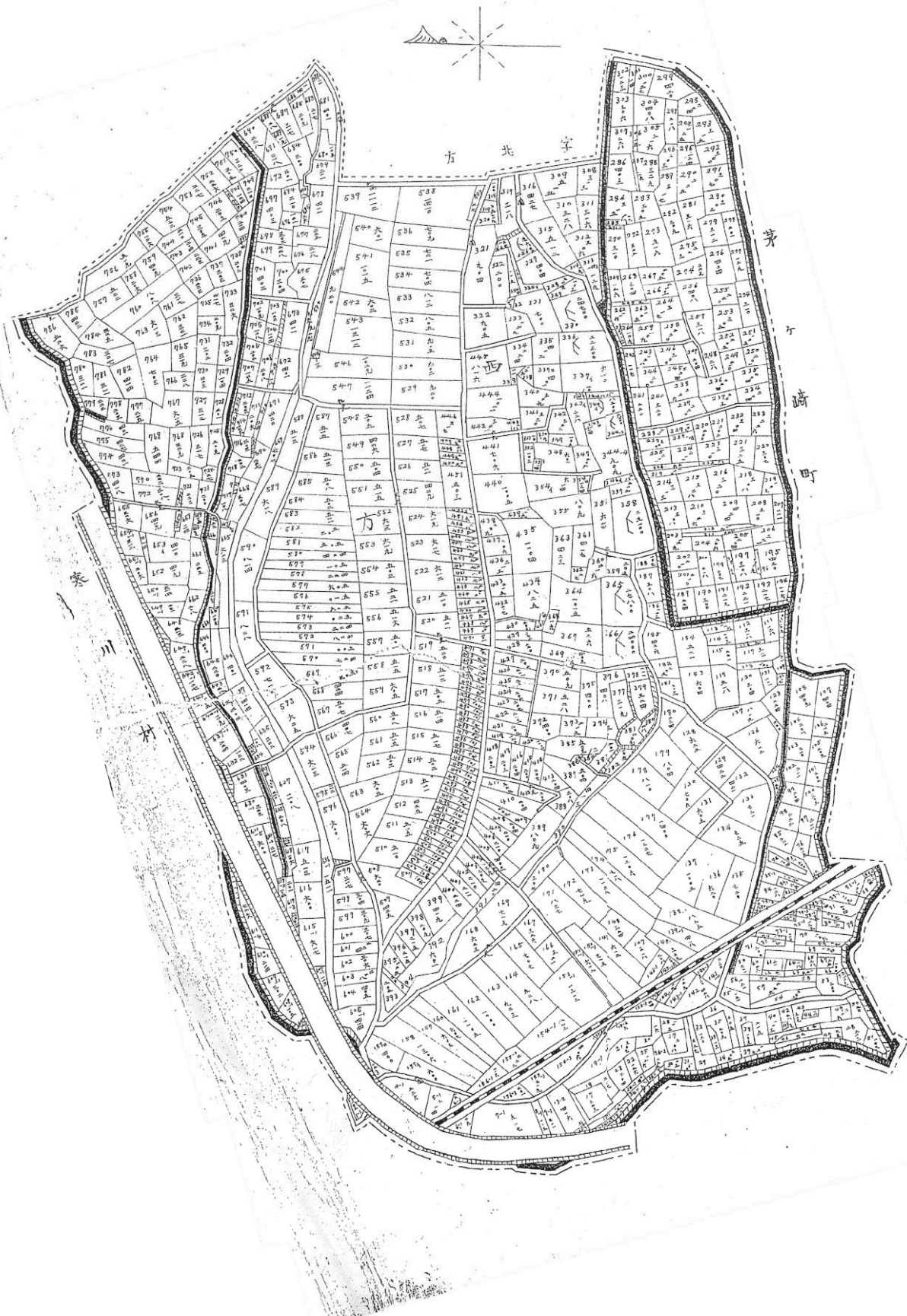
第6～8図の地図：昭和2（1927）年11月製図 昭和3年3月発行 大日本市町村地番入地図刊行會

小出村全図

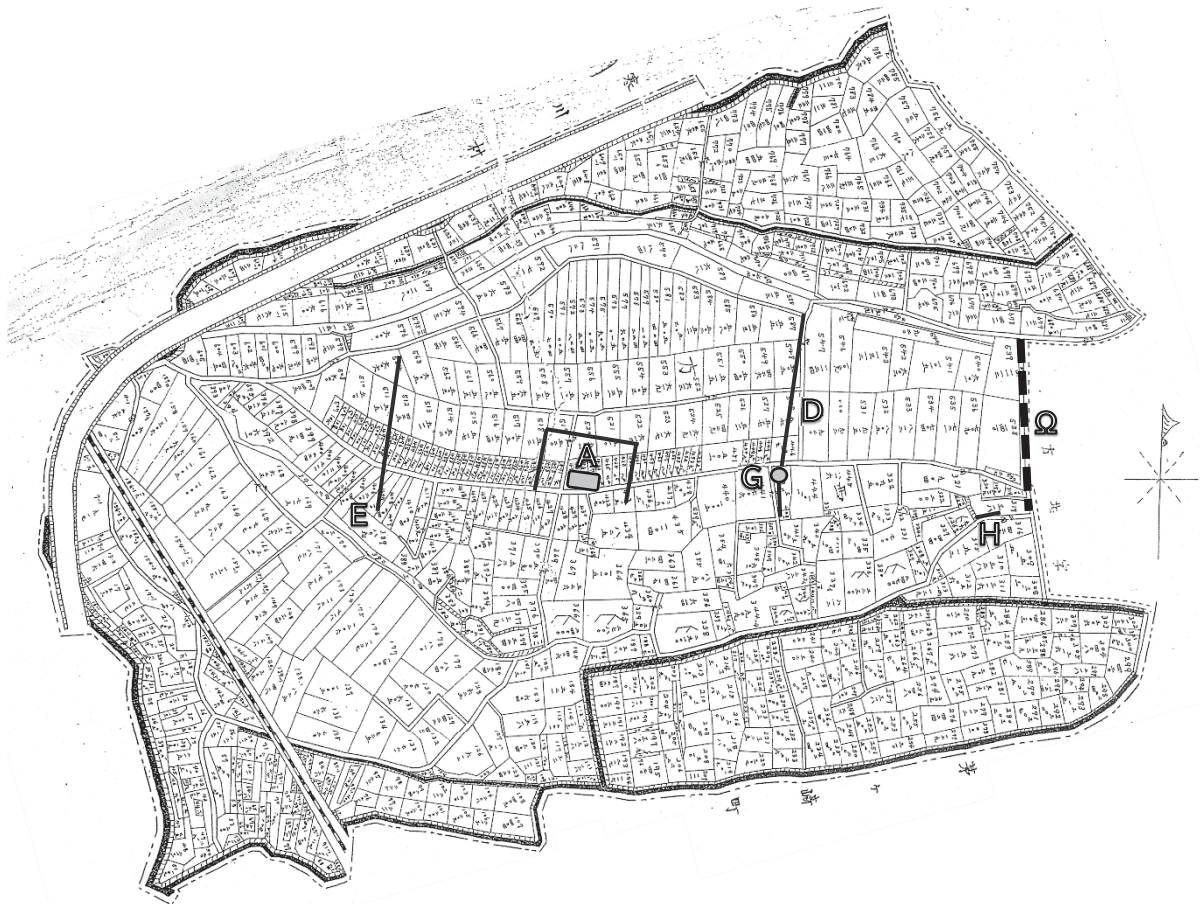
縮尺一万六千分之一



第6図 昭和2年製図小出村全体図の西側部分 (原図を縮小、上が北西)



第7図 昭和2年製図の小出村字西方の地図



第8図 古地図と古代高座郡家の推定区画



第2図 下寺尾官衛遺跡群の主な遺構



第9図 高座郡家東側推定区画出入口部 (左が北)

木製品のトレハロース処理 –有機遺物の保存と活用のために–

田中 万智

1 はじめに

遺跡から出土する遺物は実に多種多様であり、人間が残したあらゆるものが経年劣化を伴いながら現在に至った結果である。発掘調査では保存環境の変化に強い土器や石器などのほか、比較的变化に耐えうる金属製品、極めて脆弱な有機質の遺物がまとまって出土する。そのため、早い段階から遺物の特性に合わせた適切な保存方法を選択することが後世に資料として伝えるための第一歩といえる。

中でも、木製品は脆弱かつ環境の変化に極めて敏感であり、空気に触れるだけでも急速な劣化が引き起こされる。その特性から、密閉容器に水漬け状態で保存することが主体であった。しかし、その状態では展示をはじめとする活用に用いることは困難であり、水漬け中でも劣化が進むため原型を留めず失われたものも多い。木製品の保存処理に対する一般的な認識は専門知識と多大な費用が必要というものであり、その結果、現在は選ばれたごく一部の遺物が保存処理を経て活用されているに過ぎない。

今回、トレハロースによる保存処理方法を実践した背景には「失われる可能性のある大多数の木製品」を少しでも多く救出し後世に残すべく、自治体単位で実施可能な保存処理技術の習得を目指したものである。

2 木製品が残存する条件

本来であれば分解され消失する木製品が残存するには、いくつかの好条件が重なる必要がある。それは酸素が欠乏することで微生物の活動が抑制される「密閉された水漬環境下」であり、水位の高い土壌中や水中に堆積した泥中が該当する。茅ヶ崎市域では南部の砂丘地帯が該当し、中でも砂丘間に存在する「砂丘間凹地」は水位が高く木製品が良好に残存している。代表的な遺跡としては、放生木簡や茜木簡が出土した居村 B 遺跡があげられる。

これらの木製品は出土時こそ形状を保ってはいるものの、構造的には極めて脆弱であり、保存環境の変化に敏感なため土中から取り上げると急速な劣化を引き起こす。何も対策を取らなければ数日で形状が崩壊することも多く、木製品が出土した際は早急な応急処置が求められる。最も手軽に行える保存方法として普及しているのは水を満たした密閉容器内に木製品を水漬けする方法である。

木材は主にセルロースとリグニンからなる細胞構造からなり、土中ではセルロースが物理的に強度を失い分解される。分解されつつあるセルロースは水を含むことで形状を維持することが可能である。出土した木製品は本来の重量よりも重くなっているが、これはセルロースの保持する水分量が生木に比べ多いことに由来する。土中から取り上げることにより空気に触れることによりセルロース内の水分が蒸発すると、物理的な形状を維持できないため著しい収縮や湾曲といった破壊が発生し、復元不可能な致命傷を負うことになる。水分の蒸発をいかに防ぐかが応急処置のカギとなる。出土した木製品を水漬けにすることで一時的な劣化が防げるのは、木製品のセルロース内に十分な水分を供給するためである。

3 木製品の保存処理技術

木製品の保存処理は、このセルロース内に残された「水」を他の物質に置き換えることにより物理

的な補強と環境変化への適応力向上を図るものである。これは水に可溶性のある物質を浸透圧により木材の細胞内に含浸する方法である。そのため、土中でセルロースの分解が進みスポンジ状まで分解されてしまった木製品であっても、セルロースの構造自体が残存しているため保存処理によって形状を維持することが可能である。

今日、木製品はホウ砂とホウ酸によって中和された防腐水溶液内に水漬けすることが広く一般的であるが、土中に比較して四季の著しい温度変化や光による遺物表面の温度上昇などにより、水漬けで恒久的に木製品を維持することは難しく、いずれは劣化により失われる。

1960年代から高分子の水溶性ワックスであるポリエチレングリコール(PEG)が利用され、木製品の保存処理に新たな時代が開かれた。その代表例はスウェーデンの「ヴァーサ号」であり、1628年の処女航海で沈没した王室軍艦ヴァーサ号を1961年に引き揚げ、船体すべてにPEGを噴霧して保存処理を行い、1990年に博物館をオープンしたものである。しかし、館内湿度を52%に維持し照明や換気に最新の注意を払ってはいるものの、木材の酸化や金属部分の錆化、PEGの溶出など多くの問題が発生し、常に保存処理を施している状態である。

その後、PEG処理は溶液による環境および人体への悪影響や高温下での溶出が懸念されるようになり、ほかの方法が模索されることとなる。1980年代からは糖アルコールや高級アルコールを用いた方法が開発され、糖アルコールは主にラクチトールを用いた。

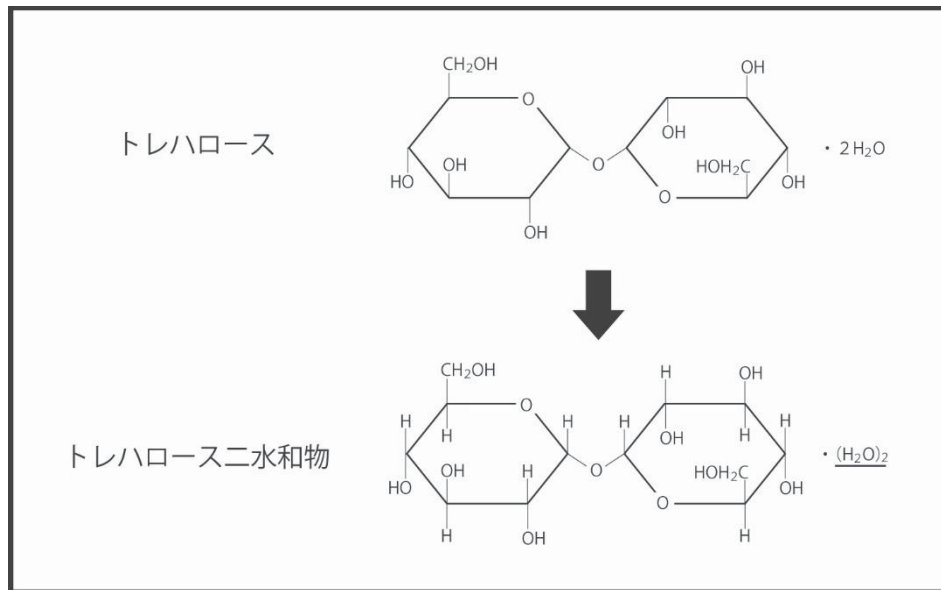
4 トレハロースとは

トレハロースもラクチトールと同じ糖アルコールの一種であり、含浸方法は温度管理(加熱)を伴う浸透圧による常圧含浸である。トレハロースの構造は、グルコース(ぶどう糖分子)が2個結合した非還元性の糖質であり、二糖類(分子量342)に属し常温では2分子の水と結合した二水和物(分子量378)の結晶となる。この二水和物結晶は融点97°Cで、95%RH(相対湿度)以下では吸湿しないのが特徴である。また、トレハロースを水溶液にした場合も酸や熱に対する安定性は高い。これは木材に含まれる酸や水漬けに用いられたホウ砂+ホウ酸水溶液に触れても分解されず、水溶液中のトレハロース濃度を上昇させるために加熱した場合にも安定していることを示している。

動植物界に広く存在する自然由来の糖であるが、人工的な生産は難しく、これまではキロ単価数万円であった。そのため、保存処理に用いることが難しかったが、1990年代半ば頃にジャガイモデンプンからトレハロースを量産する方法が開発され、キロ単価数百円までコストダウンが可能となった。トレハロースはその保湿性・安定性の高さから食品添加物として広く一般的に利用され今日に至っている。

トレハロースは二水和物の結晶状態であっても吸湿しにくいことから、高温多湿な日本の環境下において処理した木製品から溶け出すことは極めて少ないといえる。PEGは高温に弱く、処理した木製品が近年の酷暑下においてPEGの溶出を起こしている事案が増えてきている。高温多湿な日本において、保存処理後の維持管理に細かい温度・湿度の問題が付きまとうのは遺物にも人にも大きなストレスをかけることとなる。その点からもトレハロースは日本の環境に適合した主剤の一つであるといえよう。また、トレハロースは加熱した高濃度の水溶液から温度が失われる際に、急速に結晶化が進む。この温度変化による急速な結晶化は、含浸した木製品の形状安定に大きく寄与するものである。なにより自然由来の糖であり溶液も水での希釈であることから、アセトン希釈のPEG処理に比べ環境・人体への負荷が極めて少ない。廃液処理もPEGが産業廃棄物であるのに対し、トレハロースは

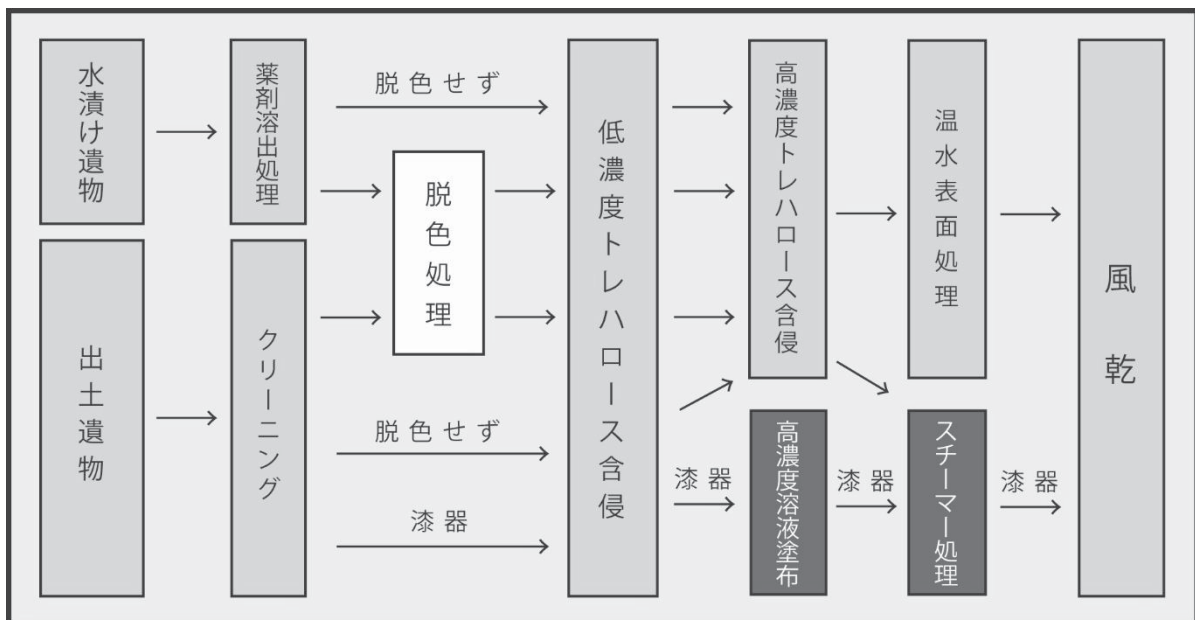
希釈して通常廃棄が可能である。



第1図 トレハロースの構造

5 トレハロース処理の手順

トレハロース処理の手順は大きく4工程に分けられる。それは、(1)木製品のクリーニングと脱色、(2)低濃度（常温）から高濃度（加熱）へ段階的に濃度を上げての含侵、(3)温水による表面処理または高濃度溶液塗布、(4)風乾による全体の結晶化、である。以下に各作業を順にみていきたい。



第2図 トレハロース処理チャート

(1)処理前の準備－クリーニングと脱色－

遺跡から木製品が出土してすぐに処理を行う際には、表面についた泥や土を丁寧に洗い落とす。ホ

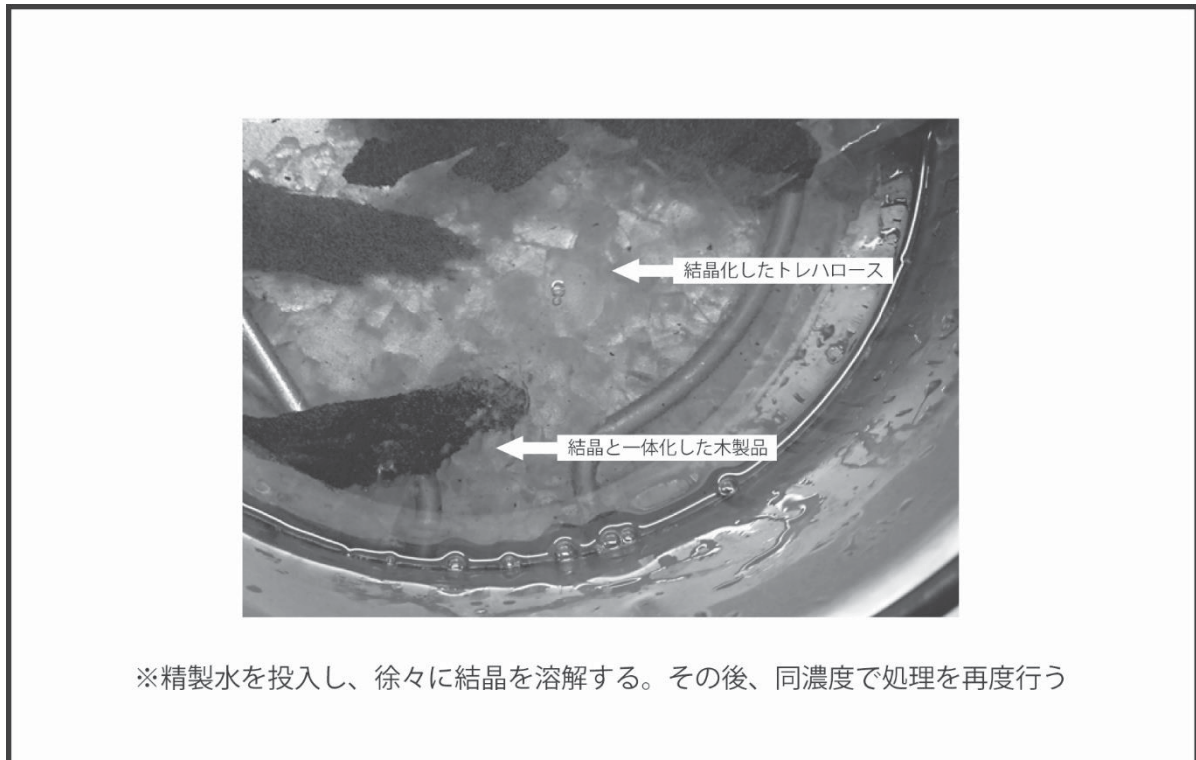
ウ砂+ホウ酸水溶液に水漬けで保管されていた場合には、真水（精製水が望ましいが水道水でも可）に漬けてホウ砂とホウ酸を十分に溶出させる。また、出土した木製品は土中で吸着した鉄分が酸化することにより黒色化するほか、トレハロース含侵を行うことにより黒色味は増してしまう。色調を木材本来の色に近づける場合には EDTA2Na（エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム）の水溶液（1%）に漬けて脱色させる。ホウ砂+ホウ酸の溶出と EDTA2Na への漬け込み期間については、遺物の大きさに合わせて適時調整する必要がある。

(2)トレハロース含侵－低濃度から高濃度へ－

トレハロースを含侵させるには、それぞれ目標とした濃度の水溶液（トレハロース+精製水）に漬け込む必要がある。水溶液の濃度は加熱を行うことで上昇させることが可能であり、水槽にはアルミホイルで蓋をするなど水分の蒸発による濃度変化と水位低下に注意する。目安としては濃度=温度を使うと便利である（例：30%なら水溶液温度 30°C）。最初は室温に合わせて 30%濃度から始め、50%、70%と上昇させていくとよい。木製品への加熱によるダメージを考慮すると、一般的な木製品には最終濃度 80%を、漆器などには漆の耐熱性から最終濃度 55%(50°C)が最もストレスが少ないと考えられる。トレハロースは結晶化の際に 10%の水分を含み結晶となるので、上記の最終濃度でも形状変化は極めて少なくなる。ただし、漆器の場合は最終濃度が低いことから取り上げ時に高濃度のトレハロース水溶液（70~80%）に潜らせる必要があることに留意していただきたい。

トレハロース水溶液の濃度切り替えを行うタイミングであるが、これは遺物毎に異なるため、一概には掲示できない。そこで指標となるのが、遺物の重量変化である。トレハロース水溶液中に遺物を投入すると、水とトレハロースの重量比で遺物はトレハロース水溶液に浮いている。やがて含侵が進むと水溶液の底に沈みこむ。このことから、木製品の重量を観察し、重量変化がなく一定になったらその濃度の含侵は完了したものと見える。

トレハロース水溶液は常に一定の温度管理を行う必要があり、その温度管理こそがトレハロース処理の要といえる。そのため、恒温槽または恒温器を使用する必要がある。茅ヶ崎市では、箸や桶などの小型木製品に対しては卓上型の恒温槽を、中~大型木製品や一度に多量の木製品を処理する場合には投込式のサーモメイト装置を利用している。トレハロース処理を効率的に運用するため、卓上型では装置内に直接トレハロース水溶液を充填して木製品を投入し、投込式のサーモメイト装置の場合には、精製水に防腐液を添加して一定温度の水槽とした上で、別に用意したトレハロース水溶液と木製品をビニール袋に密閉して水槽内へ投入している。なお、トレハロース水溶液の濃度を上昇させる際に、稼働中の水溶液中にトレハロースを追加して濃度上昇をさせることは推奨できない。木製品から溶出した水分により水溶液中のトレハロース濃度は複雑な状態となっているため、正確な濃度管理は難しい。また、50°C以下での含侵中は温度の低さから水溶液中にカビが発生（球状のコロニーを生成することが多い）することがある。その際には木製品の表面からカビを取り除き、新しいトレハロース水溶液を用意して処理を続行する。水溶液が白濁・酸味のある匂いなどを呈するようなら、カビの発生を疑う必要がある。



第3図 蒸発による水位低下と結晶化

(3)トレハロース水溶液からの取り上げー表面処理ー

最終濃度の水溶液中で木製品の重量変化が一定となれば処理は完了である。取り上げの際には40℃ほどの温水を用意し、一瞬潜らせ表面をキムワイプなどで拭う。この工程によって表面に結晶化するトレハロースを取り除くことができる。ただし、漬ける時間が長すぎると表面のトレハロースが溶出してしまいひび割れや白色化の原因となるので、極めて迅速に行う必要がある。取り上げ後に表面の結晶化したトレハロースをスチーマーで溶解して取り除く方法もあるが、高温のスチームに再度遺物の表面を曝すことは追加のダメージを与えることであり、温水で拭う方法を選択することを提案したい。温水処理の方が自然な木の風合いを表現できる。

漆器のように水溶液の温度に制限がある場合は、最終濃度が低くなることが想定される。その際には表面のみ高濃度のトレハロース水溶液を塗布し、コーティングすることで形状変化の防止や漆膜を保護する効果を期待できる。また、漆膜の剥がれが生じた場合には、高濃度溶液を漆膜に筆で塗布し木胎へ押し当てることで接着する。塗布後に表面へ結晶化した余剰分のトレハロースについては、スチーマーで溶解し取り除く必要がある。ただし、スチームは高温のため長時間吹き付けると漆の色調を損なうこととなる。



第4図 漆器の表面処理

(4)風乾－自然乾燥－

ここまでの処理が完了した木製品は、遺物カゴなどに入れて風通しの良い室内の日陰で風乾させる。この際にしっかりと中心まで乾燥させないとカビの発生が引き起こされる。含侵と同じように重量を計測し観察することにより、乾燥の進み具合が把握できる。乾燥後はプラシャーレに入れるなどし、物理的な衝撃や生物被害から守る必要がある。木製品が複数に分解した状態で出土し、それぞれが接合可能であれば風乾の際に接合面を組み合わせた状態で乾燥工程に入ることで、歪みや収縮による形状変化で接合面が一致しないという事態を避けることができる。また、接合についてはパラロイドなど可逆性のある一般的な接着剤で行える。

このほか、木製品の材質や形状、複合遺物、劣化の進み具合によって処理の時間やスピードは変化してくる。まずは遺跡から出土する自然木を用いて技術を習得した後、小型の木製品から処理を行うことを推奨する。そして、保存処理を行う上で最も大切なことは、木製品は長い年月を経て出土した繊細なモノであることを忘れず、決して処理を焦ることなく、無理をしないことである。貴重な文字資料や複雑な複合遺物が出土した際は、従来通り専門機関に委託することが必要であり、専門機関ではトレハロース処理のみでなく、赤外線写真撮影やX線写真撮影、CT スキャンなども同時に行えるため、得られる情報量は格段に多くなる。

6 トレハロース処理の課題

ここまで述べてきたように、トレハロースによる保存処理は PEG やラクチトールにはない日本の風土に適合した特性を有している。そして、もともとは自然界に存在する糖であることから環境に対しても優しいといえる。しかしながら、技術確立から時間が経っておらず、経年変化など不明な部分も多い。当時最新の技術であった PEG 処理を施したヴァーサ号のように思いもかけない被害が発生することも考えられる。経年変化の観察を積み重ねることが今後の課題といえよう。

7 自治体への保存処理技術導入－出土品を後世へ伝えるために－

発掘調査という行為が無くなることはない。その事実は出土品の増加、ひいては各自治体の収蔵庫問題に直結している。中でも土器や石製品と異なり、保管にも手の掛かる木製品は悩みの種といえる。しかし、応急的な水漬け処置を施しそのままにしておくことは近いうちに貴重な遺物を失うことにつながる。

木簡など「重要な資料」と認識されている遺物は優先的に保存処理を施すべく専門機関へ相談されるが、大多数の木製品はいずれ来るべき消滅の日を静かに待っているのが現状である。発掘調査によって木製品を眠りから覚まさせた以上、その後の処置を行うことは我々に課せられた使命であるといえよう。今回紹介したトレハロースによる木製品の保存処理方法は、その容易さから大多数の木製品をより多く未来に伝え残すために適した技術であるといえる。PEG 処理には複数の装置や運用技術が必要であったが、トレハロース処理は最小規模の場合には卓上サイズの装置で行うことができる。それぞれの自治体にあった保存処理を行うことができれば、より一層「現状を維持し、未来に伝える」ことができる。保存処理技術は決して占有するものではなく、広く一般的に実施されるべきである。保存処理技術が身近なものとなり、より多くの出土資料が研究や教育普及に活用できることを願っている。

謝辞

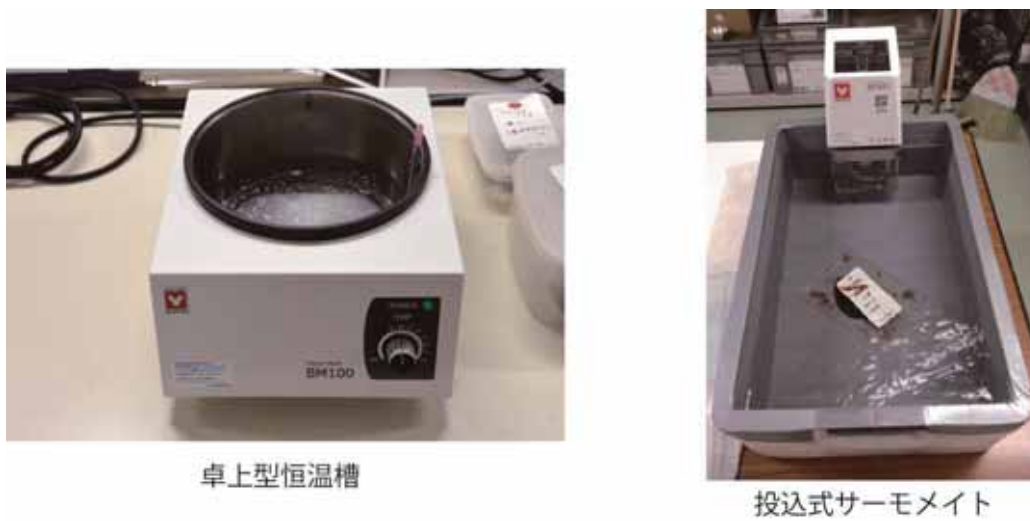
本稿を記すにあたり、多くの方からご協力をいただいた。保存処理技術の習得にあたっては、東京藝術大学大学院の今野春樹氏に多くのご助言を賜り、技術を習得することができた。また、新技術の活用と研究姿勢については水中考古学者の山船晃太郎氏に多くを教わった。そして、長年の友人である鈴木裕氏には実験のサポートと理化学分野のご助言を頂いた。記して感謝し御礼申し上げます。

【参考文献】

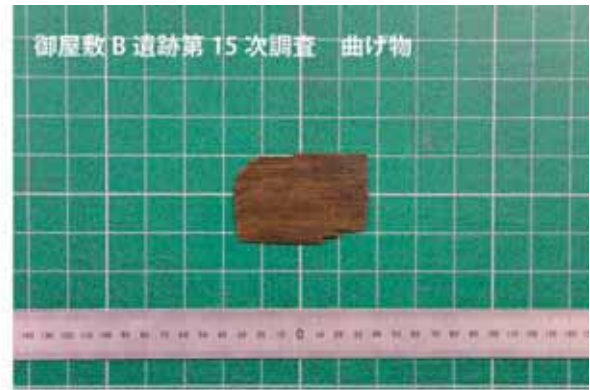
- 伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2010「糖アルコール含浸法からの新たな展開ートレハロースを主剤とする出土木材保存法へー」
日本文化財科学会第 27 回大会発表要旨集 pp.280-281
- 伊藤幸司・藤田浩明・アンドラス モルゴス 2011「出土木材保存のためのトレハロース含浸法の開発ーラクチトールからトレハロースへー糖類含浸法の新展開ー」日本文化財科学会第 28 回大会発表要旨集 pp.264-265
- 伊藤幸司・藤田浩明・金原正子・今津節生 2012「トレハロース含浸処理法の実用化ー漆製品への有効性についてー」日本文化財科学会第 28 回大会発表要旨集 pp.288-289
- 伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2013「ラクチトールからトレハロースへー糖類含浸法の新展開ー」日本文化財科学会誌 (65)pp.1-13
- 今津節生 2012「遺跡から発見された木製遺物の保存におけるトレハロースの効果」第 16 回トレハロースシンポジウム要旨集
株式会社林原 日本応用糖質科学会 pp.14-17
- 岡田勝秀・杉本利行 1995「トレハロースの開発と利用」食品と開発 Vol.30 No.9 pp.49-52
- 永濱功治・内山伸明・中村幸一郎 2012「トレハロースを用いた木製品の保存処理(1)」縄文の森から第 5 号、鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要
- 南の縄文調査室・榎本美里 2013「トレハロースを用いた木製品の保存処理(2)」縄文の森から第 6 号、鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要
- ディビット ワトキンスン・バージニア ニール著 谷畑美帆・宮代栄一・瀧瀬芳之・谷口陽子訳 2002「出土遺物の応急処置マニュアル」柏書房株式会社
- 株式会社林原「トレハ®の基本物性」<https://treha.jp/knowledge/substance/>



第6図 トレハロース処理濃度別遺物状況（脱色処理無）



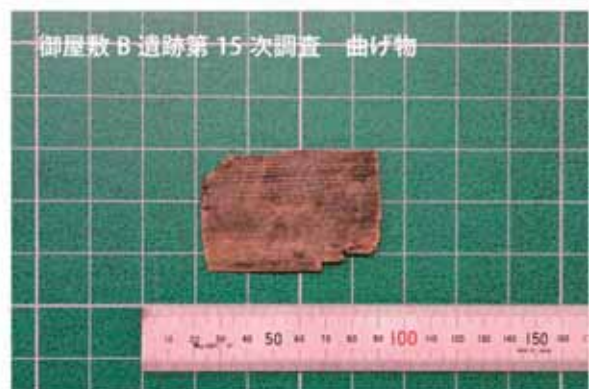
第7図 卓上型恒温槽と投込式サーモメイト



トレハロース処理前 (クリーニング済)



トレハロース処理完了 (最終濃度 80%)



風乾処理完了 (風乾期間：30 日間)

第 8 図 トレハロース処理前後の木製品比較

葦原の神威が高揚した時期であり、また、願行房靈靜の活動時期とも重なる。そもそも真言宗と八幡社の関わりも深い。宝生寺の阿弥陀三尊像が鎌倉後期とみられることも看過できない。鶴嶺八幡宮の確実な始源についてはいまだなお不明な点が多いとせざるを得ないが、同宮周辺の環境が、元寇期、八幡信仰の高まりのなかで真言宗との強い関わりのもとに整っていたことは積極的に想定してよいのではないだろうか。

論じ残した点も多いが、いずれも今後の課題とし、この貧しい稿を閉じたい。

* 茅ヶ崎市博物館学芸員

註

- (1) 請求番号二五九一〇二七、二六冊中の二五冊。
- (2) 『新編相模国風土記稿』巻六一・村里部・高座郡巻三・浜ヶ郷村・面別別當常陸院系、同史料については、主として茅ヶ崎市『茅ヶ崎市史史料集 第二集 茅ヶ崎地誌集成』(二〇〇〇年)に依拠した。
- (3) 茅ヶ崎市『茅ヶ崎市史 資料編(上) 古代・中世・近世』(一九七七年 古代・中世編二三号)「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」。
- (4) 単に「勝福寺伝起」と称するよりも、「鶴嶺八幡別当」という冠を付したほうが、当該史料における鶴嶺八幡宮の縁起としての性格もより明確になると思われる。
- (5) 貫達人編『改訂新編 相州古書 第一巻』(神奈川県教育委員会 一九六五年)。
- (6) 『新編相模国風土記稿』巻六一・村里部・高座郡巻三・浜ヶ郷村・鶴嶺八幡伝系。
- (7) 文化三年(一八〇〇)成立の「東海道分間延縁図」にも、明確にその情景を看取することができる。
- (8) 茅ヶ崎市は、近世初期に整備されたといわれる同宮の参道について、参道そのものを中跡に、その松並木を天然記念物に指定している。参道の歴史については考古学的にも跡づけられている。さしあたり、石原B遺跡発掘調査団編『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告6 鶴嶺八幡宮参道 国道1号線改良工事に伴う石原B遺跡発掘調査報告書』(茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会 一九九五年)を参照。
- (9) 懐島郷とは、おおむね近世村落の凹感村・矢畑村・浜ヶ郷村・西久保村(凹感村の分村)の範囲を指す。なお、丸山理「文獻からみた鶴嶺八幡宮」(石原B遺跡発掘調査団編掲註(8) 書、附編1)、および同『茅ヶ崎市鶴嶺八幡社の創建について』(法政学点字二〇、一九九三年)も、本稿の論旨と重なる部分が多い。あわせて参照されたい。

(10) 原文ではここに『東国紀行』からの引用が続くが、省略する。なお、第三段落の行頭一字下げは引用者による。

- (11) 森公章「前九年・後三年合戦と武力―河内源氏と地域権力の諸相―」(『東洋大学女子部紀要 史学科編』四七、二〇二年)。
 - (12) 元木泰雄『源頼義』(吉川弘文館、二〇一七年)。
 - (13) 石母田正「平中常の乱について―十代末期の辺境の叛乱の一考察―」(『石母田正著作集 第七巻 古代末期政治史論』岩波書店、一九八九年、初出一九五二年、野口実「平中常の乱の経過について―追討の私戦的側面―」(同『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八一年)。
 - (14) 『皇国地誌』の引用は、茅ヶ崎市掲註(2) 書による。
 - (15) 後続部分に、『新編相模国風土記稿』に依拠した「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」からの孫引きが見られる。
 - (16) 石田龍次郎「皇国地誌の編纂―その経過と思想―」(『橋本大学研究年報 社会学研究』八、一九六六年)。
 - (17) 靈靜についてはさしあたり、伊藤寛見「願行上人靈靜の研究(上・下)」(『密教文化』二一七、二一九、一九七七年、橋本初子「願行上人靈靜について」(『金沢文庫研究』二七六、一九八六年)など参照。
 - (18) 『国誌下調』の引用も、茅ヶ崎市掲註(2) 書による。
 - (19) 小脇知行「鶴嶺八幡宮の創建」(立正大学大学院文学研究科『大学院年報』三五、二〇一八年)。
 - (20) 『吾妻鏡』の引用は、新訂増補国史大系本によった。
 - (21) 茅ヶ崎市掲註(3) 書、一一七頁。
 - (22) 『吾妻鏡』のほか、「保元物語」や「源平盛衰記」においても、「大庭二郎」は大庭景親を指している。
 - (23) 伊藤掲註(17) 論文(下)、三七頁。
 - (24) 黒田日出男『龍の棲む日本』(岩波新書、二〇〇三年)。
 - (25) 茅ヶ崎市掲註(3) 書、一一七頁。
 - (26) 神野祐太「阿弥陀如来及び面佛持立像 三軀」(神奈川県立歴史博物館 特別展図録 相模川流域のみほとけ、二〇二〇年、二二頁)。
 - (27) 伊藤掲註(17) 論文(下)。
 - (28) 伊藤掲註(17) 論文(下)、三六―三七頁。
- (付記) 本稿は、二〇二四年二月二日(月・祝)に、茅ヶ崎市立鶴嶺八幡宮における鶴嶺歴史講座において、「鶴嶺八幡宮と中世懐島郷」という題名で行った講演の前半部分にもとづき、さらに内容に再検討を加えてまとめたものである。発表の場を与えてくださったとともに、会場手配等の事前準備をしてくださった同館の小池三知雄氏、二谷恭子氏には、この場を借りて、改めて御礼申し上げる。また、二〇二三年三月五日(日)に行った鶴嶺歴史講座「武士の目覚めと八〇〇年前の鶴嶺」の際も含めて、貴重な意見や地域の情報をお寄せくださった地元の方々にも、感謝申し上げます。

鶴嶺八幡社条ではD、B-2、C-1の順で、佐塚明神社条ではB-4のみ、常光院条ではB-1、B-3、B-5、C-2の順で、それぞれ「勝福寺縁起」の各構成要素を引いている。わずかな相違点としては、佐塚明神社条のB-4部分において、「勝福寺縁起」の「乃悦上人(与)大勸進」の一句が省かれていること、また、常光院条のB-3部分において、「勝福寺縁起」の「関東律寺之最初、相精舎之始也」の「相精舎」が単に「精舎」とされている程度である。『新編相模国風土記稿』の鶴嶺八幡社・佐塚明神社・常光院の各条において、創建に関わる部分では、「勝福寺縁起」以外の目立った情報源は認められない。

以上の検討にもとづけば、前近代の段階においては、鶴嶺八幡宮の創建に関し、もっぱら「勝福寺縁起」系の所伝(そこには「両社之記録」および『新編相模国風土記稿』も含まれる)と呼ぶべき道印法師創建伝承が支配的であり、現在通用している河内源氏の坂東進出と結びつけられた由緒は、少なくとも史料上はまったく認められない。最後に、節を改めてその史的背景について考えておきたい。

おわりに

『茅ヶ崎市史1』が、「勝福寺縁起」の史料解題のなかで、「この縁起も勝福寺もともに現存しない。ともに明治初年の廃仏毀釈の際に失なわれたものと思われる」と述べたことは、明治期の神仏分離を考えればごく当然のことのようにも思われるが、元来、仏教との親和性が高い八幡信仰の歴史を捉える場合にあっては、より一層、重要な意味をもつと考えられる。おそらく、鶴嶺八幡宮およびその別当寺は、神仏分離に際し、決定的な転換期を迎えたと考えられる。その徴証のひとつと見ることができるとも思えないものに、勝福寺の本尊「阿弥陀三尊高麗仏」(勝福寺縁起 B-1)が挙げられる。

現在、茅ヶ崎市域唯一の国指定重要文化財である西久保・宝生寺の阿弥陀三尊像は、詳しい伝来が不明である。近年、神野祐太氏は、「勝福寺縁起」における「高麗仏」との呼称から三国伝来の善光寺式阿弥陀三尊が想起されることを指摘したうえで、常光院が明治初年に廃寺となったのち、常光院と宝生寺がともに同じ真言宗の田蔵寺の末寺であることから、同時期、宝生寺にそれらの像が移動した可能性を想定している。すなわち、宝生寺の阿弥陀三尊像が本来、鶴嶺八幡宮の別当寺たる常光院(勝福寺)の本尊であった可能性があるということである。

また、「勝福寺縁起」の道印法師創建伝承の骨子(B-2)に登場する「鶏足寺」について、史料中、「筑紫平佐」に関連づけられているが、それは宇佐八幡宮からの連想に過ぎないのではないだろうか。むしろ注目すべきは、足利の真言宗の寺院・鶏足寺である。同寺所蔵の「鶏足寺譜」によれば、文永九年(一二七二)七月一六日、願行房憲静と下野の慈猛房良賢はともに意教上人頼賢から三寶院流を受けており、この良賢は鶏足寺の中興の祖であって同寺を真言宗慈猛派の根本道場に変えた。したがって、足利の鶏足寺は畫齋閑連の人脈のなかに位置づけられる。

伊藤宏見氏は、「勝福寺縁起」について、「誤字多く粗笨の文とそしりをまぬがれえぬ文書」であって、「後世のあまり教養のない僧侶によって誇大に筆記されたもの」としながらも、一方で、「関東律寺之最初」、思允、悦上人、願行上人など、真言宗に関わる記述については、「何かしらの往古の事実をのべているのであろう」と述べ、勝福寺自体についても、「思允や願行や悦右らのかかわった寺で、北京律の人の一つの拠点であったのであろう」と推測している。

「勝福寺縁起」のC-1において、元寇の頃に、鶴嶺八幡宮周辺の景観が整ったと位置づけられていることは示唆的である。当該期は、前述のとおり、軍神としての八幡大

〔非対応箇所1〕

原夫相模国高座之郡懷島之郷、有勝絶靈地。則、八幡大菩薩・佐塚大明神両社之鎮坐、靈験無以方、沢彼箇疆（矣）。

〔対応箇所1〕 : B-3 (末尾以外) 相当部分

以故源頼朝為凶徒対治・逆臣退散、安元二年丙申之歲、造建彼靈地於伽藍。翌年治承元年丁酉春二月二十五日、寄封戸二加食邑。其領地者前懷島之内始西窪村一而、所載旧記多其眞（矣）。次建久二年辛亥歲、亦復凶徒対治祈願之料、所肥後国有為之庄七百貫。都上件之社領悉以頼朝所レ及悲願也（矣）。

〔非対応箇所2〕

彼両社其別当兼帶之。

〔対応箇所2〕 : C-2 相当部分

往古之寺号名勝軍寺、中古号勝福寺、今者称常光院。

〔対応箇所3〕 : B-2 相当部分

開基前道印法印、

〔対応箇所4〕 : B-1 相当部分

檀那又大庭三代以前之武將良正（云々）。

〔対応箇所5〕 : B-3 (末尾) 相当部分

中興沙門思允（文字之舍弟也）、旦那平権守。

〔対応箇所6〕 : B-4 相当部分

撰定供僧六口、

〔対応箇所7〕 : B-5 相当部分

修古、再興仏殿・精舎、造新創建三重塔。相州以戸室充行伽藍修飾之

料。次元弘年中、両社之靈験、遠達于

天聰、悉被成下、綸旨（云々）。其後、武州依金井原合戰、為其祈願、寄附同国小机烏山之郷。

〔対応箇所8〕 : C-1 相当部分

次、文治三年、蒙古袭来、是故日本一州於在々処々、御祈祷各凝精誠。於当社者、供僧・社人・八乙女以下、（礼）字之御正躰、奉安置於神輿。励丹祈之処、從御輿之内、鑄矢一隻鳴出、於南海波上七日七夜威光熾々而、以夜繼日、從爾以還、蒙古退散而、国家安寧也（矣）。其後、東寺之願行上人、鎌倉下向之刻、被補于当社之別当、再興社檀、定若宮之供僧六口。両社之供僧、都合十二口。

史料そのものでは、これに続けて、近世初期の常光院別当・朝恵による参道松並木の整備のことが語られるが、本稿の主題ではないため、省略に従う。

さて、この「両社之記録」は、「勝福寺縁起」のB-2・B-4に相当する部分（対応箇所3・6）については、大幅に省略されている。すなわち、道印法師創建伝承の具体相と、佐塚明神に関する縁起である。逆に、寺観の壮大さを強調するB-5相当部分については、表現がより豊富化されている。そのほか、「勝福寺縁起」が「六坊」（B-4）・「十二坊」（C-1）と、施設として位置づけていた箇所が、「両社之記録」では「六口」（対応箇所6）・「十二口」（対応箇所8）と、社僧の人数に置き換えられている点などにも留意しておきたい。しかしながら、全体として、「両社之記録」の中世段階までの叙述については、「勝福寺縁起」に極めて性質の近い史料に依拠したとみて大過なく、文飾表現を除き、そこに目新しいものはない。

なお、「勝福寺縁起」は『新編相模国風土記稿』にもかなり忠実に引用されており、

一七〇)や建久二年(一一九二)の「凶徒退治」が何を示しているのかは不詳である。また、「肥後国有為之庄」について、「有為」とは、肥後国の現実の地名ではなく、「有為の奥山」や「有為の郷」(無常の人間世界、娑婆世界)と似た用法で、「とある」といった程度の意味となろうか。当該部分において近世村落に繋がる「西窪村」(西久保)の名称が現れている点も留意される。

B-4は、佐塚明神の縁起となつている。佐塚明神が三嶋神であることが示されるが、その根拠地を、伊豆国一宮である三嶋大社(現・静岡県三島市)ではなく、芸予諸島の大三島に位置する伊予国一宮にして、全国のオオヤマツミを祭る神社の総本社に当たる大山祇神社(現・愛媛県今治市)に求めている点で、留意される。なお、「別当乃悦上人」については不詳であるが、これを「悦上人」とし、応永年間(一三九四〜一四二八)、鎌倉・覚園寺で活躍した思暎悦石とする見解もある。⁽²³⁾

B-5も問題が多い。「大仏殿寺」などは明らかな誇張表現であり、実在したとは考えがたい。なお、B-5のうち、「武州小机鳥山」について、『茅ヶ崎市史1』は「鳥山」とするが、当該史料の内閣文庫本や、あるいは「勝福寺縁起」を引用する『新編相模国風土記稿』内閣文庫本の当該箇所(常光院条)を確認するかぎり、明らかに「鳥山」の誤りであろう。「小机鳥山」とは、現在の神奈川県港北区小机町・鳥山町、すなわち、武蔵国橋本郡小机村に比定することができる。また、「相州戸室」については、現在の神奈川県厚木市戸室、すなわち、相模国愛甲郡戸室村に比定できると考えられる。ただし、なぜここで、小机や戸室の地が勝福寺に寄進されたとする文脈になるのか、現時点では不明とせざるを得ない。

さて、C-1については、元寇に関する挿話となつている。周知のように、『八幡患童訓』にも明らかなどおり、⁽²⁴⁾モンゴル軍の襲来に伴い、従来から軍神としての崇敬を集

めてきた八幡神(八幡大菩薩)の神威はより一層高まったと考えられるが、当該部分からも、事実か否かは措くとして、その一端を窺い知ることができよう。これに関連して願行房静憲が發揚し、鶴嶺八幡と佐塚明神の「両所」あわせて一二坊が整ったとする点は注意を要する。節を改めて検討したい。

最後に、C-2・3に関して、八幡神の託宣の文言(C-3)については、途中から欠如しており意味が通らない部分もあるが、C-2によれば、元来「勝福寺」という寺名であったものを、元寇に際する八幡神の靈騷(C-1)を契機として、「勝福寺」と改名したこととなる。すなわち、当該史料自体が、「勝福寺」の名は鎌倉後期以降のものであることを明示している。この点にも留意しておきたい。

以上のことから、「勝福寺縁起」が問題の多い史料であることは明らかであるが、一方で、他には認められない独自の伝承が含まれていることも確かであり、容易には看過できない。なお、当該史料の成立年代について付言しておく、B-3部分において、菴園(肥後国有為之庄)に関して、貫文制に則った表記(七百貫文)によって表現されている点に注目したい。このことを重視すれば、当該史料は中世後期の成立と考えるのが妥当ではないだろうか。そうであるとすれば、当該史料の冒頭に傍書されていた永正八年(一一五二)という年号も、当該文書の成立とさほど時期を隔てた年紀ではない可能性も想定できる。

それでは、続けて、「勝福寺縁起」と同様に相州文書に収められている、「八幡大菩薩・佐塚大明神両社之記録」について検討を加えたい。同史料は多くの部分において「勝福寺縁起」と対応しているが、細部においては若干の相違が認められるため、以下、構成要素ごとに分解し、対応部分を示しながら、その内容について確認していきたい。

【史料五】慶安三年(一六五〇)三月二十八日「八幡大菩薩・佐塚大明神両社之記録」

〔C-3〕

彼託多中(三)云、「吾則 聖八幡也。関東為守護之蹟其跡。関東武勇尽則 吾則可帰本国。吾帰本国、則寺社亡。寺社滅、則八州魔軍可」

〔D〕

勝福寺第三世

弘安三年八月十二日

正悟記之

まず当該史料の成立年代であるが、『茅ヶ崎市史1』においても既に「この縁起は、弘安三年の年記を持つものであるが、内容的にはそれ以降のことも含まれており、絶対的信頼を置くことはできない」とする注意が加えられているとあり、史料中に元弘三年(一二三三)の年号や、正平七年/文和元年(一二五二)閏二月二〇日に起った、武蔵野合戦の局地戦である金井原の戦いのが見えており、奥書の年紀である弘安三年(一二八〇)と矛盾している。

具体的な内容について見れば、まずA-1には、細字の傍書で「コ、ハ表粧ノ時書シモノト見ユ」とある(図1参照)。相州文書として写された際の編者の見解であろう。

この見方に従えば、当該史料の原文書は、少なくとも永正八年(一五一一)時点では表装をし直す必要がある程度には劣化していたことになる。文中の「長承三」については、干支や後段の内容との対比から「長承二」の誤りであり、また、「頼朝卒」の件に「三百十二年」であるが、計算上は三二三年間となり、全体として杜撰な叙述である。

A-2については本稿の冒頭に述べたとおりである。

B-1については注目しておくべきことは次の三点である。

第一に、草創の日と位置づけられている長承二年(一二三二)の八月二日という日付が、「勝福寺第三世」という「正悟」が当該史料を記述したとされる弘安三年(一二

八〇)の八月二日と一致している点である。このことは、少なくとも当該史料の成立時点において、史料の作成者にとって、かかる日付が何らかの意味を有していたと想定できる。

第二に、旦那(施主)が「大庭三郎三代先良正」と表現されている点である。これは鎌倉兜の系譜を示していると考えてよい。「大庭三郎」とは大庭景親を指すとみてよく、そうであれば、「良正」は桓武平氏の平良正と考えられる。しかし、『尊卑分脈』平氏系図では、良正は景親にとって六代前の先祖に当たり、「三代先」という表現とは、世代的な矛盾が残る。さらには、『尊卑分脈脱漏』平氏系図、「桓武平氏系図」、「三浦系図」などにおいては、鎌倉兜はいずれも良文流桓武平氏に位置づけられており、大庭氏が平良正の流れを汲むとする所伝は本来的ではないと考えられる。また、歴史的な実態としてはむしろ懐島郷との結びつきが深かったと考えられる景親の兄・懐島景義が当該部分において登場していないということは、鎌倉初期に懐島氏が滅亡したのち、懐島景義・景兼が正しく懐島郷の領主であったことの記憶が薄れたのちの時期に形成された伝承であることを予測せしめよう。

第三に、勝福寺の本尊が「阿弥陀三尊」の「高麗仏」とされている点であるが、このことについては、鶴嶺八幡宮の歴史を捉えるうえでも本質的な事柄であると考えられるため、次節における検討に委ねたい。

続くB-2では、道印法師創建伝承の骨子が提示されているが、豊前国宇佐における鶏足寺は不詳である。常光院と同じ真言宗の寺院のなかにおいて「鶏足寺」の名で知られるのは下野国足利の鶏足寺であろう。この点も、次節に委ねたい。

B-3の内容は、部分的に【史料1・2】に引用され、それに類する史料を經由して、現代の鶴嶺八幡宮の由緒書(資料1)にも引き継がれたと考えられる。安元二年(一

本社者、後冷泉院御宇、伊予守源朝臣頼義奉勅定、征伐安倍貞任之時、有丹
祈之旨、康平十六年秋八月、潜勸請石清水、建瑞籬於当国由比郷（今号之下
若宮）。永保元年二月、陸奥守同朝臣義家加修復、今又奉遷小林郷、致蘋繁
礼奠云々。

しかしながら、前近代の段階では、鶴嶺八幡宮の創始に関し、まったく異なる伝承が
存在していたのである。次節ではその具体的な内容を確認していきたい。

二 「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」およびその関連史料

現代の鶴嶺八幡宮等における由緒としてはほとんど取り上げられていない所伝に、道
印法師創建伝承がある。その基本史料が、冒頭で瞥見した「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」
である。以下、構成要素ごとに分解し、その内容を検討してみたい。

【史料四】「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」

[A-1]

自長承三（癸丑）年至于永正八（辛未）年合三百七十八（九）年也。

頼朝卒（自正治元己未至永正八（辛未）合三百十二年也）。

[A-2]

勝福寺伝起（塔棟札）

[B-1]

勝福寺草創、長承二年（癸丑）八月十二日也。旦那大庭三郎三代先良正也。本尊阿

弥陀三尊高麗仏也。

[B-2]

同道印法師筑紫千佐之繼（鶏）足寺僧也。依有靈験、**社**字之御正躰致持来、而

当寺号鎮守。則八幡大菩薩定也。

[B-3]

関東律寺之最初、相精舎之始也。其後、安元二年、凶徒退治之為願（与）、五間四
面仏殿建。治承元年二月廿五日、懷嶋之内○（号）西窪村（与）駝物馬允跡（跡）、
修善坊跡、中別当跡、三条局跡、伊予房跡、伊賀房跡寄進也。建久二年、又、凶徒
退治為御祈禱料、肥後国有為之庄七百貫所被寄。頼朝之御願（云云）。同年、寺再
興、開山思允文学舎弟（云云）、懷嶋平權守也。

[B-4]

同年、此浦伊予之三嶋出現。今之佐塚宮是也。靈験不常故、勝福寺為別当乃悦上
人（与）大勸進社建、各心随領分寄置也。然間、社僧八坊（云云）。

[B-5]

其後大仏殿寺再興、三重塔二基建立、相州戸室寄進。元弘三年論（論）旨成。其後、
武州金井原合戦為願、武州小机鳥山寄進。

[C-1]

文治三年、天下毛娼（蒙古）国発来、日本国中浦々有御祈禱。其時、此浦御祈禱
之由、依仰、寺僧・社僧・八乙女以下、当寺鎮守**社**字之御正躰掛御興、致精
誠所、自御興之内、鎗矢一鳴出而、南之海上（二）七日七夜、成光物（与）
飛廻（云云）。然間、其後、当寺前任願行上人、東寺為大勸進、勅定下向、同為
三別当□□□□□□坊出来。西所十二坊也。若宮（云云）。其後、兵庫鎮太刀一
対、八幡寄附。勝福寺之有鎮守（二）。

[C-2]

依之、昔勝軍寺云、依靈験、八幡之託宣有時、号勝福寺。

国金井原ノ役ニ降賊ノ祈アリテ、同国小机鳥山郷若十ヲ寄附アリシガ、永祿・元龜年間ノ兵燹ニ罹リテ、堂殿旧記悉ク燼滅ビタリ。又、往昔ハ別当其他全寺等十二坊アリシガ屢々ノ焼失ニ或ハ各村へ離散シ又ハ廢坊トモナリタリ。

(中略)

白雉五年(甲寅)、僧・覚民、回国シテ荒敷中ノ壞祠ニ光輝ノアルヲ見、更ニ二祠ヲ設ケテ佐塚明神ト崇メ、又一堂ヲ立テ、常光院ト号ケス。延長三年(乙酉)、願行此寺ニ住ミ、大山ヲ開キシ後、宇佐八幡宮ヲ横シテ勸請セリ。示後、社前ノ喬木ニ夜々南ノ海ヨリ龍燈アガリシヨリ龍燈山常光院ト称フルナリト伝ヘリ(此伝へ疑ハシキ事モアリヌ。他ニ見アラタヌモ多ケレド、後考ノ一助ニモト爰ニ記ス。)⁽¹⁵⁾

明治初期における未完の官撰地誌である『皇国地誌』⁽¹⁶⁾は、鶴嶺八幡宮の由緒について、まず、「口碑二在」と書き出し、書承の欠如を自供している。また、単に頼義の「東征」と記しており、一般的には前九年合戦と判断すべきであろうが、平忠常の乱と解せなくもない。『皇国地誌』の伝承は、続けて、源義家が現在の鶴嶺八幡宮の位置に遷座したこと、源頼朝がそれを鎌倉鶴岡へ移したことを記し、どちらかと言えば【資料一】に近い書き振りととなっている。続く「又、源頼朝建久中」から「若十ヲ寄附アリシガ」までの部分は、「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」を引用する『新編相模国風土記稿』からの抜粋であろう。「永祿・元龜年間ノ兵燹」以下の部分は、後掲の「勝福寺縁起」や「八幡大菩薩・佐塚大明神両社之記録」との対応は認められない。

また、「白雉五年」以下の記述については、いまここで詳しく立ち入る余裕をもたないが、願行房憲静が宇佐八幡宮を勸請したとする所伝は、「勝福寺縁起」の記述などとの関連で、看過できない点である。

次に、念のため、同じく明治初期段階における別の地誌も取り上げておきたい。

【史料二】明治十九年(二八八六)『国誌下調』相模国高座郡浜之郷村・鶴嶺八幡大神条・雜項⁽¹⁸⁾

口碑二伝フ在、昔源頼義東征ノ際、岩清水八幡宮ヲ模シ本郡懷島郷矢畑村ノ本社丘ニ一社ヲ創建シ後、源義家現地ニ奉遷セシモノニシテ、治承年間源頼朝鎌倉郡鶴ヶ岡へ移サレシナリ。因テ本社八幡宮トモ称ス。或ハ源頼朝治承年間懷島郷ノ地若干ヲ寄附シ、又、建久年中肥後国有為ノ地七百貫文ヲ寄附シ、懷島権守平景能之ヲ修理シ、元弘元年辛未武州金井原ノ役ニ降賊ヲ祈リ、同州小机鳥山ノ郷寄附アリシト云フ。永祿・元龜年間、兵燹ニ罹リ、堂宇旧記燼滅ス。其確証ナシ。惜ムベシ。一見して明らかのように、『国誌下調』の記述は、『皇国地誌』の内容のほぼ忠実な引き写しである。【史料一】に掲げた「白雉五年」以下の記述は認められない。

さて、以上の状況から、現代の鶴嶺八幡宮等において由緒として示されている所伝は、おそらく前近代以来の書承にもとづくものではなく、明治初期段階においては、『皇国地誌』や『国誌下調』に類似の記録しかなかったと想定することができるであろう。かかる簡素な伝えでは、現代の鶴嶺八幡宮における【資料一】のような解釈も、あるいは、本社宮・本社丘における【資料一・三】のような見方も、いずれも成り立ち得るであろう。【史料一・二】に類する伝えから派生した解釈が、現在の由緒と言えるのではないだろうか。そもそも、『新編相模国風土記稿』巻六一・村里部・高座郡卷三・矢畑村・本社明神社条によれば、近世段階の本社宮は「祭神詳ナラズ」とあり、八幡宮との関係は必ずしも明確ではない。

ところで、上掲の【資料一・三】や【史料一・二】における由緒が、鶴岡八幡宮そのものの創建伝承と極めて類似していることは、誰の目にも明白であろう。

【史料三】『吾妻鏡』治承四年(一一八〇)一〇月二二日条⁽²⁰⁾

矢畑における八幡宮の創始の時期について、【資料一】では前九年合戦時のこととされ、^(B) ていたのに対して、【資料二】では長元三年(一〇三〇)、「下総の乱」、すなわち平忠常の乱に伴うもので、名は「懷島八幡宮」と明記されている。第二に、鎌倉への遷座の時期について、【資料一】では治承年間(一一一三)のことに、【資料二】では康平年間(一一一六)のことに、【資料一】では「乱橋の元八幡」とも明記されていることから、これが鎌倉のいわゆる由比若宮を指していることは明らかであろう。第三に、矢畑の社を現在の鶴嶺八幡宮の位置に遷座した者について、【資料一】では単に「源家」とされていたのに対して、【資料二】では源義家と明記されており、後三年合戦(永保三年(一一〇八)〜寛治元年(一一〇八七))後の、寛治三年のことにされている。

なお、天保年間以前の矢畑の本社宮は、現位置ではなく「本社丘」と称されている南方約〇・五kmの地に位置していたらしい。そのことは、次に掲げる、現在、同地にある説明板に明らかである。平成二四年(二〇一二)四月のものである。

【資料三】「本社丘」

本社丘は矢畑の鎮守 本社宮 発祥の地である。天保年間に行われたと伝えられる本社宮遷座の後も、旧跡として崇敬され 大切に保存されている。

本社宮はその後 関東大震災による遷座を経て、この地の北方約四五〇m(矢畑一四二番地)に鎮座している。

矢畑の伝承によれば、平安時代中期 平中常の乱を平定に向かう途次、源頼義がこの地に源氏の氏神である石清水八幡宮を勧請して戦勝を祈願した。

陸奥守となり前九年の役に向かう頼義は 長子義家と再度戦勝を祈願、平定後 当八幡宮を鎌倉由比郷に勧請し、鶴嶺八幡宮を創建した。後に、頼朝が現在の雪ノ下に遷座。

後三年の役平定後 義家は浜之郷に神域を設けて遷座、鶴嶺八幡宮を創建したと伝える。本社丘に残った社は矢畑の鎮守となり、「本社宮」として今に伝わる。

なお、別に 江戸時代後期の地誌『新編相模国風土記稿』の浜之郷村 鶴嶺八幡宮の項に「社伝に 長承二年筑紫宇佐鶏足寺の僧が八幡本地種子の正体を奉じ来て祀る」との創建に関する記載もある。

この【資料三】は、【資料二】と同じく、本社宮の総代の文責であり、相互に時代は異なるが、認識については共通性が認められる。すなわち、両資料は、【資料一】とは異なり、矢畑における八幡宮の創始期を平中常の乱時とし、鎌倉への遷座時期は前九年合戦段階の頼義の時期とし、矢畑の社を現在の鶴嶺八幡宮の位置に遷座した者を後三年合戦後の義家としている。

それでは、位置づけがやや異なる【資料二】も含めて、これらに共通する河内源氏や前九年・後三年合戦と関連づけられた鶴嶺八幡宮の由緒は、史料上、いかにたどり得るのであろうか。

【史料一】明治二二年(一八七九)『皇国地誌』村誌・相模国高座郡浜之郷村・鶴嶺八幡神社或ハ本社八幡宮条^(H)

菅田別尊・大鶴鶴尊ヲ奉祀ル。又佐塚明神ヲ合セ祀ル。勧請歳月詳ナラズ。口碑ニ在、昔源頼義東征ノ時、石清水八幡宮ヲ摸シテ懷島郷ナル本社丘今矢畑村ニアリ一社ヲ建テラル、後、源義家此地ニ奉遷シ、モノニシテ、治承中或ハ源頼朝鎌倉鶴岡へ移サレシナランサレバ、其旧本社ナルヲ以テ本社八幡宮トモ称フ(社地ノ四周ノ田畑ヲ今尚本社ト字ズ)。又、源頼朝建久中肥後有為之庄七百貫文ヲ寄附アリ。地頭懷島権守平景能之ヲ修理ス。後弘安四年(辛巳)蒙古退治ノ祈リアリシニ、一矢神輿ヨリ発リテ南海ノ波上ニ七日七夜光輝鳴動セリ。又、元弘元年(辛未)武蔵

相模国茅ヶ崎の総社として往古より八幡信仰の本地として名高い。康平年間(一〇五八)一、〇六五)源頼義が東征の際、石清水八幡宮にならい、本郡懷島郷矢畑村本社に一社を創立し、後に源家が現地に奉遷したと云う。更に治承年間(一一七七)一、一八二)に源頼朝が鎌倉由比郷に遷したが、その旧社は存続し本社八幡と称したものと伝えられている。

源氏代々が篤く崇敬し、源頼朝は治承年間に懷島の地若干を寄進し、また建久年間(一一九〇)一、一九九)に肥後国有為の庄七百貫を寄せ、懷島権守平景能をして社殿の修復を命じた。弘安四年(一一八二)には蒙古軍退散を祈り、その後、永祿・元龜年間(一、五五八)一、五七三)に兵火に罹り堂宇・古記録等を焼失した。

古くは、本社に別当に十二坊があったが各々に離散し廃坊となった。正保年間(一、六四四)一、六四八)別立常光院の住僧朝恵は山岡氏と相計り社殿を再建した。また参道を整備し松を植えた。慶安二年(一、六四九)八月には徳川家光が本村の地七石の朱印地を寄進した。明治維新の神仏分離に際し、別立常光院が復飾して祠堂となる。明治六年村社に、昭和九年九月六日に郷社に列格。⁽¹⁰⁾

当該資料の第二段落によると、「東征」、すなわち、「康平年間」とあるその時期からすれば前九年合戦(永承六年(一一〇五)一、康平五年(一一〇六)一)の際に、源頼義が茅ヶ崎地域の矢畑に一社を創立、それを後代、「源家」が現在地に移転させ、さらにその社を源頼朝が鎌倉の由比に移したが、旧社も存続して「本社八幡」の名称が発生したとされる。第二段落は、後述に明らかのように、おもに「鶴嶺八幡別立勝福寺縁起」に由来する記述で、末尾の「永祿・元龜」の件は、これも後掲の『皇国地誌』や『国誌下調』と共通している。第三段落も、後掲の、慶安三年(一六五〇)三月二十八日「八幡大

菩薩・佐塚大明神両社之記録」による部分が大きいと考えられる。当該資料の範囲では、矢畑にあった社を現在の鶴嶺八幡宮の位置へ移した「源家」が誰であったか不明であるが、後掲の【資料二・三】や【史料一・二】との対応からすれば、あるいは「源義家」とあるべきものの誤りであろうか。

次に、【資料一】によると鶴嶺八幡宮が元来位置していたとされる茅ヶ崎市矢畑所在の本社宮について、その説明板を確認したい。昭和五年(一九七八)三月、本社宮の神社総代によるものである。

【資料二】「本社宮の由緒由来」

長元三年(一一〇三)源頼義は勅命により東征(下総の乱)の途次、当村の南鎌倉街道に接した佐塚大明神の丘に、源家の守護神石清水八幡宮(菅田別命)を勧請、関東東の守護神として懷島八幡宮を創建、戦勝を祈願した。

天喜三年(一一五五)鎮守府將軍頼義は、長子八幡太郎義家(十三才)と安部一族の乱(前九年の役)に向かう途次、再度懷島八幡宮に戦勝を祈願し、乱を平定したのを機会に神恩に報いて康平六年(一一〇六)三)懷島八幡宮を鎌倉に勧請、鶴嶺八幡宮を創建した。(乱橋の元八幡)

寛治三年(一一〇九)義家は度重なる神恩に感謝の意をこめて、広大なる神域を隣村浜之郷に設け、鶴嶺八幡宮を創建し、以来太子免の懷島八幡宮は、本社宮と改称され、当村の鎮守となり、靈験灼かなる神として崇敬されて来た。

殊に享保二年(一七一七)よりの祭典は氏子総出で、超大幟を立てるなど盛大に行なわれて来たが、天保年間に現在地の南隣りに遷座して参拜と管理を便にし、昭和二年(一九二七)現在地に再遷座したものである。

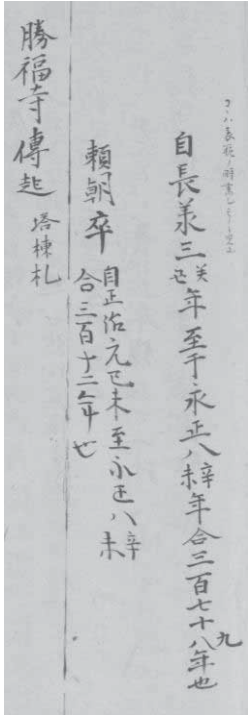
ここにおいて既に、【資料一】との相違点が認められるであろう。すなわち、第一に、

「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」に関する覚書

渡部 敦寛*

はじめに

「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」と呼ばれる史料がある。原本は失われ、現存しない。相州文書の一部として内閣文庫に所蔵されているものが唯一の写本である。⁽¹⁾ 勝福寺とは、神奈川県茅ヶ崎市域の南西部に位置する鶴嶺八幡宮の境内にかつて存在したその別当寺・常光院の旧称であり、勝福寺そのものが鶴嶺八幡宮の別当寺であった。当該史料は、表題によれば「勝福寺伝起」と称すべき史料であると思われるが【図1】参照、いましばらくは『茅ヶ崎市史1』における史料名に従っておく。⁽²⁾ また、表題下の注記には「塔棟札」とあるため、あるいは本史料の内容は元來棟札に記されていた文言をいづれかの段階で紙の文書に転記したものとも考えられるが、現時点では不明とせざるを得ない。なお、周知のとおり、本史料が収められている相州文書とは、天保年間（一八三〇〜一八四四）に『新編相模国風土記稿』の編纂資料として調査・模写された古文書を編集したものである。⁽³⁾



【図1】「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」（内閣文庫所蔵、国立公文書館デジタルアーカイブより引用）

「鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」の内容は、後述のとおり、現在、鶴嶺八幡宮等の由緒としてはほとんど採用されていないと言ってよい。しかし、当該史料は同宮の成立について考えるうえで看過できない記述を含んでいる。そもそも同宮は、近世段階において浜之郷・下町屋・田蔵・西久保・矢畑・松尾・茅ヶ崎の七ヶ村の鎮守であり、近世段階まで並び建っていた佐塚明神とともに、古くから同地域における中核的な神社であり、地域の歴史や過去の景観を復元するにあたっても重要な地点であると言える。⁽⁴⁾ したがって、本稿では、まず、現代の鶴嶺八幡宮等の由緒に関する記述の内容を確認し、次に、当該史料とその関連史料の記述内容について具体的に検討を加え、最後に、当該史料が現在、鶴嶺八幡宮の由緒としては採用されていない背景とその周辺の状況についての位置づけを試みたい。本稿は、鶴嶺八幡宮の成立についてその一端に触れる試論に過ぎないが、かかる課題への取り組みは、とりもなおさず中世懐島郷の具体的様相を明らかにすることであり、ひいては懐島郷を中心的な空間としていた茅ヶ崎市域の中世史像の彫琢、あるいはその後の歴史的展開も含めた歴史像を浮き彫りにすることに繋がると考えられる。⁽⁵⁾

一 現代の鶴嶺八幡宮等における由緒

まず、現在、鶴嶺八幡宮現地に掲げられている説明板を確認したい。

【資料一】「鶴嶺八幡宮 御由緒」

茅ヶ崎市博物館研究紀要 1

令和 6 年 (2024) 3 月 発行

編集 茅ヶ崎市博物館
253-0006 神奈川県茅ヶ崎市堤 3786-1
電 話 0467-81-5607

印刷 株式会社 大成企画

発行 茅ヶ崎市教育委員会
253-8686 神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎 1-1-1
電話代表 0467-82-1111

ISSN 2759-2383